二〇一五年度　博士学位申請論文

陳述副詞の史的研究

―推量を表す副詞を中心に―

指導教授　沖森　卓也
文学研究科　日本文学専攻
博士課程後期課程
１１ｐｇ００５ｗ
李　知　殷

目次

序章・・・1
第一節　研究の目的・・・1
第二節　先行研究の概観・・・3
一　山田孝雄（一九〇八・一九三六）・・・4
二　時枝誠記（一九五〇）・・・6
三　渡辺　実（一九七一）・・・7
四　工藤　浩（一九八二）・・・8
第三節　本研究の立場・・・10
第四節　研究方法・・・12
一　文献資料及び時代区分・・・12
二　研究対象及び分析の方法・・・14
第一章　「きっと」について・・・17
第一節　はじめに・・・17
第二節　中古から近世における「きっと」の変遷過程・・・18
一　中古・・・18
二　中世〜近世・・・20
二・一　中世前期・・・20

二・二　中世後期〜近世・・・24
第三節　明治以降における「きっと」・・・33
第四節　「きっと」とその周辺・・・38
第五節　まとめ・・・41
第二章　「おそらく」について・・・44
第一節　はじめに・・・44
第二節　上代の「おそるらくは」・・・47
第三節　中古から近世における「おそらく」の変遷過程・・・51
一　中古〜中世・・・51
二　近世・・・55
第四節　明治以降における「おそらく」・・・60
一　「おそらく」の共起形式・・・60
二　「おそらくば」の出現・・・65
第五節　まとめ・・・66
第三章　「たぶん」について・・・69
第一節　はじめに・・・69
第二節　中世から近世における「たぶん」の変遷過程・・・72
一　中世・・・72
一・一　中世前期・・・72
一・二　中世後期・・・75

二　近世・・・77
第三節　明治以降における「たぶん」とその周辺・・・83
第四節　まとめ・・・87
第四章　「おおかた」について・・・89
第一節　はじめに・・・89
第二節　中古の「おおかた」・・・91
一　「おおかた＋α」類・・・91
一・一　名詞的用法・・・91
一・二　形容動詞的用法・・・94
二　単独で現れる「おおかたφ」類・・・96
二・一　「概括的」という意味・・・96
二・二　文末表現との共起関係・・・97
第三節　中世の「おおかた」・・・100
第四節　近世の「おおかた」・・・102
第五節　明治以降の「おおかた」・・・107
第六節　まとめ・・・109
第五章　「たいてい」について・・・111
第一節　はじめに・・・111
第二節　「たいてい」の語源及び出自・・・113
第三節　中世から近世における「たいてい」変遷過程・・・115

一　中世……115
二　近世……116
二・一　名詞的用法……117
二・二　形容動詞的用法……119
二・三　副詞的用法……121
第四節　「だいたい」の用法……125
第五節　明治以降における「たいてい」と「だいたい」……127
一　「たいてい」の使用様相……127
二　「だいたい」の使用様相……132
第六節　まとめ……135
第六章　「たいがい」について……138
第一節　はじめに……138
第二節　中古から近世における「たいがい」の変遷過程……139
一　中古～中世……139
一・一「たいがい＋α」類……140
一・二「たいがいφ」類……142
二　近世……143
二・一「たいがい＋α」類……144
二・二「たいがいφ」類……147
二・三　陳述性の発生……149

第三節　明治以降における「たいがい」……150
第四節　まとめ……155
終　章　陳述副詞への進化……157
第一節　副詞における推量性の発生時期……157
第二節　推量的意味の陳述副詞への傾斜……165
おわりに……173

【参考文献及び資料一覧】……176
【参考資料】……184

図表目次

図目次

〈図一〉推量的意味を表す陳述副詞の発生時期……164
〈図二〉「たいてい」の否定の陳述副詞……166
〈図三〉「おそらく」の陳述副詞化……169

表目次

〈表一〉山田孝雄による陳述副詞の下位分類……5
〈表二〉「現実認識的な叙法副詞」のカテゴリ……8
〈表三〉山田・時枝・渡辺・工藤による「陳述副詞」……10
〈表一－一〉「きっと」と文末の共起関係(例)……34
〈表一－二〉推量表現の文末形式(例)……35
〈表二－一〉副詞「おそらく」と文末表現（例）……46
〈表二－二〉「おそらく」と文末との共起関係(例)……61
〈表二－三〉推量表現の文末形式(例)……61
〈表三－一〉副詞「たぶん」と文末表現の共起関係(例)……70
〈表三－二〉推量表現の形式(例)……85
〈表四－一〉口語の「おおかた」における年度別・用法別(例)……107

〈表五-一〉「たいてい」と文末表現との共起関係(例)……………………………… 129
〈表六-一〉「たいがい」の共起形式(例)…………………………………………… 152

序　章

本稿は、日本語史において、副詞、特に推量的意味を表す陳述副詞がどのような経緯を経て使われはじめ、現代に至っているのか、その変遷過程を考察するものである。ここでは「きっと」「おそらく」「たぶん」「おおかた」「たいてい」「たいがい」という、現代語で、いわゆる陳述副詞として扱われるものを研究対象とする。語それぞれの歴史的変遷過程を分析することによって、陳述副詞の全体像が把握できるように思われる。

本稿は「序章」「本章」「終章」によって構成される。「序章」では、本稿の目的を明らかにし、陳述副詞に関わる先行研究を概観したうえで、本研究の立場や分析方法などを示す。「本章」は第一章から第六章となり、前に挙げた六つの陳述副詞に関する歴史的変遷を分析する。「終章」では、本研究の考察をまとめるとともに今後の課題を述べる。特に、「本章」で考察した陳述副詞の変遷過程に基づいて、この六つの副詞がどのような由来を持っているのか、そして、いつ頃から陳述性が生じるようになったのかなど、それぞれの副詞の特徴を中心に論ずることとする。

第一節　研究の目的

現代日本語における副詞は「品詞の一種。語形変化をもたず、単独で用言またはそれ相当の語句を修飾(限定・強調)することを基本職能とする語」[1]また、「文中での働きが連用修飾という一つの機能にほぼ固定し

たため、活用や格変化をもたない[二]語」と定義されている。しかし、このような副詞は名詞や動詞などの他品詞と違って、機能面においてその境界があいまいで、周辺的な分野として扱われている。例えば「リンゴを二つ買った」[三]の数量を表す「二つ」は、述語「買った」を修飾する。「きれいに」かたづける」[四]の「きれいに」は形容動詞に助詞「に」が付いた形であり、述語「かたづける」を修飾する。「二つ」「きれいに」はそれぞれ名詞、形容動詞という異なる品詞であるが、文中での働きは副詞のように使われる。このように複雑な機能をもつ副詞は他のどの品詞にも属せしめることのできない語を収容するために設けられた[五]とされ、多くの研究者によって「落ちこぼれ、しわよせ、はきだめ、ふきだまり、ゴミタメ、ゴミ箱的存在、『ごみ箱』的様相、スラム街」などと名付けられている[六]。つまり、様々なタイプをもつ副詞が絡み合って副詞研究の遅れにまで影響を与えたと言っても過言ではない。

従来の副詞研究と言えば、管見の限り、ほぼ構文的機能の分析を中心とした共時的研究が多い。特に、本研究と関連のある陳述副詞においても、現代語の副詞の意義特徴や、文末表現を中心とした副詞との共起関係に焦点を当てたものが多い。一方、通時的な視点から個々の副詞がどのような過程を経て今の意義や共起性をもつようになったのかについて考察した研究は、まだ十分に進んでいないと見られる。また、副詞の歴史的研究と言っても個別の語史を扱った研究であって、主要な観点との関わりについていくつか触れるにとどまっている(川瀬 二〇一三)。

このように、副詞を根本的に究明するためには、時代を遡ってどのように変化したか、なぜそのような変化が見られるようになったかについての史的研究が必要である。この点において沖森(二〇一二)は、言語というものは人間の根源的な活動を支えるものの一つであり、その活動の時を常に新たな表現の場であると述べている。即ち、言語は時とともに変化するということであろう。言語と時との関係はかなり密接で、言語研究のアプローチの一つとして歴史的変化を捉えるという方法が重要視される[七]。

したがって、本稿では歴史的観点という立場から副詞の史的研究を行う。この際、いわゆる陳述副詞と呼ばれる副詞のうち、推量の意を表す一群のものを分析の対象とする。「きっと」「おそらく」「たぶん」「おおかた」「たいてい」「たいがい」といった六つの副詞を対象とすることにした。これらの六つの副詞は、工藤浩(一九八二)によっていわゆる陳述副詞(工藤は「叙法副詞」と称する)と分類されており、何れも推量の文末表現と呼応関係にあるという共通点を持つ。また、他の品詞から副詞に転成したものもあり、互いに類義関係にある。

具体的には後述するが、六つの副詞を対象にして、個々の歴史的変遷過程を考察し、そこに見られる副詞群の変化の様相を一つのまとまりとして一般化させる。このまとまりは、日本語教育の現場などで言語現象の一種として扱うことができると考えられる。

第二節　先行研究の概観

本節では、従来の副詞研究のうち、日本語学的立場から、陳述副詞がどのように位置づけられてきたかについて概観する。ただし、既に副詞に関する各種の書籍や論文などで多く触れていることから、ここでは簡略に概観することにとどめることとする[八]。まず、基本的な理解として、副詞論の立場を明確にする必要がある。副詞の認定において、構造の面から見る立場と機能の面から見る立場に分けられる。ここで取り上げる、山田孝雄(一九〇八・一九三六)、時枝誠記(一九五〇)は前者に近く、渡辺 実(一九七一)、工藤 浩(一九八二)は後者に近いと考えられる。

以上、二つの立場から陳述副詞がどのような流れで位置づけられてきたのかについて概観する。

一　山田孝雄[九]（一九〇八・一九三六）

副詞研究の始発点といわれる山田孝雄（一九〇八・一九三六）は副詞を次のように定義している。

語に依存する副詞は又これを大別して属性の装定をなすものと陳述の装定をなすものとの二とするを得べし。この二別は用言に属性と陳述の力との二要素の存する事実に並行するものなる。

『日本文法学概論』（一九三六）三七二頁

このように、山田は「副詞」に相当する「語の副詞」を「属性副詞」と「陳述副詞」に分類する。そして、「属性副詞」は「程度副詞」と「情態副詞」に再分類している。一般的に副詞の分類と言われるのは「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」の三分類であり、「状態副詞」は「あきらか、はるか」、「程度副詞」は「非常に、とても」、「陳述副詞」は「きっと、たぶん」などがある。このなか、「陳述副詞」について、山田はさらに次のように定義している。

陳述の副詞は述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方式に一定の制約あるものなり。この陳述の副詞は用言の実質上の意義即ちその示す属性には関係なく、この陳述の方法のみを装定するものなれば、用言が述語としての用法に立たぬ時には装定することなきものなり。

『同右』（三八八頁）

つまり、陳述副詞は「**きっと**失敗するだろう」「**たぶん**明日は雨が降るだろう」という例にみられるように推量を表す副詞「きっと」「たぶん」が現れると必ず「だろう」という特定の述語が来るのである。言い

換えれば、特定の副詞に対して述語は一定な制約をもつものに限られているということであろう。また、山田は陳述副詞を次のように下位分類している。

〈表一〉山田孝雄による陳述副詞の下位分類

一　述語に断言を要するもの

○肯定を要するもの

かならず　もつとも　是非　まさに

○打消を要するもの

いさ　え　さらさら　つやつや　つゆ　ゆめ

○強めたる意をあらはすもの。述語はその意によりて肯定又は打消をなす

いやしくも　さつが

○決意をあらはすもの。述語はその意によりて肯定又は打消をなす

是非　所詮

○比況をあらはすもの。述語はその意によりて肯定又は打消をなす

恰も　さも

二　述語に疑惑仮説などを要するもの

○述語に疑問の語を要するもの

まぞ　いかゞ　あに　いかで

○述語に仮定条件を要するもの

もし　たとひ　よし

以上、山田による「陳述副詞」を見てきたが、上述したように、〈表一〉の下位分類には山田の提唱する陳述副詞の特徴がよく現れている。それは陳述副詞と述語には一定の制約があるということである。

二　時枝誠記[一〇]（一九五〇）

時枝誠記（一九五〇）は、語の根本的な性格を表現過程に求めて「言語過程説」を提唱した。「言語過程説」とは「語は思想内容の一回過程によって成立する言語表現」（時枝　一九五〇：五〇）である。例えば、［ハナ］という音声結合をもって「花」を表すとすると、これは一語で一回の過程の表現になる。しかし、「ツバキノハナ」は、［ツバキ］［ノ］［ハナ］という三回の過程の表現になる[一一]ことから一語とは言えない。

このような言語過程説に基づいて、時枝は「語」を客観的な世界を記述する「詞」と、事柄に対する話者の感情・気分・意志・欲望などを表す「辞」とに分類し、一語には「詞」と「辞」が同時に現れない「詞辞説」の立場をとっている。

そこで、「辞」を修飾する副詞を陳述副詞と称し、「彼はあのことを**決して**忘れない」の副詞「決して」は否定の「ない」と呼応するとして、「決して～ない」を一つの辞として捉えている[一二]。ただ、副詞「きっと」は推量の「だろう」形と呼応するが、それ以外にも、意志・命令などとも共起する。逆に、述語の「だろう」形の立場から見ると、副詞「きっと」のほか、「たぶん」「おそらく」などとも共起する。これらのことから、副詞の意味とその呼応関係を一つの辞ではなく、別のものとして考える必要があることがさまざまな研究者によって指摘されている。

以上、時枝は（山田の）「陳述」という要素を「辞」と称し、陳述副詞は「辞」を修飾するものであるとした。山田や時枝は副詞と述語に何らかの制約があることは認めているものの、時枝の「辞」においては主観

的であると指摘されている。

三　渡辺　実[一三]（一九七一）

これまで見てきた山田孝雄（一九〇八・一九三六）や時枝誠記（一九五〇）の立場とは違って、渡辺　実（一九七一）は機能の面から副詞を捉えている。品詞分類において「構文論的職能」に立脚して副詞の働きを説明している。「構文論的職能」は言語表現の有機的統一性を形成するために、言語の内面的意義に託される各種の役割の総称である。これは「素材表示の職能」（いわゆる「詞」に当たる）・「関係構成の職能」（いわゆる「辞」に当たる）に二大別される[一四]。関係構成の職能はさらに連体・連用・誘導・接続・並列・陳述の職能に分類される。

六つの職能のうち、本研究と関連するのは「関係構成の職能」の「誘導の職能」である。渡辺は陳述の副詞は動作、性質、情態、事物、その他に無制限であるとし、例えば「きっと」は推量表現を予告するものである、特定の表現を予定し予告することが誘導の職能であるとした（『国語構文論』三一一頁）。誘導の職能の概念を適用して、いわゆる陳述副詞を捉え直し[一五]、「誘導副詞」と呼びかえている。一定の陳述表現が副詞に続くことから「誘導副詞」と呼び、典型的な「誘導副詞」として「きっと、決して、たとえ、もし」などを挙げている。

しかし、渡辺の学説にも、副詞「きっと」は推量のほかに複数の表現と共起する一方、推量の「だろう」形も複数の副詞と共起することは誘導という概念では説明できないという問題点が残されている。

四　工藤　浩[一六]（一九八二）

工藤 浩（一九八二）は、詞的か辞的か、客観的か主観的か、対象的か作用的か、ことがら的か陳述的かなど、このように文を二大別して考え、既存の学説より「陳述性」を広くとらえている。「陳述性」という用語を「単語や単語の組合せを文として成り立たせる諸特性」と定義付け、「陳述副詞」を「叙法副詞」「とりたて副詞」「評価副詞」に分けている。「叙法副詞」とは、山田の陳述副詞の中核的な一部として「叙法性（モダリティ）」と関わるものである。ここでいう「叙法性」は話し手の立場からする、文の叙述内容と現実、および聞き手との関係づけの文法的表現を表す[一七]。工藤は叙法副詞に関する一覧表を作っている。一覧表は稿末の【参考資料】に記し、ここでは本論文と関連がある部分だけを示すことにする。以下の〈表二〉である。

〈表二〉「現実認識的な叙法副詞」のカテゴリ

基本叙法

○確信―**きっと**　かならず　ぜったい（に）　断じて

○推測―**多分**　**恐らく**　さぞ　定めし　**大方**　／　**大概**　**大抵**

／　まさか　よもや　／　たしか　もしや　さては

叙法副詞の一覧表のうち、本稿の研究対象となる六つの副詞は「現実認識的な叙法副詞」の「基本叙法」のカテゴリに含まれている。詳細に分けて考えてみると「確信」の「きっと」を除外して「たぶん、おそらく、おおかた、たいてい、たいがい」は「推測」の項目に含まれている。

工藤（一九八二：六五）は、〈表二〉の「確信」「推測」に「推定」（どうやら、どうも、よほど等）、「不確定」

（あるいは、もしかすれば、ひょっとしたら等）を加えて四種の相互関係についても分析している。結論から言うと、次のような二つの面で連続的な関係にあるとしている。一つ目は対象面から言えば事態現実の確実さ（蓋然性）、作用面から言えば話し手の確信の度合いの連続性であり、二つ目は叙法性の強弱による連続性である。いずれも「確信→推測→推定→不確定」で叙法性が低くなっていくと述べている。つまり、「確信」→「推測」になると対象面では蓋然性、作用面では話し手の確信の度合いが低くなるという連続性が見られると述べている。

ところで、「きっと」「たいてい」「たいがい」は「確信」あるいは「推測」の意味の他にも含まれている。「きっと」「たいてい」「たいがい」は「現実認識的な叙法」の「擬似叙法」の「習慣・確率 etc.」にも属している。（因みに、「だいたい」は「下位叙法」の「説き起し」に属す）

このように、工藤は既存の「陳述性」を広く捉えて、叙法性をもつ叙法副詞を取り立てている。本研究においても、工藤の「叙法副詞」の立場に従う。

以上、日本語学的立場から陳述副詞がどのように捉えられているかを概観した。山田孝雄によって陳述副詞の概念が始まり、その後、様々な学者から陳述副詞について再整理され続けてきた。そして、陳述副詞に関する個別研究も時代とともに進んできたはずであるが、いずれも共時的な観点から陳述副詞の意義を説き、そこから副詞の共起性を考察しようとするものが主流である。共起関係においては、副詞の意味機能の違いによって、どのような環境で起きるか、それとも制限されるか、という傾向性について現代語を中心に把握しようとしている[一八]。

したがって、共時的観点における研究の限界性を乗り越えるには、歴史的研究が必要であると考えられる。管見によれば、これまで歴史的観点から個別の副詞を考察したものとしては、濱田敦他（二〇〇三）、鳴海伸一（二〇一三）、川瀬 卓（二〇一三）などしか見当たらない。いずれも副詞の史的展開を扱っているが、主に

個々の副詞の共時的研究、あるいは意味用法の変化が明確に見える程度性に関わる副詞を対象とするものである。本研究のように、日本語史という枠の中で、「推量」という共通性をもつ個別副詞を用いて、初出から現在に至るまでの変遷過程を考察し、そこに見られる陳述性の傾向を全体像として考察しようとする研究はほとんどないといっても過言ではない。つまり、共時的観点からみたさまざまな個々の陳述副詞の意義や共起性を念頭に、通時的観点から副詞を考察することによって、互いがもつ限界性を乗り越えることができると考えられる。

第三節　本研究の立場

本節では、従来の先行研究を踏まえて、陳述副詞に対する本研究の立場を明らかにする。上述したように、「陳述副詞」においては、研究者によってさまざまな用語による見解がある。ただし、文を「叙述内容」と「陳述」という二つに分けて考えることや、副詞と陳述の共起性を認めることは共通していると見られる。

さて、陳述副詞に対する山田孝雄・時枝誠記・渡辺 実・工藤 浩の立場を改めて〈表三〉にまとめることにする。

〈表三〉 山田・時枝・渡辺・工藤による「陳述副詞」

○山田孝雄　一定の制約をもつ述語の陳述を修飾する

○時枝誠記　話者の主観的態度を表す辞と結びつく

○渡辺　実　誘導副詞と呼び換え、述語の特定の表現を予告し誘導する

いずれも「陳述」の概念を基にしていることから、本稿では広い意味で「陳述副詞」と呼び、その機能は工藤の叙法副詞に従うことにする。つまり、「陳述副詞」は「文末表現と共起することから、ある事柄に対して話し手の心的態度が現れるようになる」といった意味を表す。ただし、文末表現との共起関係においては分類基準を設定する。それについては次節で詳しく述べる。

さらに、本稿でよく用いられるいくつかの用語の定義をまとめておきたい。

「共起」または「呼応」、「推量」については、主に杉村の研究(二〇〇九)[一九]に負って定義づける。杉村は「共起」「呼応」について工藤(一九八二)の言葉を借りて説明している。「『共起』現象は、同じレベルに同居しているということだから、比較的単純に形式化しうる。『呼応』は、単なる同居ではなく、むすびつきであるから、つきつめていけば、『意味』的関係である。「ぜひ私も行きたい。」の「ぜひ」を話し手の希望と呼応していると見るか、有情主体の希望と呼応しているとみるか、実現の必要性と呼応していると見るか、という問題が生じるのも、このためである。最終的には分析者の解釈力が問われることになる。」と述べて、「比較的単純に形式化しうる『共起』と『呼応』は基本的に平行関係であることも事実である」とした。そして「推量」においては、記憶のままに捉えることを『認識』、事態の成立が不確かでその成立可能性について思考をめぐらすことを『推量』と区別し、事態→認識→推量といった関係性を示した。

以上のことによって、本稿では、陳述副詞化していく際、副詞と文末表現の間に新しい結びつきが生じたり、消長したりする過程を考慮して、副詞と文末表現を「共起」関係とする。また、話し手が事態を認識し、そこから話し手の推量といった判断が現れるということを「推量」と定義する。

なお、先ほどの「陳述副詞化」というのは、文末表現と関係性を結びつきはじめ、推量的意味を表すよう

に至った、その全体的な過程を意味する。

第四節　研究方法

一　文献資料及び時代区分

史的研究を行う場合、調査対象となる文献資料がまずは重要である。どのような資料を用いるかは、研究対象の歴史的変遷過程の考察に大きく影響を与えられる。そこで、最も重要なのは全時代をふまえる資料が必要であるということである。すなわち、当時の性格をよく見せる幅広いジャンルからの多くの作品が必要である。

本研究の資料として『新編日本古典文学全集』(小学館)(以下『新全集』と称する)、『日本古典文学大系』(岩波書店)(以下『大系』と称する)や各種の索引類、辞典類を用いることにした。場合によって、『新日本古典文学大系』(岩波書店)(以下『新大系』と称する)、『噺本大系』(東京堂出版)(以下『噺』と称する)も用いる。(具体的な作品名は本稿の末尾の【資料一覧】に記す)本研究の中心的な資料とする『新全集』や『大系』には各時代の主な作品が収録され、当時の時代性が反映されていると考えられる。

文献の時代性の留意点について沖森(二〇一〇)は次のように述べている。

文献が原本であるのか、著者または編者の自筆本であるのか、また写本(後人が転写したも)であるのか、また出版者であれば初版であるのか、いつの版行であるのかなどというように、その言語事象がどの年代のも

のを反映しているかということを厳密に把握しておく必要がある。　　沖森（二〇一〇）七頁

このように文献の時代性に留意して当時を代表する作品が収録されている『新全集』を大きい枠として、その中から『大系』、索引類、辞典類で補うことにする。『新全集』がもつ時代性の限界を少しでも超えることができると考えるからである。

また、明治時代以降は、日本語、特に語彙の面で激しい変化を遂げた時代でありながら、この変化と共に作品のジャンルや資料も豊富になる時期である。雑誌『太陽』は当時の代表的なものとして、当時の言語の実態を反映した資料が収録されている。このことから本稿では「雑誌『太陽』コーパス」を用いて、その中でも口語を中心に陳述副詞的性格である副詞と文末表現の共起形式を見ることにする。

次に、時代の区分が重要である。言語史の時代区分は、言語の通時態なるものの実証に立脚して厳密に行われなければならない。言語事象の諸相を実証的に分析し、それによって時代区分として言いづけることが必要である[二〇]。時代の区分はさまざまな立場によって区分される。代表的なものとして、文学史的（日本文学史）か、政治史的（日本史）かによって区分づけられるが、日本語史では「古代語・中世語・近代語」の三分法、または「古代・中世・近世・近代」の四分法などがある。そして政治史に分ける場合は「奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代」という基準に時代を区分する（沖森 二〇一〇）。しかし、それぞれの時代区分法には問題点がある。小野（二〇一三：五）は政治史的な区分は室町時代と江戸時代の継ぎ目をどのように名づけるかという点になお問題があり、さらに、明治時代以前は政権の存する場所による名づけで、明治時代以降は天皇在位による名づけであるという点で整合性を欠く。また、二分法・三分法ではやや粗過ぎると指摘している。

したがって、本研究で歴史的変化を記述していく際には、以上のことを踏まえ、研究対象によって折衷的

に時代を区分づけることにする。個々の副詞は出現時期や使用状況などに違いが見られるため、時代区分はそれぞれの副詞の語史によってよりふさわしい区分を採用することにする。

以上のことを踏まえ、次節では分析の方法について述べることにする。

二　研究対象及び分析の方法

ここでは研究対象の「きっと」「おそらく」「たぶん」「おおかた」「たいてい」「たいがい」といった六つの副詞に対して史的研究をしていく際、分析の方法について述べることにする。

まず、研究対象とする、六つの副詞は、前述のとおり、現代語では推量の意を表す陳述副詞として捉えられている。しかし、歴史的にみると、いずれも本来的に陳述副詞として機能してきたわけではない。他の性質で現れ、時代につれて、陳述性をもつようになったという変化が見られるものばかりである。ただし、この中では、文献で確認できる範囲ですでに陳述副詞になりかけている状態のものもある。

ところで、先ほど述べたように、陳述副詞になりかけている「おおかた」「たいてい」「たいがい」を陳述副詞の一種として認定されるかについての問題であるが、これについては、工藤(一九八二:六九)は、「大抵」「大概」などは「大抵の男」「大概の物」のような実体量を示す数量詞の用法から推量と呼応する用法を派生しかけているとし、これらはいまだ過渡的な状態にあると指摘し、周辺的なものも叙法副詞(本研究でいう「陳述副詞」に当たる)として記述すべきだと述べている。

このように、陳述副詞として派生しかけている副詞の史的研究をも取り入れることで、すでに陳述副詞として認められている副詞の過渡期的な過程をも関連づけて考えることができる。そこで、「きっと」「おそらく」「たぶん」「おおかた」「たいてい」「たいがい」を研究対象とすることにした。

次に、分析の方法にあたっては、分類において基本的に語形（形態）を優先する。文脈上の意味を基に分類するにはかなりの主観性が入り込み、例外が多くなり分類し難いと考えられる。しかしながら、語形優先とするにせよ、各時代における副詞の性質によって適切な分類基準を立てることにする。また、用例の解釈においては、文脈上の意味を判断するのに客観性を保つために『新全集』の現代語訳を参考にした。

陳述副詞と文末表現との共起関係においては、小林（一九七八・一九八〇）の分類基準を基にする。小林は「分類語彙表」の〈用の類〉と『国語動詞の一分類』にみられる四種の動詞、また「雑誌九十種の用語用字・第一分冊」の〈使用率順語彙表〉を基に一二〇の動詞を抽出した。この述語部分となる述部分の構造を渡辺の助動詞の二種三類、及び終助詞の分類に基づいて、次のように四つの段階に分けて考えている。

（Ⅰ）「比況、様子、希望、ている・てしまう」
（Ⅱ）「た（だ）、肯定、否定」
（Ⅲ）「疑問、意志、推量、断定」
（Ⅳ）「感動、祈り、義某、勧誘、依頼、命令、念押し、問いかけ」

以上、ここまで「序章」として、本研究の目的や先行研究の概観とともに本研究の立場を明らかにし、その上で研究方法などを述べた。次は「序章」で述べたことに基づいて、推量的意味を表す陳述副詞の歴史的変遷について考察していくことにする。

一　国語学会編（一九八〇）『国語学大辞典』七四四頁

二　工藤（二〇〇〇）一六五頁
三　筆者による作例
四　国立国語研究所（一九九一）、鈴木重幸（一九七三）
五　川瀬（二〇一三）再引用、濱田（一九九一）
六　田和（二〇一二）によって文法書の副詞に関する記述等を含む副詞研究文献の中から取り上げたものである。それぞれB.H.Chamberlain（一八八八、丸山・岩崎（一九九九）による訳語）、渡辺 実（一九七一・一九八三）、竹内美智子（一九七三）、仁田義雄（一九九一・二〇〇二）、森本順子（一九九一）、工藤 浩（二〇〇〇）による異名である。
七　川瀬（二〇一三）六頁
八　国立国語研究所（一九九一）、杉村 泰（二〇〇九）、森本順子（一九九四）などがある。
九　山田の学説は『日本文法論』『日本文法講義』『日本口語法講義』『日本文法学概論』などに詳細に示されている。
一〇　時枝の学説は『日本文法口語篇』に基づく。
一一　国立国語研究所（一九九一）一一頁
一二　森本（一九九四）五～六頁 引用
一三　渡辺の学説は『国語構文論』に基づく。
一四　鈴木（一九七三）一一〇頁
一五　国立国語研究所（一九九一）二九頁
一六　工藤の学説は「叙述副詞の意味と機能-その記述方法をもとめて-」『国立国語研究所研究報告集』（3）に基づく。
一七　工藤（一九八二）
一八　川瀬（二〇一三）
一九　杉村（二〇〇九）は主に副詞と文末の形式を見ることから「共起」という用語を用いた。
二〇　沖森（二〇一〇）六一頁

第一章　「きっと」について

第一節　はじめに

現代日本語において、「きっと」は話し手の主観的な根拠に基づいて推測を表すものとされる。

（一）雲が出てきた。今夜は**きっと**雨だろう。　　『日本語文型辞典』（一九九八）九八頁
（二）靴がないから、彼は**きっと**帰ったのだろう。　　『現代副詞用法辞典』（一九九四）一三二頁

（一）は前文「雲が出てきた」という状況を見て、話し手は「今夜は雨が降る」ということを推量している。（二）は「靴がない」ということから話し手は「彼はもう帰った」と推量している。（一）（二）の話し手の推量には、ある状況から話し手の主観的な判断が含意されている。さらにいずれの「きっと」は文末の「だろう」形と共起関係にある。

しかし、「きっと」を歴史的に見ると、語形や意味用法において現代語とは異なる。『日本語語源辞典』（二〇〇五：二三七）によると、「きっと」のもとの形として「きと」が記されており、「すばやく、しっかりと」という意味が記されている。次の（三）は中古に見える「きと」の用例である。

（三）御輿を寄せ給（ふ）に、このかぐや姫、**きと**影になりぬ。『竹取物語』（大系・五七頁・九〇〇年頃）

(三)は「きっと」の初出のものとして、動きの変化を表す様態副詞のような機能が見られる。さらに、『日本国語大辞典』第二版(二〇〇一：二〇一、以下『日国』と称する)にも「すばやく」の意が当てられている。また『新編日本古典文学全集』(以下『新全集』と称する)に収録されている『竹取物語』(六一頁)には「かぐや姫は急に影のようになって姿を消してしまった」という現代語訳があり、さらに「急に」という注釈が付け加えられている。

以上の(一)(二)と(三)から、「きっと」には、時代による語形の変化だけでなく、意味用法においても変化があったと考えられる。従って、本章では、「きと」から「きっと」への語形変化と様態副詞から陳述副詞への意味用法の変化の両方に焦点を当てて、歴史的変遷過程を分析することにする。

なお、本章の代表的表記は「きっと」とする。以下で挙げる用例の所在は作品名、依拠本名、頁、成立年度を示す。用例を引用する際、依拠本の振り仮名は省略するが、場合によって表記する。

第二節　中古から近世における「きっと」の変遷過程

一　中古

管見によれば、『時代別国語大辞典』「上代編」(一九六七)及び『古事記』『日本書記』『万葉集』『風土記』『万葉集』などには「きと」は見当たらず、確例と見られるのは『竹取物語』(初出：九〇〇年頃)を含めて『枕草子』(一〇〇一年頃)、『堤中納言物語』(一〇五五年頃)などにおけるものである[一]。

(四)「さていづら、歌は」と問はせたまへば、かうかうと啓すれば、「くちをしの事や。上人などの聞かむに、いかでか、つゆをかしき事なくてはあらむ。その聞きつらむ所にて、**きと**こそはよまましか。」

『枕草子』第九五段(新全集・一八九頁・一〇〇一年頃)

(五)あさましきことは、いま一人の少将の君も、母上の御風よろしきさまに見えたまへば、「かしこへ」と思せど、「夜など、**きと**たづねたまふこともあらむに、折節、ならむも」と思して、御車奉りたまふ。

『堤中納言物語』(新全集・四六五頁・一〇五五年頃)

(六)局より、いそぎたるけしきにて、「**きと**おはしませ。三位殿、絶え入らせたまひぬ」といひて、引き抜けて、ゐて去ぬ。

『讃岐典侍日記』上(新全集・四二五頁・一一〇九年頃)

平安時代から院政期の「きっと」は「きと」という語形であり、様態副詞的に機能している。(四)(六)は、初出のものと同様に動作性が見られるもので、「動作の動きの速さ」を表す。『新全集』の現代語訳には、(四)には「すぐに、さっと」(一九〇頁)という注釈が付いており、「さっと詠めばよかったのに」と訳されている。(六)は「すぐにおいでになってください」(四二五頁)と訳されている。

そして、(五)は「ふと母上がお呼びになることもあろう」(四六五頁)と訳されていて、「何かをぱっと思い出す/はじめようとする、その瞬間」などの意味を表す。未実現の事態(あるいは、事柄)を「ふと」思い出すということであろう。

平安時代の「きと」は「動作の動きが速いさま」や「何かをふと思い出したり、はじめようとしたりするその瞬間的な様子」などを表していた。ただ、少数の用例でありながら、「きっと」のもとの形として「きと」が現れ、主に様態性をもつ副詞として使われていたのは確かで、現代語の意味や用法とはかなり離れていたことがわかる。

二　中世〜近世

二・一　中世前期

そして、動作や行動に対して「ちゃんとする／しっかりとする、あるいは、確かに」といった意味を表すようなものがある。以下の(七)は『歌論集』のもので、「ちゃんと歌を詠む」というように解釈される。

(七)あまり案じくだきし程に、たけなどぞいたくはたかくはなかりしかども、いざたけある哥詠まむとて、「龍田の奥にかゝる白雲と三射の哥に詠みたりし、恐ろしかりき。折につけて、**きと**哥詠み、連哥し、ないし狂歌までも、にはかの事に、故あるやうに詠みし方、眞實の堪能と見えき。

『後鳥羽院御口伝』(大系・一四七頁・一二二五〜七年頃)

このように、鎌倉時代の「きと」は様々な場面で様態副詞として使用され、特定の動詞類を伴って固定表現として多用されている。特に、「きと＋感覚／思考動詞類」と「きと＋移動動詞類」の表現が目立つ。

まず「きと＋感覚／思考動詞類」表現から見ていく。「きと」に感覚動詞や思考動詞をつけて、「鋭く何かを見抜こうとしたり、考えたりするさま」[二]というような意を表す。「きと」の後につく感覚動詞には「見る」系、思考動詞には「思う・考える」系などの動詞が含まれる。このような表現はこれから述べる中世後期、近世にかけてもよく見られるもので、そこから近世には「きっと＋α」的な変形型も現れるようになる。それについては後述する。

「きと＋感覚／思考動詞類」表現は、特に『宇治拾遺物語』(一二二一年頃)に多い。全一一例のうち、七

例がこの表現に当てはまるものである。以下の(八)～(一三)は「きと＋見る系」であり、「見る、見上げる、目見入れる」などの動詞が後続している。(九)の「きと見る」(用例は動詞「見る」のテ形)は最も典型的な表現である。そして(一四)は「きと＋思う系」であり、思考動詞の「思う」が用いられている。

(八)**きと**目見入れ奉るによりてかくおはしますなり。

『宇治拾遺物語』巻第一(新全集・四二頁・一二二一年頃)

(九)(前略)この少将のうへに、鳥のとびて通りけるが、ゑどをしかけけるを、晴明、**きと**見て、あはれ世にもあひ、年などもわかくて、みめもよき人にこそあんめれ、式にうてけるにか、

『同右』巻第二(一〇一頁)

(一〇)その前を過ぐる程に、**きと**見やりたれば、内に地蔵立ち給へり。

『同右』巻第三(一二三頁)

(一一)御障子などは少し古りたる程にやと見る程に、中の障子引きあくれば、**きと**見あげたるに、この子と名のる人歩み出でたり。

『同右』巻第五(一八四頁)

(一二)大方かたじけなく候ひしに、御障子を引きあけさせ給ひ候ひしを**きと**見あげ参らせて候ひしに、御烏帽子の真黒にて、先づさし出でさせおはしまして候ひしが、

『同右』巻第五(一八七頁)

(一三)政所へ行くとて、塔のもとを常に過ぎ歩きければ、塔のもとに、古き地蔵の物の中に捨て置きたるを**きと**見奉りて、時々きぬかぶりしたるをうち脱ぎ、頭を傾けて、すごしすごし敬ひ拝みつつ行く時もありけり。

『同右』巻第五(一九三頁)

(一四)(前略)月影の板間より漏りたりけるに、指貫のくくり長やかにて、ふと見えければ、それに**きと**思ふやう、「我が妻のもとには、かやうに指貫着たる人はよも来じものを。」『同右』巻第二(九二頁)

次に「きと＋移動動詞類」表現を見ていく。「きと」に「行く」「来る」など移動を表す動詞がついて動作や行動を「急いで」行うというような意を表す。この表現は時代の特徴が反映され、主に上流階級者が自分より下の人に対して「きと参れ」という表現で使用される例が多く見える。

（一五）「いかさま様ある事ならん」とて、榻を召し寄せて御尻を掛けて、晴明に、「**きと**参れ」と召しに遣はしたりければ、晴明則ち参りたり。

『宇治拾遺物語』巻第十四（新全集・四五〇頁・一二二一年頃）

（一六）さかいきになりてはしり向ていうやう、「只今内裏へ**きと**まいらせ給へ。

『古今著聞集』巻第十六（大系・四二三頁・一二五四年頃）

（一七）仰らるべき事ありて、**きと**まいれと仰られたりければ、あさましき大段名にて御返事申ける、

『同右』巻第十六（四一七頁）

様態副詞として固定的な言い方が頻繁に使用されるとともに、語形においても「きと」に促音「つ」が挿入して「きつと／きっと」の語形が現れるようになる。依拠本であるが、調査した範囲で、促音「つ」を介してはじめて現れるのは『金刀比羅本保元物語』三（一二二〇年頃）である。しかし、「きと」「きつと／きっと」の語形が併用されていて、「きと」から「きつと／きっと」の形に完全に変わったわけではない。端的な例では、同時期の『宇治拾遺物語』（一二二一年頃）の全例は「きと」形である。これは、それまで無表記であった促音が、鎌倉時代に入ると、「つ」で表記されるようになったということを背景としたものである。したがって、それ以前にも「きっと」という発音であった可能性もある。また、「きと」はそのまま促音のないままの語形であったことも必ずしも否定できない。ただ。後述するように中世後期以降の資料では、表

記語形は「きつと／きっと」形が定着しており、『時代別国語大辞典』「室町時代編」（二）（一九八五～二〇〇一：五一五）にも、「きと」の促音化した強調形として促音「つ」が挿入された「きつと」が書かれているが、「きと」の見出し語は見当たらない。さらに、一六〇三年頃の近世初期に発行された『邦訳：日葡辞書』（一九八〇：五一〇）にも「Qitto.キット(急度)」と取り上げられている。このことから、その促音が介在する時期については明確にしがたいが、鎌倉時代には促音が介在する「きっと」という語形が用いられており、また、次第にその語形が一般化していったように思われる。

（一八）四「志保見五郎が頸の骨射きらんと指しあて放ちたり。志保見**きっと**みて矢にちがはむと頸をうちふりたれ共、などかははづるべき」　『金刀比羅本保元物語』中（『日国』・一二二〇年頃）

ただ、「きと＋感覚／思考動詞類」から「きつと／きっと＋感覚・思考動詞類」というように、修飾する動詞には変化が見られるものの、意味の面では変化はない。「きつと／きっと＋移動動詞類」も同じく、意味自体に変化はない。ただし、極めて希であるが、以前と違って「きつと／きっと」を「必ず」と訳すものが見られるようになる五。これまでは様態副詞として用いられていたものが、様態性の意味から離れて、未実現の事態や事柄に対して、話し手が「必ず」その行動や事態を実行させるというような意味で用いられるようになっている。

以下は、いずれも『保元物語』の用例である。（一九）は法皇が巫女に命令する場面で、「不審なことがあるから巫女に『必ず』占って報告する」六と命令する、（二〇）は入道殿のお使いである義通が入道殿のことを伝える場面で、「入道殿は子供たちに『必ず』出会おう」と思っている七と訳されている（ただし、これらの解釈に主観性が入っていることは否定できない）。いずれも未実現のことで、（一九）は「巫女が占う」と

いうこと、（二〇）は「子供に出会う」ということ、つまり、未実現のことに対して、「実現させる」といった話し手の判断が含意されているように捉えられる。

（一九）（法皇→巫女）法皇、これを夢ともなく現ともなく御覧ありて、人々にはかうとも仰せられず、山上に無双の伊岡の板と申す巫女を召されて、「御不審の事あり。**きつと**占ひ申せ」と仰せある。巫女、朝より権現を降し奉りしに、日中過ぐるまでえ降りさせたまはず。

『保元物語』上（新全集・二一九頁・一二二〇年頃）

（二〇）義通申しけるは、「入道殿は船岡山に籠らせたまひて候ふが、『また都に合戦候ふべし』とて、『軍の慣らひ、**きつと**見んと思ふとも、見ぬ事もあるべければ、公達たち向へ進らせよ』と仰せ候ふあひだ、御迎へに参りて候ふ」と申しければ、十一になる亀若、九になる鶴若、七になる天王とて、三人は、聞きあへず、喜びて、輿に走り乗る。

『同右』下（三五二頁）

以上、中世前期の資料に見られる「きっと」は、一三世紀頃（一二一六年～一二二〇年頃？）を境に「きと」から「きつと／きっと」へと促音が表記されるようになり、意味の上でも、それまでの様態性の意味から、ある行動や事態に対して間違いなく行うという話し手の判断を表すようになった[八]。

二・二　中世後期～近世

中世後期以降からも、上述のように、『日葡辞書』などでは「きつと／きっと」が見出し語として取り上げられているものの、嘷本などには「きと」の語形も見られる。

(二一)われおちに**きと**人にかたるなとよおみて、までども一人も立かへらず。なとはやひ事しけるに、恥かしがりて逃げ帰りぬ。　『新竹斎』(噺・二〇四頁・江戸前期)

依然として様態副詞的性格が強い中で、事態や行動に対して「ちゃんと／しっかりとする、あるいは、確かに」という意を表すものや、「きっと＋感覚動詞類／思考動詞類」という表現で多数の例が見える。これに対して、様態副詞として動作性と瞬間性を表す用法、および「きっと＋感覚動詞類／思考動詞類」とともに使われた「きっと＋移動動詞類」はほとんど現れなくなった。以下の用例では、(二二)は「きっと＋感覚動詞類／思考動詞類」の典型的表現で「きっと見る」、(二三)は「ふと」という意味を表す。(二四)は何かを「ぎゅうと」するさま、(二五)は「背中にちゃんと背負って」というようなものもある。

(二二)五郎、此よし**きつと**見て、本田がわれらをまねきつるは、様こそあれと思ひ、松明にひきそばめ、廣縁にづんどあがり、「何事ぞや、本田殿」とさゝやきければ、本田、小声になりて、「夜陰の名字は詮なし。　『曽我物語』巻第九(大系・三四九頁・一三六一年頃?)

(二三)(義経→弁慶) 弁慶 「畏つて候。(正面を向き)それがし**きつと**(ッ)案じ出したる事の候。われらを始めて皆々憎い山伏にて候ふが(立衆を見わたす)、何と申しても御姿隠れ御座なく候ふ間(子方へ向く)、このままにてはいかがと存じ候。　『四番目物(二)』「安宅」(謡曲集・新全集・三五九頁・南北朝時代〜室町時代頃)

(二四)(太郎冠者→主)私(太郎冠者)の申すは、「ここな者は。最前の菓子はくれず、酒肴はくれず、何も返す物はない」と申してござれば、何が足の早いおはしたでござって、そのまま私へ追っ付きまし

て、右の手を**きっと**捕え、「おのれ最前の物を返せ」と申しまするによって、「今も言うとおり、何も返す物はない」と申してござれば、「おのれそのつれを言うて返さずは、この手をねじ上ぐるぞ」「ア痛ア痛ア痛」。私の右の手を**きっと**ねじ上げましたによって、

『大名狂言』「茫々頭」（大系・二一四頁）

（二五）（目代→中国の者）目代「論はむやくいそひでいる」中国の者「わが物ゆへにほねををる、く、心のうちぞおかしき。（中略）ひやうごをたつて二日に、とがの尾にもつきしかば、みねの坊、谷の坊、ことにめいよしけるは、あかひのばうのほかぜを、十きんばかりかひ入、このつぼにとうどおさめて、せなかに**きっと**背負うて、ひやうごをさしてくだれば、」

『狂言集』「茶つぼ」（『大蔵虎明本狂言集』下・二二頁）

中世前期に生じはじめた「事態や行動に対して、話し手によって間違いなく行われる」ということを表す用例の使用も引き続きみられる。

（二六）（酒屋→太郎冠者）酒屋「そちの二、三日、二、三日は、ほうど聞き飽いた。**きっと**九算用をさしめ。」太郎冠者「畏まってござる。」

『小名狂言』「千鳥」（新全集・一七二頁）

（二七）（菊都→勾當）菊都「さてさて苦々しいことじゃ。ただいまそれへ參りまする。エイエイヤットナ、ヤットナヤットナ。」勾當「さてさて憎いやつの、おのれひとり渡るということがあるものか。」菊都「サアサア、今度こそ**きっと**負われさせられい。」勾當「心得た。」菊都「渡りまするぞ。」

『出家座頭狂言』「とぶがっちり」（大系・三四五頁）

そこでは文末表現と共起することから、「まちがいなく、ある事態が行われる」ことに対して話し手が予測するといった推量の意が現れるようにもなる。すなわち、話し手の判断が含蓄され、その可能性を推量することになるのであるが、次の（二八）（二九）では「きっと／きっと」が推量の意味を表す文末表現と対応する用例である。（二八）は推量の「べし」形、（二九）は「う／よう」形と応じている。そして、本稿では（二八）を「きっと」と推量形との共起関係がみられるものの初出とし、少なくとも一六世紀頃以降から陳述性が見られると推定する。これは『日国』一〇に示されている用例より早い時期のものである。ただ、このような共起関係は狂言に偏って現れる。

（二八）花ハ今夜ノ中ニ、急渡（＝急度）発クベシ。　『中華若木詩抄』中（三三頁・一五三四年頃？）

（二九）（酒屋→太郎冠者）酒屋「エイ太郎冠者殿、わごりょの來るを待っていた。」太郎冠者「とはまたいかようなことでござる。」酒屋「内々の通いの面は何と召さるぞ。」太郎冠者「さればそのことでござる。内々の通いの面は、近々には算用致しましょうほどに、いま二、三日待たせられて下されい。」酒屋「イヤイヤわごりょの二、三日二、三日も、ほうど聞き飽いた。きょうはぜひとも算用さしめ。」太郎冠者「何がさて、近々には**きっと**算用致しましょうさて、ただいま參るも別なることでもござらぬ。」　『小名狂言』「千鳥」（大系・二九八頁）

また、『狂言集』一二を中心に「きっと」と文末表現との共起関係を見ると、「う／よう」形、「ましょう」形のように意志表現との共起関係が多く見られる。しかし、その中でも推量の意味として読み取れる用例もいくつかある。『狂言集』を調べた結果、全七一例のうち、様態副詞は三五例、その他は二二例が得られた。その他には、陳述性のものが一四例含まれている。

○「ましょう」形

(三〇)(買手→太郎冠者)賣手「別にむつかしいことでもおりない。かさをさすなる春日山、これも神の誓いとて、人がかさをさすなら、我もかさをさそうよ。げにもさあり、やようがりもそうよの」、という分のことでおりゃる。」太郎冠者「その分のことでござるか。」賣手「なかなか。」太郎冠者「おおかた覺えました。私はもうこう參りまする。」賣手「はやおりゃるか。」太郎冠者「このたびは急ぎまするによって、重ねて上ってござらばお尋ね申し、このお礼は**きっと**申しましょう。」

『脇狂言』「末広がり」(大系・五六頁)

(三一)(伯父→甥)甥「(前略)その事にて候。このたび鯉を持って參らぬさえござるに、鱸の庖丁の、お茶までを下されてかたじけのうござる。今度このお體に參ろうならば、どじょうにても候え、はえにてもあれ持って參って、このお礼は**きっと**申しましょう。まずそれまではさらば、さらばさらばさらば」と、

『小名狂言』「鱸包丁」(同右・三九八頁)

(三二)(主・太郎冠者・客人甲)主「おのれ憎いやつの、みどもを打擲したな。さんざんにならわかいてやろう。」太郎冠者「アア留めて下されい留めて下されい。」客人甲「申し申しまず待たせられい。」主「そこを退かせられい。打擲致いてやりましょう。」客人甲「私が**きっと**叱ってやりましょう。まず待たせられい。」主「それならば、きっと叱って下されい。」客人甲「心得ました。」

『鬼山伏狂言』「鬮罪人」(同右・一五〇頁)

○「う／よう」形

(三三)(濟人・男・女)濟人「アアこれこれまず待たしめ。」男「アア留めて下されい、留めて下されい。」濟人「それならばみどもがそのとおり言うて、**きっと**叱っておまそう、それにお待ちゃれ。」女「そ

れならば**きっと**叱って下されい。」 濟人 「心得た。ヤイ太郎。」 男 「面目もござらぬ。」

『女狂言』「鎌腹」（大系・五四頁）

（三四）（何某・太郎冠者） 何某 「それならばよい。水を汲め。」 太郎冠者 「イヤ申し、私もさもしい奉公は致せ、水などついに汲んだことがござらぬ。」 何某 「なんの役に立たぬやつ、すっこんでいよ。」 太郎冠者 「アア。」 何某 「憎いやつの。」 何某 「さてもさても腹の立つことでござる。ただいまより〇〇殿の方へ參り、金銀をもって**きっと**算用致いてもらおうと存ずる。まず急いで參ろう。」

『鬼山伏狂言』「鬮罪人」（同右・二七〇頁）

（三五）それにつきいつも留守になれば、両人の者が酒を盗んで飲みまするによって、今日は両人とも、**きっと**いましめて参ろうと存ずる。

『小名狂言』「棒縛」（同右・三〇六頁）

（三六）（伯父→甥） 甥 「（前略）いざお點てそい」、と申そうが、茶は亭主の役なれば、茶の湯もとにおし直り、湯七分に泡八分、ほうほうむくむくやわやわと、昔様の中高猫の腹立てたごとく、**きっと**點てないて申そう。

『小名狂言』「鱸包丁」（同右・三九七頁）

このように、中世後期から近世初期においての「きっと」は本来の様態副詞的機能を持ちつつ、事態や事柄に対して、話し手の推量判断が込められ、さらに文末の推量表現と共起することから、陳述的副詞の機能をもつようになったと考えられる。しかしながら、『近松浄瑠璃集』など[二]の調査結果をみても、全六二例（「その他」[三]一一例含む）のうち、様態副詞は四一例、陳述性のものは一〇例であることから、様態性の意味は依然として強く残っていると言える。（三七）（三八）は様態副詞である。

(三七)幸ひ、十郎右衛門取次たる者なり。**急度**(きつと)追手をかけて、搦め出だせ」と、気色かはりて仰せ付けられ、十郎右衛門、分別ここに定めかねしが、「旦那、この内証御存知なきゆゑに、かかる憎しみ深し。」

『武道伝来記』七(新全集・二六〇頁・一六八七年頃)

(三八)親はあこがれ、隣の壁打ち毀ちく・手の出るほどに壁下地引き破り・割符を出し、ひらめかす、親の手付きの物言ふばかり・惣七**きつと**見つけ・ヤイ九右衛門、聊爾すな・

『博多小女郎波枕』中之巻(新全集・一九〇頁・一七一八年頃)

このように様態性の意味が色濃く残されつつある中で、近世以降の資料でも意志表現とともに「べし」形のほか、「ましょう」形や「う／よう」形などの推量表現とも共起関係を見せている。以下、「きっと」と文末との共起関係を見ていく。

○「べし」形

(三九)晩には廓で飲みかけ・我らは太鼓実正明白なり・何時なりとも騒ぎの節、**きつと**参上申すべく候。

『冥途の飛脚』(新全集・一二〇頁・一七一一年頃)

(四〇)大臣御息ほつとつぎ・我病に臥して政務を辞し・民の訴へを聞かざれば・はやかゝることの出で来るは・当家の徳のうすきより洛中の騒ぎ・後の災ひ軽からず・**急度**(きつと)正し得さすべし。

『平家女護島』第三(新全集・五〇六頁・一七一九年頃)

（四一）めでたしと秀句によせて壽ぼ。義經御感斜ならず高綱いしくも申たり。ヤア梶原過て改るに憚らず。以來を**きっと**慎（つゝしむ）べしと物にさはらぬ御詞。あっとはいへど義經に。意趣をふくみし其根ざし

『ひらかな盛衰記』（大系・一〇八頁・一七三九年頃）

○「ましょう」形・「う／よう」形

（四二）（前略）第一あの子が身祝ひ、**きっと**仕立てて送りませう・新兵衛心もその通り。

『薩摩歌』下之巻（新全集・三三〇頁・一七〇四年頃）

（四三）（茂兵衛→さん）茂「（前略）今日のうち一貫目、**きっと**調へ進じませう」

『大経師昔暦』上之巻（新全集・五三九頁・一七一五年頃）

（四四）（茂兵衛→助作）助作「七つ過ぎ、暮れまでに、**きっと**持って来ませう」　『同右』下之巻（五七一頁）

（四五）私妻に**きっと**申し受けませう　『鑓の権三重帷子』上巻（新全集・六〇二頁・一七一七年頃）

（四六）（小女→九右衛門）小女「この割符は二、三日中、私が**きっと**渡しましょ」

『博多小女郎波枕』中之巻（新全集・一八八頁・一七一八年頃）

近世後期の人情本などでは、現代語の「きっと」の典型的な文末表現とされる推量の「だろう」形、「ましょう」形などと共起する例も見えるようになる。

（四七）（そで・薄・●▲×・吉）●▲×「ほんざますョ。モウくく鳥雅さんが小児の節は**きっと**斯ざました

らふョ」　『風月花情 春告鳥』四編 巻之十（新全集・五二五頁・一八三六年頃）

（四八）そで「親父さんエ、**急度**逢て上申なましョ」　『同右』巻之十（五二三頁）

（四九）新「おめへさんにやァ、**急度**お気に入るにやァ相違ごぜへません。」　『同右』巻之一（三八一頁）

（五〇）弥次「しれた事よ。あしたの昼までには、**きつと**出かしてやる。そこへいつちやア男だ」

『東海道中膝栗毛』発端（新全集・三五頁・一八〇二～〇九年頃）

（五一）弥次「（前略）あすの昼時分には、耳を揃へて十五両、**きつと**間にあはせてやるぞ」『同右』（三六頁）

（五二）「この衣類・脇差おおぼへがござろふ。以來、柔弱の心をあらため、武をはげみ給へ。」「以來は**きつと**、あらためますでござりませふ。」「その節のおいはぎは、われ両人でござる。」

『文武二道万石通』（黄表紙・大系・一七四頁・一七八八年度）

（五三）（弥二・あんま・北八）弥二「あやにく、しよぼ〳〵雨がふり出したは、なさけないあんま「こんやなどは**きつと**出そふなこんだ」北八「イアコレあんまどの。もふけへつて下さい」

『東海道中膝栗毛』三編下（新全集・一七四頁・一八〇二～九年頃）

（五四）下女「お肴が出來ました。上ませうか」丹次郎「ヲイ、はやく出してくんな。これよりしばらく酒食のたのしみありてのち、またしづかなりしが、やゝありて」仇「それじやア**急度**そのつもりだヨ」

『春色辰巳園』後編 巻之六（大系・三三四頁・一八三三～三五年頃）

さらに、（四九）のように「に相違ない」形（本稿では「に違いない」形に含める）や、『東海道中膝栗毛』の（五〇）（五一）のように、話し手の意志が強く込められた「てやる」形というようなものも見られる。中世後期から陳述性を有するようになり、近世においてその陳述性がさらに強まっていくようである。意志形、

推量形だけでなく、近世後期に向って、その周辺的な文末表現とも共起しているように見える。話し手の意志が強く入り込み、そこから事態や行動に対して推量するという特徴が見え、これは近現代語の「きっと」の意味に繋がると考えられる。

第三節　明治以降における「きっと」

前節まで「きっと」の変遷過程について検討した。「きっと」は明治になる前に陳述副詞化されてきたことを念頭に、本節では明治以降における「きっと」の使用状況を見ていく。「雑誌『太陽』のコーパス」を用いて、一八九五年・一九〇一年・一九〇九年・一九一七年・一九二五年を対象に「きっと」（「きつと」「急度」「きと」等含む）を検索したところ、全一一一例が得られた。文語は一八九五年～一九〇九年の間に一六例、口語は一九〇九年～一九二五年の間に九五例であった。なお、用例の表記においては旧・新字体を併用する。

まず、周辺的な意味から見てみると、「きと」の語形や様態副詞の用例は全く見えなくなる。ただし、「きっと＋α」の表現として「きっとして」が会話の場面で見られるようになる。（「きっと＋α」表現については第四節で後述する）

（五五）（茂男の胸に頭を押つけたまゝ）**きつとして**みせるわ。（茂男默つて頬ずりをする。）

長田秀雄「生きんとすれば　一　二幕　一」『太陽』1号 1917

そして、現代語的な表現として「きっと」の後ろにくる述語を省略する用例もある。ただ、このようなものは近世後期の資料（黄表紙本）などでもいくつか見られたものである。

（五六）「それなら銀紙に入ってゐるチョコレートだ。**きつと**。」武者小路実篤「AとB」『太陽』10号1917

（五七）「俺の十八番を奪つたな。」「それも新時代よ、**きつと**。」藤沢清造「帳場の一時」『太陽』14号1925

「きっと」の共起関係は中世後期から見えはじめ、意志表現とともに推量表現も次第に増えてきたが、雑誌『太陽』では断定形が多く見られるようになる。

〈表一-一〉「きっと」と文末の共起関係（例）

	一九〇九	一九一七	一九二五	合計
推量形	・	一八	一〇	二八
意志形	一	五	・	六
断定形	二	二九	一一	四二
その他	一	一三	五	一九
合計	四	六五	二六	九五

【凡例】

※推量形の文末形式を示したものである。一八九五年・一九〇一年は一例も見当たらなかったことから、表には省く。

※本稿で陳述副詞とされる範囲は、「断定・推量『だろう、らしい、かも知れない、にちがいない、まい』形・意志『う／よう』形・疑問『だろうか』形」（小林）である。序章参考。

※「その他」は「述語の省略、きっとして、節や句を修飾するもの、否定形、解読不可等」を含む。

さらに〈表一-一〉に基づいて、推量表現の文末形式を分類したのが〈表一-二〉である。

〈表一-二〉 推量表現の文末形式（例）

	一九一七	一九二五	合計
【だろう】系	八	三	一一
【と思う】系	六	三	九
にちがいない	三	四	七
かもしれない	一	・	一
合計	一八	一〇	二八

【凡例】

※〈表一-二〉は推量表現の文末形式を分類したものである

※【だろう】系は「であろう」形、「ただろう」類、「う／よう」形などを含む。

※【と思う】系は「だろう／であろうと思う」形などを含む。

※「にちがいない」形には「に相違ない」形が含まれる。

以下、「きっと―推量表現」という文末形式を示す。

【推量表現との共起】

○【だろう】系

(五八)かういふものを彫らせたら、　末には**きつと**類のない好いものを作るだらう』　と老師匠は、

小川未明「悪人」『太陽』2号 1917

(五九)母は、　我が子を前に呼んで、『お前は正直者だから、**きつと**可愛がられるだらう。

小川未明「悪人」『太陽』2号 1917

(六〇)矢ツ張りさうだつたのかと、**きつと**ほツとなさるでせう。里見弴「失はれた原稿」『太陽』1号 1917

(六一)若い方ですね、この二人とまるで姉妹のやうです。**きつと**本當のお母さんでないんでせう。』

有島生馬「イヱッタトリイチヱ」『太陽』4号 1917

(六二)彼女は**きつと**愛してゐると言ふであらう。　小川未明「なぜ母を呼ぶ」『太陽』12号 1917

(六三)靜緒さへ遣はしたら、清洲様思召で、**急度**御生命は繼がしやらうか。

山崎紫紅「三七信孝」『太陽』1号 1909

○【と思う】系

（六四）はな子今日はあんまり蒸熱かつたから、**きつと**降ると思つてゐたわ。

長田秀雄「生きんとすれば―二幕―」『太陽』1号 1917

（六五）『（前略）私共は**きつと**跡をつけられたんだと思ひました。』

有島生馬「イヱッタトリイチヱ」『太陽』4号 1917

（六六）わたし、**きつと**あいつあなたと一緒に逃げたのだと思つてよ。

石浜金作「五月の譜」『太陽』13号 1925

（六七）自分の村には、看護婦を雇ふほどの病人がある筈はないので、**きつと**H町からT町へ雇はれて行くのだらうと思つた。

福永渙「治作と米造」『太陽』14号 1917

○「にちがいない」形

（六八）道徳を作つたものが男であつたやうに、人間を創つた神様も、**きつと**男性だつたに違ひない。

里見弴「恐ろしき結婚」『太陽』4号 1917

（六九）『**きつと**あの人に相違ないよ。』かう思ひ乍ら行つて見ると、

国枝史郎「長篇小説 鼬つかひ（第一回）」『太陽』9号 1925

（七〇）笑ひ死んだなどといへば、大抵の人は**きつと**驚くに相違ないが、さうした例はいくらもあることなのだ。

〈雑学〉「地用」『太陽』11号 1925

○「かもしれない」形

（七一）親御達は、私のやうな者と關係してゐたと聞いては、**きつと**お怒りになるかも知れないけれど、私はどうしても此儘で濟まされない。

久米正雄「感謝」『太陽』10号 1917

以上、雑誌『太陽』の用例を通して、「きっと」は推量の意を表すさまざまな文末表現と共起することを改めて確認した。すでに安定的に陳述副詞として用いられ、明治になってさらにその機能を強めていったと考えられる。

第四節「きっと」とその周辺

第二節・第三節にわたって「きっと」の史的展開を見てきた。そのなかで周辺的な語形も希に見られた。まず、鎌倉時代の『宇治拾遺物語』（一二二一年頃：一例）、『とはずがたり』（一三〇六～一三年頃：二例）に「きと」が重なる形「きときと」というものが希に見出された。『時代別国語大辞典』「室町時代」（二）（一九八五～二〇〇一：五一九頁）にも「きときと」の例を挙げている。

（七二）『御車をかく召しの候ふは』と、我にいひてこそ貸し申さめ。不覚なり」といへば、「うちさし退きたる人にもおはしまさず。やがて御尻切奉りて、『**きときと**よく申したるぞ』と、仰せ事候へば、力及び候はざりつる」といひければ、

『宇治拾遺物語』第巻三・五（新全集・一一三頁・一二二一年頃）

（七三）まだ夜も明けぬ先に起き出でて、局にうち臥したるに、右京権大夫清長を御使にて、「**きときと**」

と召しあり。　　『とはずがたり』巻二(新全集・三五九頁・一三〇六～一三年頃)

「きと」の重畳に関連して、塚原(二〇〇三:五〇～五一)は活用しない語の重畳について三つに分類されている。一つは「山山」のように複数や多数の観念を表すもの、二つは「ずっとずっと」のように主として語彙を強めるもの、三つは「しばしば」のように両者が結合することによってはじめて意味をなすものに分けている。鎌倉時代に見られる「きときと」の場合は、その当時「きと」が前代から様態副詞としての機能が強く、それを重ねることによって、より強調しようとした語形であると考えられる。

また、室町時代の『義経記』には「きと」に助詞「の」が付いて「きとの名詞」の形で、「急な事(急場)」という意を表す用例が見える。

(七四)泰衡、地衡、早々出で立ちて御迎へに参れ。事々しからぬ様に内の勢ばかりを具して参れ」と言ひければ、**急度**のことにて、打ち立つ勢三百五十余騎、栗原寺へぞ馳せ参る。

『義経記』巻第二(新全集・七八頁・室町前期～中期頃)

(七五)義連承りて、**急度**(きと)の事なりければ、若宮の修理の為に積み置かれたる材木を、一時に運ばせて、

『同右』巻第六(三六一頁)

「きと／きつと／きっと」の連体形は、「急な事」の意を表すことから「急度」の「急」の意が際立った結果であると考えられる。

ところで、近世後期以降から「きっと＋α」的な表現が多様化される。「きっと」に「した」、「する」の

テ形「して」を合わせて「きっとした」、「きっとして」形、さらに「なる(成る)」が付いて「きっとなる(成る)」形が見られる。特に『江戸語辞典』(一九七四:三〇七)では「きっとした／して」について以下のように記述している。

○きっとした　①明確な。はっきりした。確実な。たしかな。しっかりした。間違いの無い。
②れっきとした。ちゃんとした。
③相応の。それ相当の。
○きっとして　ひきしまったさま。①きっりとしていて。②正装して。

以下に「きっとした」「きっとして」の用例を示す。この文型はこれまでの「きっと」がもつ様態的な意味と相反する[一四]という指摘もある。

(七六)物柔かで、**きっとして**。　『堀川波鼓』(新全集・四九一頁・一七〇六年頃)
(七七)すぐに二人が死ぬるまで。サア助けてたもるか、殺しやるか・**きつとした**誓文で承らうと、弱みを見せず。　『五十年忌歌念仏』(新全集・三〇頁・一七〇七年頃)
(七八)ぼんじゃりとして**きっとして**花橘の袖の香に昔男の業平づくり、　『同右』(四五頁)

また『日国』[一五]の新見出し語として「きっとなる」の項目があり、特定のジャンルの用語として用いられると記されている。

○きっとなる　緊張したきびしい顔つきになる。歌舞伎の演技の用語として多くもちいられ、刺激的な相手訳のせりふや態度、また状況に対し、きりっと緊張した様相を示すしぐさをいう。場面や気分の高まりを促す効果がある

（七九）臺藏「コリャやい若衆め、無理とは何が無理だ。まだ前髪の身をもって不礼な奴。コリャ何だな、僅かな疵をおとりにして、わりゃ言掛りをひろぐのだな。顔に似合ぬ野太い奴。達て申さば手は見せぬぞ。」ト**きっと成り**、刀の柄へ手をかける。

『小袖曽我薊色縫』（大系・二八二頁・一八五九年頃）

以上、「きっと」とその周辺的な表現を見てみた。何れも時代につれて発生し、劇文学などでの使用を除くと現代語では消長した表現である。

第五節　まとめ

以上、本章では「きっと」を取り上げ、様態副詞的用法から陳述副詞的用法への史的展開を追いながら、そこに見える語形や意味用法について考察した。「きっと」は平安時代に「きと」の形で様態副詞として現れたが、それが約一三世紀頃から促音を介した「きつと／きっと」と表記されるようになる。そのため、この時期には促音が介在する語形となっていたことが確認できる。また、ある行動や事態に対して間違いなく行うという話し手の判断を表す新しい意味が生じ、様態副詞的用法とともに使われるようになる。

中世後期になると、多様な場面で様態副詞が使われるようになるとともに、ある行動や事態に対して話し手によって間違いなく行うといった意味に、文末表現と共起する陳述性をもつようになり、ある行動や事態に対して間違いなく行われる、その可能性を推量するという意味も生じた。中世後期以降からは「きっと」の共起関係が時代とともに広がり、陳述副詞として定着していったと考えられる。一方、近世以降、特定のジャンルでの使用を除き、様態副詞の用法は衰退していく。

一 『土佐日記』『かげろう日記』『古今和歌集』（以上『大系』）にも「きと」は見られたが、確例と言い難く、本稿では除外した。

二 『時代別国語大辞典』「室町時代編」（二）（一九八五～二〇〇一）四一八頁

三 出典は『日本国語大辞典』第二版（二〇〇一）である。この他、『大系』の『保元物語』では「きつと／きっと」の表記で書かれたものが三例見られる。

四 他に、『新全集』や『大系』にも同じ例が見られる。

・「志保見五郎が頸骨を射切らんと、差し当てて、放ちたり。志保見、**きつと**見て、矢に違はんと打ち振りたりけれども、なじかははづるべき」（『新全集』「保元物語」二九八頁）

・「志保見五郎が頸の骨射きらんと指あて放たり。志保見**きつと**みて矢にちがはむと頸をうちふりたれ共、なと（ど）かははづるべき。」（『大系』「保元物語」一一五頁）

五 『新全集』の現代語訳に従う。

六 『新全集』二一九頁

七 『新全集』三五二頁

八 『平家物語』では様態的意味と新しい意味とが混ざって解釈される例がある。以下の（a）は入道から検非違使安倍資成に命令をする場面である。『新全集』では「至急参れ」（一〇九頁）という意味で捉えられているが、『大系』

では「動作が確実に行われることを表す語。まちがいなく。」（一五二頁）という頭注がある。

（ａ）あくれば六月一日なり。いまだくらかりけるに、入道、検非違使安陪の資成をめして、「**き（ッ）と**院の御所へ参れ。信業をまねひて申さうずるやうはよな、「近習の人々、此一門をほろぼして天下をみだらんとする企あり　一々に召と（ッ）てたづね沙汰仕るべし。それをば君もしろしめさるまじう候」と申せとこその給ひけれ。

『平家物語』上　巻第二（大系・一〇九頁）

九　『狂言集』（新全集・一七二頁）では「早く」と「間違いなく」という二つの意味を示している。

一〇　颶風新話（航海夜話）（一八五七）初・二回「**屹度**そうじゃ」（『日国』より）

一一　主な資料は『大系』の『狂言集』上・下である。【凡例】は脇狂言・大名狂言・小名狂言・聟狂言（以上「上」）鬼山伏狂言・出家座頭狂言・集狂言（以上「下」）を対象とし、大蔵流、山本東の書写したものを底本とする（上・三八頁）。ただし、場合によって、『新全集』の『狂言集』、『大蔵虎明本 狂言集総索引』（武蔵野書院）及び『大蔵虎明本狂言集の研究』本文編上・中・下（表現社）で補うことにする。『新全集』による『狂言集』【凡例】は大蔵流茂山千五郎家の現行詞章である（一一頁）。

一二　『近松浄瑠璃集』『浄瑠璃集』上・下『歌舞伎脚本集』上・下（以上、『大系』）、『近松門左衛門集』（『新全集』）などを用いた。

一三　「きっとなる」「きっとする」などが含み、第四節で後述する。

一四　真下（一九六三）三九一～三九五頁

一五　「『Japan Knowledge Lib』オンラインデータベース」の『日本国語大辞典』を用いた。（http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=20020111e7729kX3M2Cj）

第二章　「おそらく」について

第一節　はじめに

現代日本語の「おそらく」について、グループ・ジャマシイによる『日本語文型辞典』（一九九八）では「後ろに『…だろう』『…にちがいない』などの推量を表す表現を伴って、話し手の推量を表す。かなり確実だと思っている場合に使う。『おそらくは』とも言う。かたい表現。」という説明があり、次のような用例をあげている。

（一）**おそらく**彼はそのことを知っているだろう。　『日本語文型辞典』（一九九八）五五頁
（二）相手チームは**おそらく**こちらのことを何から何まで詳しく調べているだろう。　『同右』
（三）台風12号は、**おそらく**明日未明には紀伊半島南部に上陸すると思われます。　『同右』
（四）**おそらくは**首相も今回の事例に関わっているにちがいない。　『同右』

（一）～（四）の用例は全て予想される事態を推量するものである。（一）は「彼はそのことを知る」、（二）は「相手チームはこちらのことを何から何まで詳しく調べる」、（三）は「台風12号は明日未明には紀伊半島南部に上陸する」、（四）は「首相も今回の事例に関わる」ということを推量する。さらに文末の推量表現「だろう」形、「と思う」形、「に違いない」形と共起する。

また、飛田・浅田による『現代副詞用法辞典』（一九九四）は「おそらく」について、「可能性の高いことを推量する様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。述語にかかる修飾語として用いられるが、省略することもある。また、述語部分には推量の表現を伴うことが多い。」と説明している。

（五）神経通の膝が痛いから明日は**おそらく**雨だろう。　『現代副詞用法辞典』（一九九四）一〇一頁
（六）来るなと言っても彼は**おそらく**来るだろう。　『同右』

（一）～（四）に比べて、（五）（六）はいずれも予想される事態を根拠に基づいて推量している。（五）は「危惧」の意を表し、（以前から膝に痛みを感じると雨が降っていたという経験があったことを前提として）「神経通の膝に痛みを感じる」ということから、「明日雨が降る」可能性が高いことを推量する。（六）は「疑問」の意を表し、彼が来るかどうかわからないけれど、（以前から）彼に来ないでと言っても彼は（だいたい）来ていたことから、彼は来る可能性が高いことを推量する。これらの「おそらく」は文末の推量表現「だろう」と共起している。

（五）（六）の用例を構文的にみると、（五）は「…から、おそらく～だろう」、（六）は「…ても、おそらく～だろう」という構文に使われている。カラ節、テモ節の事柄（「神経通の膝が痛い」、「来るなと言う」）を根拠として、後節の事態（「雨が降る」「彼は来る」）が起きる可能性が高いことを推量する。つまり、「神経通の膝が痛い」、「来るなと言う」という事柄に対して以前にも似たような状況があったことが類推され、（その経験から）「雨が降る」「彼は来る」ということを推量する。そして、特に、望ましくないことを表す。また、文末においては（一）～（四）と同じく、いずれも推量を表す表現と共起して陳述副詞の特徴を見せている。

これまで「おそらく」の意味用法を述べたが、新聞記事を用いて実例を見てみる[一]。まず、語形と文末表

現を見てみると、語形は「おそらく」と、助詞「は」が付いた「おそらくは」の両方が見られる。次に、文末にくる表現については〈表二-一〉に示す。

〈表二-一〉 副詞「おそらく」と文末表現（例）

文末表現	断定形	推量形			
		【だろう】系	【と思う】系	に違いない	かもしれない
用例数	二九	二四	四	三	三

【凡例】※『朝日新聞』オンラインデータベース」の六七例を対象とする。

※「述語省略」の四例は省く。

数値上、断定形は二九例、推量形は三四例が見られる。推量形はおおよそ「だろう／と思う・と考える／に違いない／かもしれない」形という四つに分けられる。

意味面においては、状況上、これから起きる可能性がある事態を推量するものが圧倒的に多く見られる。

(七)のように、怪獣映画は子供用で、子供そのものがもつ本性を監督が見せようとしたということが類推され、彼は演出の際、子供のような言葉を叫んでいた可能性があることを表す。

(七)(前略)だが怪獣映画は本来子供のものなのであり、これはその本性にもっとも忠実なありかたなのだ。

（中略）それは映画の本質たる見世物性の純粋な発露である。
監督ギレルモ・デル・トロは「パンズ・ラビリンス」ではアカデミー賞にもノミネートされた知性派である。だがここでは砂場で遊ぶ子供そのものと化して、怪獣とロボットの対決を演出する。**おそらくは**演出中も「ガキーン！」とか「ボカッ！」とか叫んでいたに違いない。

『朝日新聞』二〇一三年八月九日　夕刊

このような、現代語の「おそらく」の特徴を念頭に置いて、次節からは上代から近世までの「おそらく(は)」の史的変化を見ることにする。そして、可能な限り調査した範囲の「おそらく（は）」について検討を加える。なお、代表的な表記は「おそらく(は)」とし、依拠本による振り仮名は省略する。ただし、場合によっては振り仮名を付けて表記する。漢字表記においては旧・新字体を併用する。

第二節　上代の「おそるらくは」

まず、上代の「おそらく」を考察するまえに「おそらく」の語源について見ておく。「おそらくは」の語源は、『訓点語辞典』（二〇〇一）に以下のように記述されている。

動詞「おそる」の二段活用の「ク語法」[二]形「おそるらく」又は「おそろらく」[三]の「る」又は「ろ」が脱落した形に助詞「は」が付いた語。「おそる」の四段活用の「ク語法」に助詞「は」が付いた語とも、「ク語法」が古語化して「らく」が接尾語のように意識され、動詞の活用を無視して「おそらく」の形が定着しそれに

助詞「は」が付いた語とも説かれる。　『訓点語辞典』（二〇〇一）二四九頁

『日本国語大辞典』第二版（二〇〇一：一一八〇～一、以下、『日国』と称する）には「おそるらく」という見出し語はなく、助詞「は」が付いた「おそるらくは」形が見出し語として載っている。そして、「おそるらくは」は動詞「おそる」のク語法に係助詞「は」の付いたものの連語として記述されている。特に「おそるらくは」は漢文訓読語に用いられ、次のような例を示されている。

（八）仍恐（おそるらくは）児孫の使君を忘れむことを　『白氏文集』巻三・天永四年点（一一一三・三）

このように「おそらく」は動詞「おそる」の「ク語法」として「おそるらく」となり、そこに助詞「は」がついた「おそるらくは」の語形に由来することがわかる。また、『時代別国語大辞典』「上代編」（一九六七：一五〇）では、動詞「おそる」の見出し語だけが載っていて、記述のところで「おそらく（おそるらく）」について言及している。「動詞『おそる』から派生し、上代には確かな例は見えない。この時期の『おそらく』は動詞『おそる』の一用法とみるべきである」と述べている。この点においては『日国』でも「おそらくは」の記述に上代の例はなく、「おそるらくは」の初出として平安初期の資料をあげている。つまり、「おそらくは」は上代においては見当たらないと言える。

ただし、「おそるらく（は）」の表記も上代には見られない。『新編日本古典文学全集』（以下、『新全集』と称する）の上代資料に、「恐」を「おそるらくは」と訓んでいる箇所がいくつかある。『日本書記』[四]（七二〇年頃）、『出雲国風土記』（七三三年頃）に見える。以下にその一部の例を挙げる。

（九）夫妻共愁、乃告二素戔嗚尊一曰、我生児雖レ多、毎レ生輙有二八岐大蛇一来呑、不レ得二一存一。今吾且レ産。**恐**亦見レ呑。是以哀傷。
（夫妻共に愁へ、乃ち素戔嗚尊に告して曰さく、「我が生める児多しと雖も、生む毎に輙ち八岐大蛇有りて来り呑み、一も存けること得ず。今し吾産まむとす。**恐るらくは**亦呑まれなむことを。是を以ちて哀傷ぶ」とまをす。）

『日本書紀』巻第一「神代上〔第八段〕正文・一書第一―第二」（九五頁）

（一〇）七年春二月の丁丑の朔辛卯、詔曰、昔我皇祖大啓二鴻基一、其後聖業逾高、王風転盛。不レ意、今当二朕世一数有二災害一。**恐**朝無二善政一、取二咎於神祇一耶。
（七年の春二月の丁丑の朔にして辛卯に、詔して曰はく、「昔、我が皇祖大きに鴻基を啓きたまひ、其の後に聖業逾高く、王風転盛なり。意はざりき、今し朕が世に当りて数災害有らむとは。**恐るらくは**、朝に善政無くして、咎を神祇に取れるにか。」）

『同右』巻第五「崇神天皇（六年―七年二月）」（一七一頁）

（一一）王盟之曰、若敷レ草為レ坐、**恐**見二火焼一。且取レ木為レ坐、**恐**為二水流一。
（王盟ひて曰く、「若し草を敷きて坐と為さば、**恐るらくは**火に焼かれむことを。且木を取りて坐と為さば、**恐るらくは**水に流されむことを。」）

『同右』巻第九「神功皇后（摂政四十七年四月―四十九年三月）」（四五八頁）

（一二）十年春正月、幸二茅渟一。於レ是皇后奏言、妾如毫毛、非レ嫉二弟姫一。然**恐**陛下屢幸二於茅渟一。是百姓之苦。仰願宣レ除二車駕之数一也。
（十年の春正月に、茅渟に幸す。是に皇后の奏言したまはく、「妾、如毫毛も、弟姫を嫉むに非ず。然れども、**恐るらくは**、陛下、屢茅渟に幸すこと、是百姓の苦ならむ。仰ぎ願はくは、車駕の数を

除めたまはむ」とまをしたまふ。）

『同右』巻第十三「允恭天皇（八年二月―十一年三月）」（一二一頁）

（一三）今年埋半遺。**恐**遂被」埋已与。

（今、年に埋みて半ばを遺す。**恐るらくは**遂に埋れはてむか。）

『出雲国風土記』「神門の郡」（二三八頁）

上記の例で、「恐」は「おそるらくは」と訓読されており、文末に「動詞＋むことを」「動詞＋むか」のような推量形で対応させている。このうち、（九）と（一三）を見ると、（九）は脚摩手という神が夫婦のことを心配して、素戔嗚尊に話をする場面である。その話は、「（夫婦は以前にも子供を八岐大蛇に呑まれたことがあることから）子供を産んでもまた八岐大蛇に呑まれてしまうことを恐れている」ということである。（一三）は「（水海と大海の間に松山という園があり、そこに風で砂が飛び流れ、積み上がった松の林がある）その松の林は、今、（砂で）年々埋めてやっと半分が残っている。おそらく最後には埋れてしまうのであろう。」[五]というように訳される。

以上、上代漢文資料における「恐」は平安時代以降の漢文訓読から類推して「おそるらくは」と訓読されるべきものである。ただし、その意味は、動詞「おそる」の意味を受け継いで、「恐れていること」「気がかりなこと」という意味を表している。そして、上代には副詞的なものは見当たらず、事柄全体を修飾する機能をもつというものであった。

第三節　中古から近世における「おそらく」の変遷過程

一　中古〜中世

平安初期には、漢文訓読資料を中心に「おそるらくは」が見え、さらに文タイプにも多様性が見られる。調査した範囲では、西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点、『大唐三蔵玄奘法師表啓』平安初期点を始め、前述の神田本『白氏文集』巻三・天永四年点(八)や、神田本『白氏文集』巻三・天永四年点六に「更に**恐ル**[左、(る) ラクハ]年の衰（へ）て［左、オトロフルマテニ］帰ることを得不（ら）むことを（更恐恐衰帰不得）」（三五四）などの例も見える。これらの文末は、上の「動詞＋むことを」のほか、「動詞＋や」「動詞＋じかと」（西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点）、「動詞」（『大唐三蔵玄奘法師表啓』平安初期点）となっており、必ずしも推量形を含んでいるわけではない。意味面においては、前代に引き続き「恐れている」という意で用いられている。「おそらくは」は次のように『古今著聞集』（一二五四年頃）に多く見えている。これは、漢文訓読に由来する語であるから、和漢混淆文系の資料に用いられるということであろう。

（一四）「佳句にて侍る。**おそらくは**雲千里、鳥一聲と侍らばよかりなまし」
『古今著聞集』巻第四（大系・一二四頁・一二五四年頃）

（一五）弘高、地獄變の屏風を書けるに、樓の上より杵をさしおろして、人をさしたる鬼をかきたりけるが、ことに魂入てみえけるを、みずからいひけるは、「**おそらくは**我運命つきぬ」と。
『同右』巻第十一（三一一頁）

（一六）公茂、弘高をまねきていひけるは、「此野筋・此松、汝及べからず。**おそらくは**、公忠がかく所か」

『同右』巻第十一（三一二頁）

「おそるらくは」から「おそらくは」への語形変化に伴って、副詞的なものが現れるようになる。以下のように「事態が起きる可能性が高い」ことを表す例が見えはじめる。『日国』では、最も古い資料として次の『今昔物語』を挙げている。

（一七）**恐らくは**他の官の者、此の由を不知ずして、亦、君を捕へむと為

『今昔物語』巻第七・三十（『日国』・一一二〇年頃か）

このように（一七）で注目されるのは、条件節を受ける後節に「おそらくは」が位置していることである。この例は前節が省かれていて、全文は以下の通りである。

（一七B）『若シ其ノ書ヲ不取ズハ、**恐ラクハ**他ノ官ノ者、此ノ由ヲ不知ズシテ、亦、君ヲ捕ヘムト為』ト。

『今昔物語集』（二）巻第七・三十一（新大系・一六一頁）

（一七B）は副詞的に用いられ、「十中八九。たいてい。多分。おそらく」の意を表す。このように、「おそらくは」は、条件節を受けて用いられるようになり、一般的な副詞の機能をも有するようになったと見てよかろう。

また、現代語には見られない「はばかりながら」という意を表す例が説話集の『古事談』（一二一二～一五年）に見える。用例は調査した範囲では、この時期にしか見当たらなかった。

（一八）只今此虚ヲ罷通事候ツルカ、御琵琶ノ撥ヲトノイミシサニ所参人也、**恐ラクハ**昔卓敏ニ授貽曲ノ侍ヲ欲奉授云々

（只今此の虚を罷り通事候ひつるが、御琵琶の撥おとのいみじさに参人する所なり。**恐らくは**、昔、卓敏に授け貽す曲の侍るを受け奉らむと欲ふ」と云々。）

『古事談』巻第六　六―二一、四〇七（庫四〇九）（新大系七・五三六頁・一二一二～一五年頃）

ところで、「おそらくは」の語源とされる「おそるらくは」の姿が完全に消えたわけではないのかもしれない。次の『古事談』（一二一二～一五年）の「恐」には「おそるらくは」の訓が与えられている。

（一九）俊賢云、無左右不可入給、近會北方不塞、**恐**有慮外之事歟云云

（俊賢云はく、「左右無く入り給ふべからず。近會北方塞がらず。**恐るらくは**慮外の事有らむか」云々。

『古事談』巻第二　二―三一、一三〇（庫一三一）（新大系・一五九頁・一二一二～一五年）

また、『十訓抄』（一二五二年頃）の歌合をする場面で引用された歌のなかでも「恐」が「おそるらくは」と訓まれている。「心配するのは、衰えた老人の頭が霜のように真っ白であるのを嫌いはしないかということだ」という注釈がある（『新全集』「十訓抄」六三頁）。

（二〇）野宮歌合、判者は源順なりけり。女房をあまた勝たせ給ひければ、男の方より、（中略）

花色如二蒸粟一　俗呼為二女郎一　聞レ名戯欲レ契二偕老一　**恐**（おそるらくは）　悪二衰翁首以レ霜

花の色は蒸せる粟の如し、俗呼ばうて女郎と為す、名を聞きて、戯れに偕老を契らむとすれば、恐るらくは、衰翁の首の霜に似たるを、悪まむことを

と順が書けるによりて、よめるにや。『十訓抄』上・一ノ二十二(新全集・六三頁・一二五二年頃)

これら「恐」を「おそるらくは」と訓読する説は、何らかの根拠に基づくのかもしれず、敢えて記しておく。ただ、その訓読とは別に、「おそらくは」が「恐れている」を表す連語の用法のほかに、新たな用法が見られるようになっている事実は動かない。

中世後期になると、意味面においては(二一)(二二)(二三)のように、「恐れている」「事態が起きる可能性が高い」という意味も前代から引き続き見られる一方、「事態が起きる可能性が高い」を表すもののなかに条件節に用いられ、さらに文末には推量表現を伴うものが見られるようになる。

(二一)**恐らくは**、なほこの心、得る事如何。奥蔵心性を極めて、妙見に至りなば、これを得べきか。

『拾玉得花』(能楽論集・新全集・三八八頁・室町中期頃)

(二二)竜駕まさに都に還つて、鳳暦永く天に則る。**恐らくは**微臣が忠功に非ずんば、それ誰とかせんや。しかるに今戦功いまだ立たず、罪責たちまちに来たる。

『太平記』巻第十二(新全集・七三頁・一三七五年頃)

(二三)もし兵を発して勦捕せしめば、**恐らくは**交隣の道に非ざらん。

『同右』巻第四十(四一九頁)

このような、条件表現と共起する「おそらくは」が出現したことによって、より推量の意味を強めていっ

たものと考えられる。

二　近世

近世前期では、(二四)のように「～ば、おそらくは～推量表現」構文も引き続き見られる。意味も「可能性が高いこと」を推量するものが主流である。(二五)は副詞的に用いられたもので、「(古狸などが化けた見越入道で)たぶん射止めることができるだろうと」[八]と訳され、「たぶん～だろう」という推量の意味が加わったものとして解釈される。

(二四)これらの事をひざうとせば、**おそらくは**秘しても秘しがたき、一大事因縁をばいかがせん。

『一休ばなし』巻之三(新全集・三〇〇頁・一六六八年頃)

(二五)さては古狸などのばくる、みこしにうだうといふものにこそ。**おそらくは**いとめんものをと、ゆみとりなをし、すびきして、猪の目すかせるかりまたの矢をとり、かの坊主のつらを目もはなたずにらみゐるに、ひた物たかくなりて、後には見あぐる事、ゆひし髪の襟につくまでせり。

『御伽物語』巻一(新全集・四六〇頁・江戸前期)

意味面においては、主に「可能性が高いことを推量する」という意を表し、文タイプは以前より広くなり、文末には断定形が見られるようになる。

(二六)甚五兵衛大きに喜び、「さて、**おそらくは**伊藤庄大夫とわたくし、花が一番なり。」

『鹿の巻筆』第三（大系・一八九頁・一六八六年頃）

（二七）内へのかよひ口の暖簾もれて、一炷のかをり通りがけに聞くに、**おそらくは**、この国の守の御物、白菊にもおとるまじきすがりなり。

『男色大鑑』巻二（新全集・三六五頁・江戸中期）

このように、一七世紀にはかなり確信度の高い断定表現にも用いられるようになっている。

ところで、「おそらくは」に助詞「は」が脱落した形「おそらく」が初めて現れるのは近世初期である。

（二八）九（畠主→ちんば）畠主「やるまひといふたりと取てみせう」ちんば「**おそらく**とらすまひぞ」

『集狂言』「竹の子」（『大蔵虎明本狂言集』下・八五頁）

構文的にも意味的にも、前代の「おそらくは」と類似しており、「おそらくは」から「おそらく」へと変化したものであることが明らかになる。これは狂言という作品の特徴上、会話が中心となっているということで口語的な言い方においては助詞が脱落することも多くあったかと思われる。ただ、「おそらく」の形が見られるようになっても、依然として「おそらくは」の方も用いられた一〇。

助詞「は」の有無とは関係なく副詞的に用いられ、文末には否定推量形（「まい」）や断定形の否定形（形容詞「ない」、助動詞「ず」）とも対応して現れる。

（二九）生きて心の辛抱は・ア、**おそらく**常盤には及ぶまい・牛若を助けんため清盛が心には従へども・

『平家女護嶋』第三（新全集・五一七頁・一七一九年頃）

（三〇）「詞扨々。器量勝れて。けだかい生れ付。公家、高家の御子息と云ても。**おそらく**恥かしからず。

テ扨そなたは、マよい子じやなふ、」と。

『菅原伝授手習鑑』四段目（大系・一二七頁・一七四六年頃）

（三一）**おそらく**平家の太刀先には摩醯修も叶はずと。　『源平布引滝』（大系・四二頁・一七四九年頃）

（三二）弥二「おゐどでも、神田の八丁堀で、とちめんやの弥次郎兵衛さまといつちやア、**おそらく**おれが近付の人に、誰しらぬものはねへは。」

『東海道中膝栗毛』後篇（新全集・一〇〇頁・一八〇二～一四年頃）

（三三）イヤ、ほんに聞なせへ。腹をへらして物を食ふほど、うまい物は**おそらく**ねへによ。

『浮世風呂』三編　巻之下（大系・二〇六頁・一八〇九～一三年頃）

また、文末には断定形として否定形が用いられるほか、終助詞「ね」がついて断定度を弱めるものも見える。

（三四）睾丸は磨たとても光りなし、こんにやく玉と屁玉人だまス同字病はあるが能返哥だネ。狂哥といふものは**おそらく**江戸にとゞまつたネ。

『浮世風呂』四篇　巻之下（大系・三〇四頁・一八〇九～一三年頃）

さて、『狂言集』二には前代の用法を引き継ぐ、条件表現とともに用いられる例が見える。（三五）は『小名狂言』「素袍落」で、伯父と太郎冠者が話し合う場面である。

（三五）伯父何と言うて自慢をするぞ。太郎冠者「アアこれこれ、それは皆の者の言うがくどい。**おそらく**

こちの頼うだ人の伯父御様のような、結構なお方が天が下にまたとふたりあらば出いてみよ、あるまい」、などと申して、自慢を致しまする。　『小名狂言』「素袍落」（『同右』・三五五頁）

ここでは、「あらば」と共起しているが、その一方、逆接の接続助詞「とも」と共起する例も多く見られる。

（三六）主おのれそのつれなことを言うて、勝手へ行かずはために悪かろう。男ために悪かろうと言うて、何とする。主目にものを見しょう。男それは誰が。主いずれも、主・客人甲・乙・一同大勢が。男いずれもは大勢、太郎は一人じゃと思うて侮っておしゃるか。**おそらく**いずれも大勢なりとも、怖ずる太郎ではおりない。主ていとそう言うか　『小名狂言』「米市」（『同右』・四二一頁）

（三七）男いずれもは大勢、太郎は一人じゃと思うて侮っておしゃるか。**おそらく**大勢なりとも、怖ずるみども太郎ではおりない。　『女狂言』「千切木」（『同右』・六七頁）

（三八）柿賣いずれもは大勢、柿賣は一人じゃと思うて侮っておっしゃるか。某も彼方では口をきく者じゃ。**おそらく**いずれも大勢なりとも、怖ずる柿賣ではおりない。　『集狂言』「合柿」（四二八頁）

同ジャンルで慣用句的な言い方として「おそらく～とも、…ない」という構文があり、文末には否定形がくることもある。「**おそらく**いずれも大勢なりとも、怖ずる［太郎／柿賣］ではおりない。」というような文である。『時代別国語大辞典』「室町時代編」（一）（一九八五～二〇〇一：一〇二一）では「狂言などで、独断的なこととして述べる場合に用い、打消の言い方と応じて、強く言い切る態度を示す」という記述がある。その一方で、『聟女狂言』「右近左近」には新しい構文が見られる。

（三九）（右近→妻）妻「なう物狂や物狂や、夫ありながら何と妾が出らるるものでござるぞ。これはふっつりと思ひ止まらせられたがようござりませう。」右近「すれば、これほどに言うても、そちは出ることはなるまいぢゃまで。」妻「はて、何と女が出らるるものでござるぞ。」右近「よいわ。おきをらう。もはや頼まぬ。上は御清粋ぢゃ。理を以て申し上ぐるに負くるといふことがあるものか。**恐らくは**勝ってみせう。」妻「アア申し申し、まづ待たせられい。」

『聟女狂言』「右近左近」（新全集・三一五頁）

（四〇）（前略）なかなかただは戻すまい。さてさてこれは苦々しいことぢゃ。これはまづ何と致さう。（思案して）オオそれそれ、『男の心と大仏の柱は太いが上にも太かれ』と申す。何の、思ひ切って行くに行かれぬことはあるまい。**恐らくは**通ってみせう。（舞台正面から妻の座っている前を通ろうとする）

『同右』（三一八頁）

いずれも「おそらくは～う／よう形」という構文が用いられ、推量ではなく、話し手の強い意志を表す。（三九）の場合、『新全集』「狂言集」（三一五頁）の注釈に「きっと。必ずや。『ヲソラクワ。ある事において他人にまさっていることを、効果的にしかもやや気どって表すことば』（日葡）」という記述がある。「必ず勝ってみせよう」とする話し手（右近）の強い意志が含まれている。（四〇）も同じく、地主に変装した妻を本当の地主だと誤解している場面で、その妻の前を通ろうとする右近の意志を表す。このほかにも、『聟狂言』「八幡の前」で「**おそらく**射てお目にかきょう」という文が「聟↕教え手」「太郎冠者↕有徳人」「太郎冠者↕聟」などさまざまな会話中に用いられている。また、『出家座頭狂言』「布施無経」の「住持↕檀家」の会話中にも「**おそらく**寺まで往んでみしょう」というような表現が多用されている。事態や事柄に対して可能性が高いことを表す意味が、話し手の意志と関わる場合、そこには話し手の強い意志を表すことになる

のである。このように、「おそらく」は主に『狂言集』などの口語的な言い方から語形の変化や独特な意味などが新しく生まれているのである。

第四節　明治以降における「おそらく」

前節まで「おそらく」の変化過程について検討し、本節では明治以降における「おそらく」の使用状況を中心に見ていく。「雑誌『太陽』のコーパス」を用いて、一八九五年・一九〇一年・一九〇九年・一九一七年・一九二五年を対象に「おそらく(は)」(「恐らく(は)」等含む)を検索したところ、全四〇〇例の中、文語は五四例、口語は三四六例であった。本節では口語を対象とし、口語の全三四六例のうち、「その他」[二]を除いて二九四例を対象とする。なお、これまでと同様に、「おそらくは」「おそらく」形は同時に見られる。

一「おそらく」の共起形式

左表は「おそらく」と文末の共起関係を示す。推量形は半分を上回った。これに対し、断定形は四〇例、意志形は二三例である。「意志表現→断定表現→推量表現(否定推量含む)」の順で、推量を表す表現と共起する傾向が強く見られる。この結果から、「おそらく」は主に推量形と共起関係を持っていることは間違いない。

〈表二-二〉「おそらく」と文末との共起関係(例)

【凡例】

※「おそらく」と文末との共起関係を示したものである。

※本稿で陳述副詞とされる範囲は、「断定・推量『だろう、らしい、かも知れない、にちがいない、まい』・意志『う／よう』形・疑問『だろうか』形」(小林)である。序章参考。

	一八九五	一九〇一	一九〇九	一九一七	一九二五	合計
意志形	・	六	七	八	二	二三
推量形	一〇	二三	七〇	七〇	五八	二三一
断定形	・	三	一六	一一	一〇	四〇
合計	一〇	三二	九三	八九	七〇	二九四

さらに、〈表二-三〉に推量表現の文末形式を示す。

〈表二-三〉 推量表現の文末形式(例)

【凡例】

※〈表二-三〉は〈表二-二〉に基づいて、推量を表す文末形式を示したものである。

※否定推量「まい」「じ」形も表に示す。

	一八九五	一九〇一	一九〇九	一九一七	一九二五	合計
だろう	二	一〇	三三	五六	四四	一四五
む(ん)	四	二	一六	・	・	二二
まい	・	四	六	四	五	一九
べし	三	七	六	二	・	一八
と思う	・	・	六	四	二	一二
かもしれない	・	・	一	三	四	八
に違いない	・	・	一	一	一	三
らしい	・	・	・	・	二	二
じ	一	・	一	・	・	二

〈表二-三〉を見ると、現代語にも見られるように、「おそらく」は推量の「だろう」形と標準的な共起形式を持っていることがこの時点で明らかになる。

以下、一部の実例を挙げてみる。

【推量表現との共起】

○「だろう」形

(四一)文藝院の設立などといふ話もあるが、**おそらく**嘘だらう。

内田魯庵(談)「文芸取締問題と芸術院」『太陽』1号 1909

(四二)父は**おそらく**あすこの椅子にかけて微笑しながら自分を見守るだらう。

有島武郎「クラヽの出家」『太陽』10号 1917

○「む(ん)」形

(四三)彼れを攻撃したる點より見ば、**恐らく**攻戦とも名けられん、

坪内逍遥「戦争と文学」『太陽』1号 1895

(四四)黒幕政治家としての山縣公は、**おそらく**天下の絶品ならん。

「政治家の分類」(時事評論)『太陽』1号 1909

○「べし」形

(四五)若し政黨にして現在日本の選擧界より手を引かんか、果して如何なる代議士を選出すべきか。**恐らく**成金輩にあらざれば市井の無頼漢に止まるべし。「総選挙の結果と政友会の態度」『太陽』6号 1917

○「と思う」形

(四六)然るに余は實に阿里山に登り、阿里山の大森林を實見したのである。**恐らくは**阿里山を實見した唯一の記者であると思ふ。

久津見蕨村「阿里山実見談」『太陽』16号 1909

○「かもしれない」形

(四七)それで私達はすぐに本田の病室の方へ出て行つた。やはり手術に頼るの外はなかつたのである。

否、**恐らくは**もう初めからさう定つてゐたのかも知れない。

豊島与志雄「本田の死」『太陽』10号 1917

○「に違いない」形

(四八)かうして刻々に迫る心の苦痛には、いかなる藝術も**恐らく**絶望の眼を見張つたにちがひない。

小川未明「なぜ母を呼ぶ」『太陽』12号 1917

○「まい」形

(四九)今の文學者がどういふことをやつて居るか知る者は**恐らく**あるまい。

戸川秋骨「文士の見たる政治家」『太陽』4号 1909

○「らしい」形

(五〇)早産の理由を、**恐らく**善吉だけは知つてゐたらしい。

三上於菟吉「長篇小説　蛇人(第一回)」『太陽』1号 1925

○「じ」形

(五一)菅公再生すと雖も、其の爲す所**恐らくは**此の外に出でじ。

「副島蒼海先生」『太陽』13号 1901

以上、明治以降における「おそらく」は推量の「だろう」形など、さまざまな推量表現と共起して推量的意味を表す陳述副詞として定着していったと言えよう。

二　「おそらくば」の出現

ところで、この時期にだけ現れる興味深い語形がある。「おそらく」に助詞「は」がついて「おそらくは」の形もあったことを前述した。この「おそらくは」の変形として、「おそらくは」の助詞「は」の代りに接続助詞「ば」が付いた「おそらくば」という語形が幾つかみえる[二三]。

「おそらくば」について、『和英語林集成（初版：一八六七年）』に初めて見られるもので、「LEST」という意味が記されている。以下に雑誌『太陽』の用例を挙げる。

（五二）好し互に一致する恐らくば公正無私の位地に立ちて、**恐らくば**人種感情風俗習慣を異にする所の我帝國と協同一致する克はず。
尾崎行雄「対清政策」『太陽』1号 1895

（五三）是、**恐らくば**右の理に由るものならんか、
ＹＫ「農業」『太陽』4号 1895

（五四）既に一定の成績を得て、**恐らくば**米國發明の者よりも、更に斬新ならんことを信ずと雖ども、未だ之を發表するの時期に達せざるが故に、暫らく之を侘日に譲ることとせん。
国府犀東「人力車廃止論」『太陽』5号 1901

（五五）生前之を惡魔と呼び、公盗と目し、怪物となし、姦雄となし、敵意を以て之に向ひし者も、**恐らくば**氏の惨死を遂げしを見ては、何人も哀痛の情を催ほせざるを得ざらんや。
国府犀東「星亨論」『太陽』8号 1901

（五六）然らば即ち北京大官中の權力平均は如何にして、覆るべきかと云ふに**恐らくば**些少の原因が其大結果を來たすかも知れぬ。
竹越三叉「清国多難の秋」『太陽』1号 1909

（五七）彼等以上の罪惡を行へる者徳義に背ける者累々として瓦石相連り、**恐らくば**一々之を拾ふに堪へま

い。

尾崎行雄（談）「政治家の徳義問題」『太陽』8号 1909

これまでみてきた「おそらく(は)」の意味用法と同じで、「おそらくば」と共起する文末表現は推量形(四例)、否定形(一例)、否定推量形(一例)である。これは、近世になって、「行かずば」のような、本来の係助詞「は」に代わって接続助詞「ば」が用いられるようになった現象から類推されて、同じ連用成分に「ば」が付いたものであろう。いずれも文語の漢文訓読調の文章に用いられているのである。

第五節　まとめ

以上、上代から近現代にみられる「おそらく」の変遷過程を考察した。

上代・中古に連語の「おそるらくは」形が現れ、中世前期には「おそらくは」が用いられるようになる。近世前期になると、助詞「は」が脱落した「おそらく」の語形が現れるようになった。ただし、近世末期から近代にかけて「おそらくば」の語形も一部に用いられた。

意味の面では、動詞「おそる」の本来の意味である「恐れていることに」の意であったが、中世からは「はばかりなく」「事態が行われる可能性が高いことを推量する」意でも用いられるようになる。そして、中世後期以降から推量表現を伴うようになった。連語ではなく、副詞としての働きが現れはじめるのもこの頃からである。条件節の内部、その後によく用いられるようになり、さらに近世前期からは推量形はもちろん、断定形・意志形・否定形・否定推量形などと共起するようになる。ただし、近世には、特定のジャンルで話し手の強い意志を表すものとしても多用された。明治以降からは推量の「だろう」形とも共起し、主に「事

態が行われる可能性が高いことを推量する」意味を表すようになる。

一 『朝日新聞』オンラインデータベース」を用い、「一九八四年一月一日～一九八五年一月一日、一九九三年一月一日～一九九四年一月一日、二〇〇三年一月一日～二〇〇四年一月一日、二〇一三年一月一日～二〇一四年一月一日」の間、「おそらく(は)、恐らく(は)、オソラク(ハ)」を検索したところ、六七例が得られた。

二 「すべて動詞の連体の語末をア列音に変じて「ク」を附するのが法である」とされている。『西大寺金光明最勝王経古点の国語学的研究』(一九四二)一一七頁

三 「おそろらくは」の「る」が、上のオ列音の影響で母音同化をして「ロ」となったものである。『西大寺金光明最勝王経古点の国語学的研究』(一九四二)一一七頁

四 『日本書記』の古訓は、現在、確認できるものとして、平安中期をさかのぼることはできないが、その訓の有する諸特徴からいって、当時、甚だ重要視された歴史の訓として、上代の古い読み方が、時代をこえて忠実に平安時代まで、伝承されている可能性が認められている。(大槻(二〇〇三)二四五～二八一頁)

五 『新全集』「出雲国風土記」二三八頁

六 『訓点語辞典』(二〇〇一)二四九項

七 『新日本古典文学大系』41(岩波書店)

八 『新全集』「仮名草子集」四六〇頁

九 他に『女狂言之類』「どん太郎」(どん太郎「**おそらく**すねをなぐ事はなるまひ」『大蔵虎明本狂言集』・二五頁)にも「おそらく」が一例みられる。

一〇 『新全集』『大系』『大蔵虎明本狂言集』から検索した。全五六例であり、「おそらく」は一五例、「おそらくは」は四一例であった。

一一 第一章【注一一】参照

一二 「その他」の五二例は「述語の省略、節や句を修飾するもの、否定形、解読不可等」を含む。

一三 「おそらくは」の変形と推定される「おそらくば」形に似たような変形過程が「もしくは」にもみられる。『日国』

の「もしくは」の項目に「は」を仮定の「ば」に誤って「もしくば」ともされるという記述があり、「『第一粗紡科』だとか『後紡保全科』だとか、**もしくば**『第一織部』、『サイズ』、『ワンダー』といったやうな標札が立ってゐるのである」（細井和喜蔵（一九二五）一五・四四『女工哀史』）という例を挙げている。

第三章　「たぶん」について

第一節　はじめに

現代日本語における「たぶん」は話し手の推量を表し（『日本語文型辞典』一九九八：二〇二）、文末の推量表現と共起関係を持つことから、陳述副詞の一種として扱われている。以下の（一）（二）は新聞記事から取り出した用例である[1]。

（一）池渕浩介（当時トヨタ自動車顧問）はある日、取締役の大野耐一に呼び出された。１９６０年の入社から2年目のころで、大野がトップを務める本社工場に勤務していた。「きょうから君にかんばんを教える。しっかりやれ。部長に教えてもいいんだが、**たぶん**泣くほどつらい。どうせ泣くなら若いほうがいいだろう」大野は、池渕と同年代の若い社員を、社内で１００人ほど選抜。「大野方式の先兵」として鍛えた。

『朝日新聞』二〇一一年一月二六日　朝刊

（二）〇〇〇さん（63）は地震後、北隣の山田町から車で自宅に戻った。途中、車中から波が押し寄せるのが見え、慌てて走って逃げた。避難所になっていた寺の0-0メートル前まで津波が迫ってきたため、近くのコンクリート造りの3階建てのビルに飛び込み、階段を屋上まで駆け登った。2階まで土砂に埋まり、寺は流されてしまった。「自分の前に逃げた人たちは、**たぶん**のみ込まれただろう。避難所が避難所になっていなかった」

『朝日新聞』二〇一一年三月一四日　朝刊

（一）（二）を見てみると、いずれもある事柄に対して推量の意味が込められている。（一）は、当時トップであった大野が入社２年目の社員にかんばん（トヨタの生産方式）を教えようとした。「部長」の代わりに「若い社員」に教えることにし、若い社員がかんばんを学ぶには耐えられないほどつらいことがあるということが推量される。（二）は、インタビュー記事の一部である。話し手（語る側）は（津波に襲われた当時のことを思い出しながら）避難所であった寺は津波に流され、おそらくそこに避難していた人たちは飲み込まれた可能性があることを記している。さらに、（二）は副詞「たぶん」と文末の推量形「だろう」に共起関係がみられる。要するに、それぞれの事柄に対してどうなるか、あるいは、どうなったかわからないが、話し手の判断によって（一）「つらくなる」、または（二）「飲み込まれる」という可能性があることを推量している。

以下の〈表三-一〉は副詞「たぶん」（注一参考）と共起する文末表現を分類して示したものである。〈表三-一〉によると、副詞「たぶん」は意志形との共起は見当たらず、推量形と断定形が共起しやすい表現であることがわかる。

〈表三-一〉 副詞「たぶん」と文末表現の共起関係（例）

文末表現	推量形	断定形	その他
用例数	四二	一八	五（否定形：四、願望：一）

【凡例】

※推量形には「だろう・でしょう」形（「だろうと思う」形（二例）を含む）-二一例、「と思う・と考える」形（「と思

うだろう」形（一例）を含む）-一五例、「ではないか」形-三例、「に違いない」形-一例、「かも知れない」形-一例、否定推量形（「まい」形）-一例が含まれる。
※その他の「ない」「ず」等の否定形が四例、願望には「ように」形一例が含まれる。

一方、『日本国語大辞典』第二版（二〇〇一：一〇七九、以下『日国』と称する）による「たぶん」の初出は、「大部分、大多数」の意を表す名詞的な用法として、中古の『小右記』（九九九年）のものを挙げている。

（三）上達部**多分**得二件題一云々　　『小右記』（『日国』・九九九年頃）

しかしながら、調査した範囲では、『小右記』のほかには、平安時代の資料からは一例も見当たらなかった[二]。ただ、『大漢和辞典』（三）（一九九九：三四二）の「多」のところに「多分」の項目がある。そこに、奈良時代の作品として、唐の道世が書いた仏書『諸経要集』の「我与汝**多分**」という用例を挙げている。このような表現は、仏書に多く見えるようで、「汝示我者、我与汝**多分**」（『法苑珠林』巻第五十）、「我若殺得、與汝**多分**、我取一分」（『大智度論』巻第四九）などとあり、いずれも「多分」は名詞として「多いこと。多数」という意に当てられている。これを見ると、漢語「多分」はもともと名詞であったと見られる。すなわち、「たぶん」は「多いこと、多い部分」を表す意味として使用されていたが、時代とともに推量の意を表す陳述副詞的機能として用いられるようになったことが推定される。したがって、本章ではどのような変遷過程を経て現在のようになったのか、そこに焦点を当てて考察する。なお、本章の代表的表記は「たぶん」とする。以下で挙げる用例の所在は作品名、依拠本名、頁、成立年度を示す。用例を引用する際、依拠本の振り仮名は省略するが、場合によって表記する。また、漢字表記は旧・新字体を併用する。

第二節　中世から近世における「たぶん」の変遷過程

一　中世

一・一　中世前期

平安時代において「たぶん」は『日国』に引用する『小右記』の用例しか見当たらなかったが、鎌倉時代では名詞的なものを中心として現れる。特に、法語集である『正法眼蔵随聞記』（一二三五～一二三八年頃）に多数見出される。

（四）夜話云、今、世出世間ノ人、**多分**ハ、善事ヲナシテハカマヘテ人ニ識レント思ヒ、悪事ヲナシテハ人ニ不被知思フ。依此内外不相應ノ事出來ル。
『正法眼蔵随聞記』十七（大系・三五三頁・一二三五～一二三八年頃）

（五）夜話云、今此國ノ人ハ、**多分**或ハ行儀ニツケ、或ハ言語ニツケ、善悪是非、世人ノ見聞識知ヲ思フテ、其ノ事ヲナサバ人アシク思ヒテン、其ノコトハ人ヨシト思ヒテン、内至向後マデモ執スル也。
『同右』十（三六七頁）

（六）三又云、學道ノ人、**多分**云、「若其ノ事ヲナサバ、世人是ヲ謗ゼンカ。」ト。此ノ條甚ダ非也。世間ノ人、何トモ謗トモ、佛祖ノ行履、聖教ノ道理ニテダニモアラバ、依行スベシ。世人擧テ褒トモ、不聖教道理、祖師モ不行コトナラバ、依行スベカラズ。
『同右』九（三九一頁）

（七）四又云、世間ノ人、**多分**云、「學道ノ志アレドモ、世ノスエ也、人クダレリ、我根劣也。不可堪如法修

行。只隨分ニヤスキニツキテ、結縁ヲ思ヒ、他生ニ開悟ヲ期スベシ。」ト。　『同右』九（四〇六頁）

（四）～（七）は「世間の人」（例（四）（七））、「この国の人」、「学道の人」といった大集団の中での大多数を表す。『新編日本古典文学全集』（以下、『新全集』と称する）の『正法眼蔵随聞記』の頭注に、（四）は「大きな部分、あるいは、大方。『日葡辞書』」（三五三頁）、（七）は「多勢、大部分のもの」（四三七頁）という注釈がある。ちなみに、『邦訳：日葡辞書』（一九八〇：六九七）の「大方」は「大部分」を表す名詞的用法として記されている。また、第四章で詳しく考察するが、中世前期の「おおかた」には名詞性が強く見られるものの、『正法眼蔵随聞記』では名詞的用法は見当たらず、副詞的用法として一例が見られる。その代わりに、同時期の『建礼門院右京大夫集』（一二三二年頃）には「は」が付く「おおかたは」形をはじめ、「大方の御所の御しつらひ」（一七頁）、「大方の世の騒ぎ」（三八頁）のように「の」が付く連体修飾形も見られる。つまり、当時の「おおかた」は「たぶん」と意味的に似ているが、機能的にはより発達していたと言える。

この（四）（七）の注釈に基づくと、（五）は（四）のように「たぶん」の前にくる集団を受けて、「此の国の人の大部分」を表すと類推できる。（七）は「集団、**多分**云」という文構造で、「多勢、大部分」の意を表す。この構造に似ている（六）も、学道の人という集団の多く（の人）というように考えることができる。

『正法眼蔵随聞記』のほかにも、名詞的用法が見られるものがある。（八）は仏教説話集の『妻鏡』のもので、「神明に依て信施を受る輩」の「大多数」のことを表す。一方、（九）は「（罪の）少分」に対比する意味で、「罪の多分」、即ち、かなりの程度の罪を表している。

（八）又神明に依て信施を受る輩は、**多分**は蛇身を受べし。　『妻鏡』（大系・一六七頁・鎌倉後期）

（九）罪**多分**滅して**少分**有しが、父母千人殺たる程の大苦をうく。

『消息文抄』（日蓮集・大系・四三五頁・鎌倉時代）

以上の「たぶん」は名詞に近いものとしてであるが、副詞として解釈できるようなものもいくつか見られる。

（一〇）雑話ノ次、示ニ云、學道ノ人、衣食ニ勞スルコトナカレ。此國ハ邊地小國ナリトイヘドモ、昔モ今モ、顯密二道二名ヲ得、後代ニモ人ニ知レタル人、イマダ一人モ、衣食ニ饒ナリト云コトヲ聞カズ。皆貧ヲ忍ビ、他事ヲワスレテ、一向其ノ道ヲ好ム時キ、其ノ名ヲモ得也。況ヤ學道ノ人ハ、世度ヲ捨テワシラズ、何トシテカ饒ナルベキ。大宋國ノ叢林ニハ、末代ナリトイヘドモ、學道ノ人、千萬人ノ中ニ、或ハ遠方ヨリ來リ、或ハ鄉土ヨリ出デ來ルモ、**多分**皆貧ナリ。シカレドモ、愁トセ。

『正法眼蔵随聞記』四（大系・三二〇頁・一二三五～三八年頃）

（一一）この巻に嗚呼がましき事を集むるも、心賢き道に入れとなり。嗚呼がましき事は、一旦人の咲ひを招くばかりなり。世間の嗚呼がましきこと故に、人に軽しめらるる事は、罪障の除こほる因縁なり。また、嗚呼の者は**多分**正直なり。

『沙石集』巻第八（新全集・四〇四頁・一二八三年頃）

（一二）昔の時は平かにして法弘まる。應に戒を持つべし、杖を持つこと勿れ。今の時は嶮にして法翳る。應に杖を持つべし、戒を持つこと勿れ。今昔倶に嶮なれば、應に倶に杖を持つべし。今昔倶に平かなれば、應に倶に戒を持つべし。取捨宜しきを得て一向にすべからず」等云云。汝が不審をば、世間の學者、**多分**道理とをもう。いかに諫曉すれども、日蓮が弟子等も此をもひすてず。

『開目抄』（日蓮集・新全集・四〇八頁・鎌倉時代）

以上の(一〇)～(一二)の「たぶん」はそれぞれ「(皆) 貧ナリ」「正直なり」「道理とをもう」という述語を修飾する。さらに(一二)の場合は現代語と同じく文末に推量表現「と思う」とも共起しているようにも見える。それぞれの現代語訳では、(一〇)は「多くのみんな貧である」、(一一)は「愚か者は総じて正直である」(『新全集』・四〇四頁)、(一二)は「たいていは道理であると思う」というように訳されている。即ち、「大集団となる対象の多く」は「貧である」「正直である」「道理であると思う」ということを表す。構文的には文中で副詞的に機能しているように見えるが、意味の面においては名詞性が強く見られるものと扱われる[五]。

以上、中世前期の資料に見られる「たぶん」は、調査した資料の範囲では仏教に関わる文献に用例が多い。そして、「限定される範囲の中で占める部分が多い、大多数」というような意を表し、名詞性を強く有するものである。その機能面においては、不確かな例も多少あるものの、主に名詞的用法、名詞性を強くもつ副詞的用法も見られた。

一・二　中世後期

中世後期に入っても名詞性を完全に失ったとは言いがたく、『邦訳:日葡辞書』(五九五頁)には「Vouoi bun(多い分)大きな部分、あるいは大方」と説明されている。

管見では、室町時代の資料には副詞として扱ってよい用法が現れはじめる。しかも、それまでとは違って、意味や機能の面でも明瞭になる。前時代には「限定された範囲での大部分」といった意味を表していたが、そこから事柄や事態に対して「その可能性が強いことを判断していう。おおかた。多くは。十中八九。大抵。」(『日国』より)などに相当する意味が生じるようになる。

（一三）一、砕動風鬼の能作。これ、軍体の末流の便風なり。これは形鬼心人なり。かやうの能、**多分**六、二切れの能なり。初め三段、もしくは二段ありとも、短か短かと書きて、後の出物、定めて霊鬼なるべし。

『三道』（能楽論集・新全集・三六四頁・一四〇〇年頃）

（一四）「plærique〈略〉タイリャク、ヲウカタ、tabun（タブン）」『羅葡日辞書』（一五九五年頃）

（一三）は一五世紀頃のもので「（砕動風鬼のような）能の構成はたいてい前場と後場の二つに分かれている」というように解釈される。（一四）は『日国』に取り上げられているもので、『羅葡辞書』の項目の中に「大略」という意味も含まれており、（一三）と同じ用法である。これらは、第五章や第六章で考察を行う「たいてい」や「たいがい」に置き換えることができるものである。細かいことは気にせず全体的なことなどの概括的な意味を表す。室町時代末期には、次の例のように「たぶん」は「多くは」という、その可能性が強いさまを表す副詞として用いられている。

（一五）**多分**人は賢だてをして、し損ふものぢゃ。　『エソポのハブラス』（四九四頁・一五九三年頃）

（一六）人は**多分**心と言葉は似ぬもので、ややもすれば、約束を変ジ、思はぬことをも言ふものぢゃ。

『同右』（四九九頁）

ただし、この段階では文末が断定形であって、まだ推量形と共起するには至っていない。

二　近世

近世に入ると、陳述副詞的性格が現れはじめる。次の(一七)～(二一)はいずれも推量表現「であらう／なろう／しやらう／見えませう(例(二〇)(二一))」形と共起している。

(一七)ゐ中より初て上りたる人、先せいくわん寺へ参り、御前なるかくを見て、さて見事なしゆせきや、かひたりせいの字、願の字の筆せいは、**たふん多分**、すかうか石すりてあらふとほめた。

『昨日は今日の物語』(古活字八行本)(噺・一一六頁・一六二三年頃)

(一八)小かん「(前略)わしが仏に受けられず・願の叶はぬ知らしめ、さうしておいてくださんせ・やがて梅田へ行く時に、どうでいらねば叶はぬと・浮世をすねし言葉の端・一座の女郎や、下女、久三、仕直しにやつたらば・**多分**晩の時合にならう・返らぬ事は悔まぬもの、言うて返らぬ**く**・言うてな・返らぬ死出の旅・サア飲みかけうと、祝うても・定まる前世の約束を、逃れざるこおぞあはれな」

『心中刃は氷の朔日』中之巻(新全集・二六二頁・一七〇九年頃)

(一九)おくにハよき事が有に、とぐちにぶらとしておる物ハ、乞食より外になければ、**たぶん**乞食をしやらふといふた。

『軽口大わらひ』第五巻　九(噺・一一〇頁・近世初期)

(二〇)在所へとては帰るまいと・私は申します・それでは親の一分が立たぬと・言うての親子いさかひ・**多分**これへ見えませう。私が口の合ふやうに、在所の嫁入をお止めなされくだされと・つど**く**語る下心

『今宮の心中』上之巻(新全集・二九七頁・一七一一年頃)

（二一）されば私が父さまもそれをいうて淨閑が聞えぬ。吝いも事による。千兩二千兩いればとて獨子の命に換らるか。欲をさへ離るればつい埒の明くこと。口惜しい此の治部右衞門浪人の身でなくばと。くいいうて恨言。**多分**今日も見えませう父さまの袖引いて。恥しめていはせたらなんぼ吝い親仁さまも得心なうてなんとせう。アレ父様の聲がする。やがて能いこと聞かせましょ。

『山崎與次兵衛壽の門松』中之巻（大系・三〇五頁・一七一八年頃）

（一八）は「（仕直しをしたなら）晩の時分になる」ということを推量している。また（二〇）（二一）は文末に「う／よう」形がきて「今日もみえるだろう」という話し手の推量が表されている。また、次の（二二）のように疑問の「か」を伴うものもある。

（二二）サテハせんけうお噂の吉野へござつたか、登りしらずのくだりみやげしや。殊ニ一首を添られてかたしけない。**たぶん**供ハわがミゐたか。ハイ。さやうでござり升。

『歳旦話』（噺・四三頁・一七八三年頃？）

一方、『狂言集』には、可能性がある事態や事柄に対する推量の意として用いられ、（二三）のような「であらう」以外に、「と思う」「存ずる」という文末表現とも共起性が見られる例が多数見出される。

○「であらう」形

（二三）出家「はあ、きたいな、きたいはうに、ふしやうばう、ふしやばうに、きたひはうにきたいはう、是も一段よひよ、いや此川は、したゝかな川じやが、のぼりにとをらぬ事は有まひがおほへぬよ、

渡り瀬はどこもとぞしらぬよ、渡りぜをとはふにも渡りに人もなし、**多分**此通りであらふ、わたらふ、ふかひは（川へはまり、両のそでをしぼり、何もおとさぬかしらぬよと云て）

『出家座頭類』「名取川」（『大蔵虎明本狂言集』中・三三一頁）

○「と思う」形

（二四）（主→太郎冠者）清水の観世音をしんじたる故にてもござらふず、又はよそへまいつては、又まいる事もござるまひ程に、いとまごひにまいらふ（と云てまはると所にて、しうにあふ、はじがゝりへにげている）主「今のはぶあくめではなひか」太郎冠者「いや何ともみさだめませなんだ」主「**たぶん**ぶあくじやと思ふが、わごりよはせいばいもせいで、成敗したと云物じやあらふ程に、たゞおきまらすまひ」太郎冠者「是はいかな事、それはかくれもなひ事でござる物が、いつわりが申されうか、慥に成敗は致て御ざるが、お目がちがふた物でござらふ」

『大名狂言類』「ぶあく」（『大蔵虎明本狂言集』上（三一二頁）

○「かと思う」形

（二五）柿主「何者ぞと思ふたれは、かたすじやよ、さりながらからすならはなかふぞ、なかずは火とである事もあたふ、人ならはにくひ事じやが、**多分**からすかと思ふ」（からすのまねをする、あどわらふて）

『鬼山伏狂言』「柿山伏」（『大蔵虎明本狂言集』上（四一七頁）

○「存ずる」形

（二六）（前略）山伏「久々みやこを見物いたさぬが、さてくにぎやかな事かな、家作りなどもけつこうになつたよ、某せがれの時の事でござる程に、しかと所もおぼえぬが、**多分**こゝもとがぞんずる、もの

申、案内申」太郎冠者「あんあいとはたそ、いやこれはどれからござつたぞ。」

『鬼山伏狂言』「柿山伏」（『同右』上・四一七頁）

話し手がそうではないかなと推量することを表すのであるが、これも共起関係の一種と扱ってもよいものである。このように、近世に入ると、推量的意味と共起する陳述副詞として用いられるようになり、さらに近世後期になると、現代語における「たぶん―推量表現」の典型的な共起関係とされる「だろう」形が見えるに至る。

（二七）芝居がへりの二人づれ、くらまへ通りを咄しながら、どうも弐丁目ハよく大入でハねへか。あの座組なら、今年ハなにをしてもいゝ。そのうへ作者が河竹ときてゐるから、鬼に鉄棒たそこで又ゑんまと鬼の浄るりを出したのだらう。しかしありやア**多分**おくらだらうよ。アノ一休さまが、聞しより見ておそろしき地ごくかな、トいふと、音羽屋がなんとかいつたツけなア

『梅屋集』第十六巻（噺・二八五頁・一八六五年頃）

周辺的な特徴として、次の（二八）は世之介が気どった女に声をかける場面で、会話中の特徴として述語が省略されたもので、「たぶんこちらは筆屋殿であろう」というように解釈される。推量表現を省略しても推量の意として解釈されよう。

（二八）（世之介→女）世之介、中にも子細らしき女に、「さてわれくは何者とみえます」といふ。「人間と見ゆる」と申す。「それはふるい。商売は」といふ。「贔屓目から見たてました。畳の上で育つ人ぢや。

たぶんこなたは筆屋どの。そなたは張箱屋、又は組帯屋殿であるべし」と、思案しすまして申す。

『好色一代男』巻五（新全集・一五六～七頁・一六八三年頃）

近世後期には用法が拡大しており、次の（二九）は、丹次郎に送る書の中に、「（懐妊したことを恥と思って）世の中から身を捨てようとするというふうな文章である」という可能性が強いことを表す用法で、「おおかた」と言い換えることができる。そして、（三〇）は「その御殿に呼置れる」ことがほとんどすべての場合であるという意を表すもので、「たいてい」と言い換えることができる。

（二九）漸に月日を過せしかば、今はこの世に亡人と、あきらめるにはあらねども、彼丹次郎へ送りし文に、懐姙を恥て身を隠す趣きを書、**多分**世を捨る文章なりけるゆへ、家出なしたるその日をば命日と定め、追善回向怠りなく、跡念ごろに吊ひけるも、近日仇吉の行状正しければ、他心にて亡命せしにあらざること明らかなれば、殊に不便とおもひけり。

『春色辰巳園』四編　巻之十二（大系・四三一頁・一八三三～三五年頃）

（三〇）それより彼春心院を**多分**その御殿に呼置れて、不自由のなき様にやしなひたまひぬ。

『風月花情　春告鳥』四編（新全集・五四九頁・一八三六年頃）

ところで、次の（三一）は名詞的用法であるが、助詞「の」がついて連体修飾する形で用いられる例がごく僅かながら見られる。

（三一）家内ノ者ニ神ノ如ク思ハレナバ、主人ノ法ト成ベキニ、汝ゴトキ者ハ、必ズ内ニテハ吝キモノナリ。

両親ハ是ヲ見テ、アノ細サニテハ**多分ノ**金ハ遣フマジト思ヒ居テ、津波ニ値タル如ク、家屋鋪一度ニ取ルヽ時ノイタマシサヨ。

『都鄙問答』（大系・四一四頁・江戸中期頃）

（三一）は「多くの金」という意である。さらに、形容動詞の連用形用法として「に」がついた「たぶんに」形がある。（三二）は「たいてい」の意、（三三）は「たくさん」の意を表す。

（三二）心ヲ合テ敵ヲ伐ハ士ノ道ナリ。然ルニ皆々不同心ナラバ、「大勢ニハ背カレズ」ト云テ、主君ノ敵ヲ見遁ニシ、武士ノ道ヲ舍ンヤ。**多分ニ**背ト云トモ、敵ヲ打ハ士ノ道ナリ。今日ノ交モ斯ノゴトシ。

『都鄙問答』（大系・四九二頁・江戸中期）

（三三）（弥二↓北）弥二「ヲイ水がわいたかドレはいりやせう」トすぐに手ぬぐひをさげ、ふろばへゆきて見るに、このはたごやのていしゆ、かみがたものとみへて、すいふろおけは、上がたにはやる五右衛門風呂といふふろなり。左にあらはす圖のごとく、土をもつてかまをつきたて、そのうへゝ、もちやのどらやきをやくごときの、うすぺらなるなべをかけて、それにすいふろおけをきけ、まはりをゆのもらぬよふに、しつくひをもつて、ぬりかためたる風呂なり。これゆへ湯をわかすに、たきゞ**多分に**いらず、りかただいいちのすいふろなり。

『東海道中膝栗毛』初編（大系・七二頁・一八〇二～九年頃）

ちなみに、次の（三四）のように、「多分と」の「多分」に「たんと」と振り仮名が付された例も見える。

（三四）（梅→もと）梅「サアおまへのお好な銀杏の多分（たんと）とはいつた玉子蒸が来たから、沢山（たん）とおあがんなさい。」

『風月花情　春告鳥』三編　巻之八（新全集・四九三頁・一八三六年頃）

「たんと」は『近世上方語辞典』（一九五五：六八〇）では副詞に分類されていて、「①たくさん。どっさり。数量の多い場合にいう。②ひどく。たいそう。はるかに。程度のはなはだしい場合にいう。」という記述がある。近世の『近松門左衛門集』『井原西鶴集』『洒落本・人情本・滑稽本』（以上、『新全集』）で「たんと」の用例を調べたところ、「たんと飲む」「たんと注ぐ」のように「たんと＋動作動詞」類、「金／金銀／男／もの（ハ／ガ）たんとある」のように「名詞＋たんとある」類が見られた。この「多分」は「多いさま」を表す表記ということになる。

以上、「たぶん」は、中世末期になると、事柄や事態に対して「可能性があることを推量する」という意味として用いられるようになり、近世に入ると、推量的な文末表現とも共起するようになって次第に陳述副詞化していったということになる。

第三節　明治以降における「たぶん」とその周辺

近代の「たぶん」については、「雑誌『太陽』コーパス」に収録された作品を中心に述べることにする。なお、作品に見られる旧字体はそのまま載せる。

前代の資料から「たぶんの金」（『都鄙問答』）というような連体修飾の用法は、明治にも残されている。

ある集団の大多数、多い部分」などを表す名詞的用法は「たぶんの名詞」という形として多く見え、「たぶん」と修飾関係にある名詞はモノ・物質・人物・場所など、対象となる概念に特に制限はない。たとえば、「記性の多分」「乗客の多分」「多分の御禮」「多分の時間」などさまざまな名詞が調査結果から見出される。また、「たぶんとなる」という例も見えるが、これは「多くなる、多数になる」という意味であろう。

(三五)つまり技巧上、技藝上の特殊的趣味が、益す**多分**となつたので、こは最近文學の一面が、特殊的思想或は感情を分拆すると等しく、　長谷川天渓「文芸時評」『太陽』2号 1909

形容動詞的用法として「たぶんに」は前代から用いられていたが、この「たくさん」の意の形容動詞的用法の使用はそれほど多くない[七]。

(三六)それに氷を**多分に**入れたる鹽水をかけて、　季節料理(七月)「くりや女」『太陽』7号 1895

(三七)人も知る如く、十九世紀の後半期以後の文藝には社會主義的の思想が**多分に**入つて居るし、　島村抱月「進化論の文学上に及ぼせる影響」『太陽』8号 1909

(三八)舊式の官僚ぶつた態度が見えず、新味と情味とを**多分に**備へ、難關を巧みに切つてぬける聰明さと如才なさとが、よく窺はれる。　千賀鶴太郎「日本の欧州戦乱に対する地位」『太陽』12号 1925

副詞的用法として「たぶん」と共起する文末表現について分類すると、左表の通りである。

〈表三-二〉 推量表現の形式（例）

【凡例】

※〈表三-二〉は推量形を文末形式によって分類したものである。

※【だろう】系は「であろう」、「ただろう」形などの類

※【と思う】系は「だろう／であろうと思う」形などの類。

※【にちがいない】形には【に相違ない】形を含む。

※「その他」には『らしい』形、『まい』形（三例）、疑問、解読不可」などを含む。

	一八九五	一九〇一	一九〇九	一九一七	一九二五	合　計
【だろう】系	二	一九	九	二三	一八	七一
【と思う】系	二	五	四	一二	九	三二
にちがいない	・	・	・	二	・	二
かもしれない	・	一	・	三	一	五
その他	一	二	三	三	一	一〇
合　計	五	二七	一六	四三	二九	一二〇

第一節で現代語における「たぶん」は主に推量形と断定形と共起すると述べたが、明治期の資料では、推量形にほぼ集中している。共起する文末形式の主なものを次に挙げておく。以下、「たぶん」はそれぞれ「だ

ろう／と思う／に相違ない／かもしれない」形と共起している。

(三九)君は彼の男とは頗る親密だつたから多分知つて居るだらう。』　矢野、と聞いて、
川上眉山「左巻（承前）」『太陽』13号 1901

(四〇)兼さんを味方にして親父を説附て貰ツたら**多分**親父も承知を仕様と思ふ。
条野採菊「涙の媒介」『太陽』6号 1895

(四一)他一二の有力なる内閣員より、余の當選に付き祝電に接した。**多分**一般の中立無所屬の當選者も同様の祝電に接したに相違ない。
林毅陸「安定を得ざる政局」『太陽』6号 1917

(四二)證人『判りませんです。**多分**私の申したことが聞えなかつたのかも知れません。』
延原謙（訳）;ビ・エル・ファルジヤ（作）（長篇探偵小説）ハートの九　第一回」『太陽』5号 1925

また、「その他」のもので、否定推量の「まい」形とも共起性が見られる。

(四三)此所からウソタンナイの事務所へ出る道は**多分**あるまい」と異口同音に云ふたから、
福地信世「北海道枝幸砂金地巡見（接前）」『太陽』2号 1901

以上、明治以降の「たぶん」は、名詞・形容動詞の使用は縮小されつつある。その一方で、副詞的用法は引き続きさまざまな推量表現と共起関係をもち、陳述副詞として定着していた。

第四節　まとめ

以上、本章では副詞「たぶん」を取り上げ、当初の名詞的用法から推量的意味を表す陳述副詞的用法へどのように展開してきたか、その変遷過程を考察した。「たぶん」は中世前期の資料からは法語書などに偏って現れ、「定められた範囲で多い部分を占める」といった意味を表す名詞性が強いものとして用いられた。その後、中世末期には副詞的用法が現れ、近世に入ると、推量の意を表して文末表現とも共起関係をもつようになった、こうして、陳述副詞的用法として近世以降、今日まで活発に見られることになる。

一『朝日新聞』オンラインデータベース」を用いて、二〇一一年一月一日から二〇一一年三月三一日までの三ヶ月分の記事から「多分」「たぶん」を検索したところ、全九七例が得られた。そのうち、八二例が副詞として用い、残りの一三例は名詞、あるいは形容動詞、または慣用句であった。

次の用例（a）をみると、「かなりの程度である」という意味を表し、形容動詞として用いられている。（b）は慣用句の用例である。

（a）名古屋のようにマグマが噴き出てくる可能性は**多分**にある。　「朝日新聞」二〇一一年二月二二日　朝刊

（b）**ごたぶんに漏れず**、ここも生態系を脅かす外来種のバスなどの魚が増えている。　「朝日新聞」二〇一一年二月一〇日　朝刊

二『竹取物語』『伊勢物語』『平中物語』『落窪物語』『大和物語』『うつぼ物語』『多武峯少将物語』『源氏物語』『栄花物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『今昔物語集』『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉日記』『紫式部日記』『更級日記』『成尋阿闍梨母日記』『讃岐典侍日記』『打聞集』『大鏡』『今鏡』等の索引類や『大系』『新全集』を対象とした。ただし、『大

鏡』では「他分」の表記で、以下のようなものが一例あった。

・「あにどの（雅信）は、いとあまりうるはしく、公事よりほかのこと**他分**には申させ給はで、ゆるきたる所のおはしまさゞりしなり。」

三　本研究は形態を第一の分類基準とするが、各時代における副詞の性質によって適切な分類基準を立てるということから、「たぶん」の文脈的意味を考慮して分類した。序論参照。

四　文脈的意味を考慮した上、名詞的用法に扱う。

五　ただし、（六）（七）においても文中で動詞を修飾することから副詞的に認められる可能性もある。

六　用例（一三）の表記は『新全集』に従っている。ただし、『日国』には「他分」と表記されている。

七　年度別に形容動詞的用法の使用をみると、一八九五年・一九〇一年・一九〇九年は各々一例ずつ得られたのに対して、一九二五年には一四例が得られた。ただし、一九二五年の使用数が顕著に増えたが、これだけをみて形容動詞的用法の使用が増えたとは言いがたい。

第四章　「おおかた」について

第一節　はじめに

現代日本語における「おおかた」は次のように、二つの意味用法にまとめられる。

以下の(一)(二)は「おおかたの」という形で名詞的な用法である。その意味は、(一)では「彼の話の大部分」、(二)では「世間一般の人」である。

(一)彼の話は**おおかたの**ところは想像がつく。　『現代副詞用法辞典』(一九九四)九六頁

(二)(後書き)**おおかたの**御批判を仰ぐ次第である。　『同右』

『日本国語大辞典』第二版(二〇〇一：九〇六、以下『日国』と称する)による「おおかた」の最も古い例は『万葉集』であり、名詞として説明されて「事柄の質、関係、程度などが、特殊でなくて一般的なこと。副詞的にも用いる。世間一般。普通。並ひととおり。一般に。一般問題として。尋常に。」と記されている。また、初出と見られる『万葉集』の用例について「普通なら恋しいことなどないはずだ」と現代語訳されているように、「おおかたは」は副詞性が強く見られるものである。

(三)**大方は**何かも恋ひむ言挙せず妹に寄り寝む年は近きを　『万葉集』(『日国』より)

このような副詞的な用法は現代語に至るまで用いられつづけて、次の(四)のように「(試験問題の)五題の中、三題を解けた」という条件下に「(試験に)受かる」可能性が高いことを推量する副詞的用法としても用いられている。

(四)五題中三題できたのなら**おおかた**受かるだろう。　『現代副詞用法辞典』(一九九四)九六頁

また「『茶漉』コーパス」[二]のうち、『青空文庫』[三]の、現代語で書かれた小説を対象として検索した結果、「おおかた」は登場人物の会話場面で多用されていること、文末の「だろう」形と主に共起関係をもつこと、という二点が目立っている。以下に、この二点を満たす例を挙げる。

(五)「近頃みんなおれの事を隠居隠居っていうが、あの男の隠居主義と来たら、遠い昔からの事で、とうていおれなどの及ぶところじゃないんだからな。ねえ、お延、藤井の叔父さんは飯を食いに来いったら、来るかい」　「そりゃどうだかあたしにゃ解らないわ」　叔母は婉曲に自己を表現した。「**おおかた**いらっしゃらないでしょう」「うん、なかなかおいそれとやって来そうもないね。じゃ止すか。」お延は笑い出した。

このように、副詞「おおかた」が陳述副詞化されてきた変遷過程を中心に、「おおかた」の意味用法を考察することにする。なお、本章の代表的表記は「おおかた」とする。ただし、以下で挙げる用例は歴史仮名遣いの「おほかた」をそのまま載せる。

第二節　中古の「おおかた」

上代の資料に見えるものの、調査した範囲では、「凡者」（『万葉集』・『新全集』・二五三一／二九一三）が「おほかた」と訓読されているほかに用例は見当たらなかった[四]。

しかし、中古の資料には多数の用例が得られる。使用量の増加につれて、物語・日記・和歌などの仮名文学において、すでに多様な用法が見られる。形態別に「おおかた＋α」類、単独の「おおかたφ」類に分けて考察することにする。

「おおかた＋α」類には、連体修飾・連用修飾するもの、いわゆる名詞的・形容動詞的用法と称するものが含まれる。「おおかたφ」類は単独に現れ副詞的機能をするものである。中古の資料に見られる「おおかた」は全体的に名詞的用法・副詞的用法が多いが、形容動詞的用法も散見する。

一　「おおかた＋α」類

名詞的なものとして、「おおかたの名詞」「名詞のおおかた」形と、名詞「おおかた」に助詞「は」「も」などが付く形から見ていきたい。

一・一　名詞的用法

「の」が付いて連体修飾する「おおかたの名詞」「名詞のおおかた」形の、前後につく名詞の範囲は幅広い。その性質によって「おおかた」の性質も異なる。『万葉集』の用例と同様の「普通・一般的なこと」の

意を表すものをはじめ、「限定される範囲の中で占める部分が多い」や、細かいことは気にせず「全体的なこと」を表す意味へと広がっていく。

（六）**おほかた**の秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ
『古今和歌集』巻第四・秋歌上・一八五（新全集・九四頁・九〇五年頃）

（七）**おほかた**のみなあれにたれば、「あはれ。」とぞひといふ。
『土佐日記』（大系・五八頁・九三五年頃）

（八）さし歩みなどしたまへるさま、いたう似たまへるかなと思ふに、**大方**の儀式も、これに劣ることあらじかし。
『蜻蛉日記』下巻（新全集・二九七頁・九七四年頃）

（九）**おほかた**の心ざま聡くて、琴なども習はす人あらば、いとよくしつべけれど、誰かは教へむ。
『落窪物語』巻之一（新全集・一八頁・九九〇頁）

（一〇）姫君の御ためを思せば、**おほかた**の作法も、けぢめこよなからず、いとものものしくもてなさせたまへり。
『源氏物語』少女（新全集・八三頁・一〇〇八年頃）

「おおかたの名詞」の場合、「おおかたの」の後ろに「こと（事）」や「世の（名詞）」という特定の名詞がつく傾向が見られる。「こと」や「世の（名詞）」というような表現は「世間一般的なこと」の意を表し、意味がより一般化される。以下の用例はすべて日記文学から抜き出したものである。

（一一）東宮のすけといひつる人は、藏人の頭などいひてのゝしれば、かなしびは**おほかた**のことにて、おほんよろこびといふことのみきこゆ。
『蜻蛉日記』上（大系・一五八頁・九七四年頃）

（一二）わが身によせは侍らず、**おほかた**の世のありさま、小少將の君の、いとあてにをかしげにて、世をうしと思ひしみてゐ給へるを見侍るなり。　『紫式部日記』（大系・四七六頁・一〇一〇年頃）

（一三）つれづれなるさんべき人と物語などして、めでたきことも、をかしくおもしろきをりをりも、わが身はかやうにたちまじり、いたく人にも見知られむにも、はばかりあんべければ、ただ**大方**のことにのみ聞きつつ過ぐすに、内裏の御供に参りたるをり、

『更級日記』三（新全集・三三〇頁・一〇六〇年頃）

以下の（一四）～（一六）は「おおかた」に助詞「も」が付くものである。

（一四）**おほかた**もいとおもしろう、家もいとをかしうなむありける。

『大和物語』百三十七（新全集・三五四頁・九五一年頃）

（一五）仁寿殿「（前略）まことなるにや、御髪も、御覧ぜしよりは、袿に多くあまりはべり、**おほかた**も、見るかひなくはものしたまはず」。　『うつぼ物語』蔵開 上（新全集・三三三頁・九七八年頃）

（一六）宮「（前略）**大方**もつつましきうちに、いとどほどへぬる」とまめやかに御物語したまひて、

『和泉式部日記』八（新全集・三二頁・一〇〇七年頃）

助詞「は」が付く「おおかたは」形である。（一九）のように文頭によく用いられている。

（一七）返し、女、

うかりけるわがみなそこを**おほかたは**かかる契りのなからましかば

『大和物語』百四十七（新全集・三七二頁・九五一年頃）

（一八）**おほかたは**いづちもゆかじ猿沢の池のこころもわが知らなくに

『平中物語』三十六（新全集・五二九頁・九六五年頃）

（一九）上野の宮「**おほかたは**、九にあたるあんなり。それをさしはへていはむ」とて、

『うつぼ物語』藤原の君（新全集・一五三頁・九七八年頃）

一・二　形容動詞的用法

形容動詞的用法としては「おおかたに」や「おおかたなる」形が現れる。意味は「おおかた」の「普通・一般的なこと」「全体的なこと」といった本来の意味をそのまま受け継いで「普通に・一般的に」「全体的に」などの意を表す。また、この用法は後から現れる副詞的なものに（文中での機能などを考慮して）近いと考えられる。それぞれの用例を分けて示す。特に「に」がついて連用修飾する「おおかたに」形は、調査した範囲では、（二〇）のように『平中物語』に初めて見られた。

【おおかたに】

（二〇）かの男、いといたううらみなどしければ、女いひたる、「よし、なほ**おほかた**にて見せむ。月おもしろきに」といへば、来たり。

『平中物語』（新全集・四六〇頁・九六五年頃）

（二一）「人に会ひにまかりぬるうちに、御前にさぶらはむ。**おほかた**に人なければ、おそろしくおはしまさむものぞ」と言へば、なほはや。

『落窪物語』巻之一・一五（新全集・三七頁・九九〇年頃）

（二二）宮より「雨のつれづれはいかに」とて、**おほかた**にさみだるるとや思ふらむ君恋ひわたる今日のな

がめを　　『和泉式部日記』六（新全集・二八頁・一〇〇七年頃）

【おおかたなる】

（二三）は「普通一般的なもの」を表す一方、（二四）は「（帝は）たいそうこう物思いする身でなかったならば、あのようないいかげんな状態では扱わないものをと」という訳からみて、物思いに対する程度性が見られる。

（二三）[五]又、この男、**おほかたなる**ものから、ときぐ、おかしきことは言ひけり。

『平中物語』八（大系・六二頁・九六五年頃）

（二四）いとかう物嘆かしき身ならざらましかば、かかる**大方なる**ありさまにては見ざらましと、さすがに、心苦しう思しやらるる所々ともあれど、『狭衣物語』巻四（新全集・三六一頁・一〇七～八一年頃）

（二五）そのついでにも、「さる人や」と、ただ**大方なる**やうにて問ひたまふに、誰とさだかには言はねど、ただ世に知らずうつくしき由を語りきこゆるに、『同右』巻三（七六頁）

（二四）は「通りいっぺんであるさま」という意で、特に着目すべき点のない様子の意、（二五）の「ただ大方なるやう」は「ただの世間話」という意で、『新全集』に「狭衣は、真相を隠して、姫宮の様子を探る。」（七六頁）という頭注がある。

以上、「おおかた＋α」類による名詞的用法や形容動詞的用法を見てきた。形態の違いがあるものの、意

味面においてはいずれも事柄や事態に対して「普通一般的に～」などの意味として用いられている。

二　単独で現れる「おおかたφ」類

「おおかたφ」類として副詞的機能をするものである。

二・一「概括的」という意味

そもそも「おおかた」は名詞であり、次の(二六)は「おおよそのことが漏れて噂になるなら。」(六四頁)と現代語訳されている。

(二六)女君は、今宵来ぬを〈つらし〉と思ふにはあらで、**おほかた**聞こえ出でば、いかに北の方のたまはむ。
『落窪物語』巻之一(新全集・六四頁・九九〇年頃)

他方、「おおかた」は上代ですでに副詞性が強く見られるものであって、そこから形容動詞的なものも生じている。それが文中で副詞的な機能(代表的に連用修飾など)を伴って、「おおかた」が修飾する事柄や事態に対して「だいたい～」「概略的に～」など、概括的という意味を表すようになる。構文的構造を見ると、「おおかたφ」類は、(二七)は「男宮九人、女宮十人」という数量を、(二八)の①も「四五町」ほどという数量を限定し、②は「なり」を修飾するという構文に現れている。これらは注釈や現代語訳には、(二七)「総じて」(二八頁)、(二八)①②「およそ」(八〇頁)と訳されている。若干のニュアンス差があるものの、

「大まかなさま」を表している。

(二七)かくいふほどに、**おほかた**男宮九人、女宮十人ぞおはしける。

『栄花物語』巻第一(新全集・二八頁・一〇九二年頃)

(二八)①**おほかた**そのあたりの人々の家残りなく四五町がほど焼けぬれば、さしすぎ法興院も焼けぬ。(中略)なほさべきなめりけりと思し嘆かせたまふに、この殿の山、中島などの大木ども、松の蔦かかりていみじかりつるなど、②**おほかた**一木残らずなりぬ。　『同右』巻第十二(七九～八〇頁)

以上、副詞的用法の「概括的」という意味について見たが、これに陳述性が加わって、さらに新しい意味用法が現れる。次は「おおかた」と陳述性の関係について考えたい。

二・二　文末表現との共起関係

中古の「おおかた」に文末の推量形と共起関係が初めて現れる。このような共起関係は、調査した範囲では、平安中期頃成立の『源氏物語』に「おおかた」が「べし」形と結びつき、推量の意味を表した例が最も古い。「おおかた―推量表現」という結びつきは、この他にも同作品でいくつか見える[六]。(二九)は隠されている顔を推量する場面で、「たぶんおそろしく長いであろう」のように解釈される。概括的な意味に推量の文末表現が加わって、事態や事柄に対して話し手が推量するという意味になったと考えられる。

(二九)色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、**おほか**

たおどろおどろしう長きなるべし。　『源氏物語』末摘花（新全集・二九三頁・一〇〇八年頃）

（三〇）**おほかた**、子の少なくて、心もとなきなめりかし。　『同右』常夏（二三七頁）

（三一）大臣も驚きて参りたまへるを御覧ずるにつけても、（中略）**おほかた**故宮の御事を干る世なく思しめしたるころなればなめりと見たてまつりたまふ。　『同右』薄雲（四五三頁）

また、『狭衣物語』（一〇六九年頃）にも次のような例が見える。以下の（三二）は「おほかた」と推量形「めり」が対応し、父上が自分（狭衣）のことを「この世（憂き世）に生きているな」と考えているようだ[七]と解釈される。つまり、狭衣は父上が自分のことをどう思っているのかを推量している。

（三二）あらぬ所と、思し慰めさせたまひし一条の宮にも、若宮のおはせねば、隠れ所なくて、殿がちにおはするも、びんなき事とのたまはすれば、**大方**世になありそとなめりと、むつかしければ、斎院に参りて、隠れゐたまへり。　『狭衣物語』巻三（新全集・一三六頁・一〇六九年頃）

推量形との共起関係より少し遅れて平安後期に否定形と共起するものも現れる。「おおかた」は細かい部分は気にせず、概括的な意味を表すが、それが否定の語を伴うことで、事柄や事態などが全面否定されるようになる。すなわち「まったく／ほとんど～ない」という意を表す。これは、事態を全面に否定することで、敢えて否定されることを強調すると考えられる。

以下の（三三）～（三七）では、いずれの「おおかた」は、それぞれ「鳥の音おとづれる」「何と覚ゆ」「息す」「目見ゆ」「申し尽くすべきなる」ということを全面否定している。

(三三)春の日の暮らしがたさは都だにあるを、まことに**おほかた**、鳥の音だにおとづれもせず、花の梢も霞のたたずまひも、世に知らず心細きをながめ給へる、

『浜松中納言物語』巻第三(新全集・二一四頁・一〇五六年頃)

(三四)水の沫などのやうに消え入りぬべきを、いとわびしくせむかたなくおぼしまどはれて、よろづに言ひなぐさめ、いみじき御こころざし、言の葉を尽くして見せ知らせ給へど、**おほかた**何ともおぼえず、聞き入るるさまもなし。

『同右』巻第五(新全集・四〇六頁)

(三五)局より、いそぎたるけしきにて、「きとおはしませ。三位殿、絶え入らせたまひぬ」といひて、引き放けて、ゐて去ぬ。まことに、亡き人のやうにて**おほかた**息もせず。暮れかかるほどに、集まりて、かきのせてゐて去ぬ。

『讃岐典侍日記』上(新全集・四二五頁・一一〇九年頃)

(三六)**おほかた**目も見えず、はぢがましさのみよに心憂くおぼゆれば、はかばかしく見えさせたまはず。

『同右』下(四三九頁)

(三七)**おほかた**申し尽くすべきならず。

『大鏡』(新全集・三七七頁・一一二〇年頃)

なお、形容詞を修飾して程度性を表すものも見える。「おそろし」に対しての程度さを表し、「たいそうおそろしい」というように解釈される。

(三八)**おほかた**おそろし。

『枕草子』一四七(新全集・二七四頁・一〇〇一年頃)

以上、中古の資料における「おおかた」を形態別に分けてそれぞれの用法を中心に見てきた。既に多様な用法で使われている。「おおかた」に助詞などがついて名詞や形容動詞の用法となるもの、副詞として用い

られるものが見える。その副詞的用法のうち、平安中期以降推量形や否定形との共起関係が現れはじめることがわかる。ちなみに、このような共起関係は本論で対象とした他の副詞に比べて最も古く生じたものである。

第三節　中世の「おおかた」

「おおかた」は平安時代に名詞的用法を中心に形容動詞的なものや副詞的なものが派生した。中世に入ると、意味や用法の面では変化がないものの、その機能を強めていくように見える。目立つのは、「おおかたの」がかかる名詞句を「ばかり・だに」などによって限定される表現、「おおかたに」を「ただ」が修飾し、強調する表現が見られることである。

(三九)わが御身は限りある御身なれば尋ね求むべきにもあらず、人はただ**大方の**世の響きばかりこそ歩くめれ、まことに心に入れて尋ねぬにこそあめれ、

『とりかへばや物語』巻第三(新全集・三四一頁・一一八〇年頃)

(四〇)ただ**大方の**春だにも、暮れ行く空は物うきに、況や今日をかぎりの事なれば、さこそは心ぼそかりけめ。

『平家物語』(新全集・三一二頁・一二一九年頃)

(四一)豊成聞こし召し、「継子、継母の習ひぞ」と、ただ**大方に**思ひ給へり。

『中将姫本地』(室町物語草子集・新全集・四〇一頁・南北朝以降)

さて、中世の資料の、単独に現れ副詞的に用いられた「おおかた φ」類を見ることにする。「おおかた」と文末表現の共起関係に注目してみると、推量形や否定形との共起関係が見られる。

推量形との結びつきは、主に「おおかた―べし」形式である。そして、否定形は助動詞「ず」または形容詞「なし」などと共起し、全面否定の意を表す。(四二)～(四五)は推量形と共起するもの、(四六)～(四九)は否定形と共起するものである。

【推量表現との共起】

(四二)**おほかた**、うちあらむ人も情を先とすべし。

『十訓抄』上・一ノ四(新全集・三〇頁・一二五二年頃)

(四三)これ体なる能の風体、**大かた**物狂と同じ見風の気色なるべし。

『三道』(能楽論集・新全集・三六四頁・一四〇〇年頃)

(四四)また、百万・山姥などと申したるは、曲舞舞ひの芸風なれば、**大かた**易かるべし。

『同右』(三六〇頁)

(四五)この頃よりは、能の手立、**大かた**変るべし。

『風姿花伝』(能楽論集・新全集・二一六頁・一四〇〇年頃)

【否定表現との共起】

(四六)次の年の九十月にもなりぬるに、さきざき出で来る程なれば、山に入りて茸を求むるに、すべて蔬**大方**見えず。

『宇治拾遺物語』巻第一(新全集・二七頁・一二二一年頃)

(四七)「**おほかた**、かばかりの見物候はず。」

『十訓抄』中 第七・七ノ三十一（新全集・三四四頁・一二五二年頃）

（四八）灸治いまだ快からず侍れども、たまたまの御奉行にて候へば、助け参るべき由を申しぬ。**大方**人数参らず。

『春の深山路』五月（中世日記紀行集・新全集・三三九頁・一二八一年頃）

（四九）はやく跡なき事にはあらざめりとて、人を遣りて見するに、**おほかた**逢へる者なし。

『徒然草』上 第五〇段（新全集・一二一頁・一三三一年頃）

以上のように、中世の資料における「おおかた」には、前代に引き続き推量形と否定形との共起関係が見られる。「おおかた」の陳述性は、中古から現れ、中世の過渡的な段階を経て、近世になって共起関係をさらに強めていくようである。次に、その近世の「おおかた」について見ていく。

第四節　近世の「おおかた」

近世初期の『邦訳日葡辞書』（一九八〇：六九七）の「おおかた」の項には名詞的用法として「大部分」と記述され、「Core vôcatano cotodeua nai.（これ大方の事ではない）」という用例を挙げている。次には、まず副詞的用法として単独の「おおかた φ」類の例を示す。

（五〇）「本復の時まで相待ちて、この事を語るべし」と、かひなき命をつなぎ、世間へ病中と申しなし、外科の上手、諸内玄庵を内証にて頼み、神文の上にて養生して、疵も**大方**なほりぬ。

『武道伝来記』三・巻二（新全集・一一〇頁・一六八七年頃）

（五〇）は「だいたい」の意で用いられているが、近世においては陳述副詞的性格が色濃くなり、特に、近世後期になると共起する推量表現が前代に比べて多様になる。否定形と推量形との共起を中心として、以下に分類して示す。

【否定表現との共起】

（五一）今ほど世間にて、『あの人は万事へつらひなく無欲なる賢人かな』とほむる、その人柄を見れば、**大方**みな礼義をも知らず、よろづふつつかなる緩怠をいたし、きはめて人前に慮外をはたらき、わが言ひたきままに物言ひちらし、人を何とも思はぬあぶれ者なり。

『浮世物語』巻第三（新全集・一五三頁・一六五九～六六年頃）

（五二）草取り肥しに大抵や、**大方**骨が折れる事ぢやないなう

『碁太平記白石噺』巻四（新全集・五〇九頁・一七八〇年頃）

（五三）今の歌人は、**大方**雅言のまことの味を知ることなく、ただうはべばかりの一わたりを心得ゐて上なきことと思ふゆゑに、大きに古歌の趣と違ひて、深き味を失へること多し。

『排蘆小船』（新全集・三五二頁・江戸中期頃）

【推量表現との共起】

○「べし」形

（五四）「今更馴れ**く**しく御入り候へども、たへかねて申しまゐらせ候。**大方**目つきにても御合点あるべし。

『好色一代男』巻一（新全集・二四頁・一六八二年頃）

(五五)これのみ平生思ひやり、「伊勢が心は歌の読み方にて**大方**かくあるべし。」
『新可笑記』四(新全集・五七六頁・一六八八年頃)

(五六)王勃ガ、「朱簾暮捲西山雨」トイヘルモ、他人是ヲ作ラバ、朱簾暮ニ過トカ、暮望トカ、甚卑劣ニシテハ、「捲簾暮望西山雨」ナンド、**大方**如此ナルベシ。
『詩学逢原』巻之下(大系・二五五頁・一七九六年頃)

○「と思う」形

(五七)**大方**天下茶屋あたりで慥に駄々けふと思ふて。『夏祭浪花鑑』第三(大系・二二一頁・一七四五年頃)

(五八)すりや与茂作を殺したも・**大方**同じ奴と思はるゝ・見れば数か所の刀疵・
『碁太平記白石噺』第四(新全集・五一八頁・一七八〇年頃)

(五九)(彌五→大学)大学「はてコリヤ、〔ト和尚が方へこなし有て、〕イヤサ、**大方**上方へ高飛ひろいだと思はるゝわい。」
『韓人漢文手管始』(大系・四〇二頁・一七八九年頃)

○「であろう／だろう」形

(六〇)傳七「言ひさへすれば助けてやる。」ト皆々を突放す。胴八「こりゃ、其二品の。」萬平「有所はかう。」ト両人両方ゟ切掛るを、傳七「はて、合点の悪い。金が欲しけりゃ何ぼう成とやらふ。」ト立廻り。大作「イヤ、金はうぬにやらふ。」ト切掛る。立廻りにて、傳七「**大方**我が知っているで有ふ。こりゃ、言ふて呉いやい。」大作「知らぬわい。」傳七「宗九郎が方に有ふがな。」
『韓人漢文手管始』(大系・三三六頁・一七八九年頃)

(六一)(さる市→犬市)さる市「イヤふといやつらであつた。ちやんとおれにおぶさりやアがつて。其代水を

くらやアがつた時は、たすけてくれろと、かなしいおとぼねを出しおつた。なんでもかすりをとる事ばかり、心がけてゐるやつだから、**おほかた**あいつは、ごまの灰だろふよ

『東海道中膝栗毛』三編下（大系・一六〇頁・一八〇二年頃）

（六二）「そりやはア易いこんだが、火鉢ハこの頃疝気がおこつて、あるく事ができましねへ」「ヤアそりや大へん。こゝの内の火鉢ハ、**大方**、狸か狐の化たのだらう。

『古今秀句落し噺』（噺・一〇三頁・一八四四年頃）

○「だろうと思う」形

（六三）ついぞない三助めが握り飯を投たによつて、おゥれンも怪しいとはァ思つてナ、**おほかた**打だらうと思つてナ、用心してゐたがのゥ、棒を後手で隠してゐる様子も見えず、

『柳髪新話 浮世床』二編　巻之上（新全集・三一八頁・一八一四年頃）

（六四）自ら馬に乗てトいふから、**おほかた**馬士といふ字だらうとおもへば、先陸のト仮名が付居るス。

『同右』二編 巻之上（三五〇頁）

○「に違いない」形

（六五）さりながら、こゝより外に家はなし・**大方**この内へはひつたに違ひはない・エ、誰ぞ来よかし・問ひたやと見やる先より・

『妹背山婦女庭訓』第四（新全集・四四一頁・一七七一年頃）

○「まじ」形

（六六）「一分の立たぬところなれば、相手取るまでもなし」と、自害を先づ差し止め、後に乗りたる侍の

申せしは、「この刀のあり所、某の推量**大方**は違ふまじ。」

『武家義理物語』巻三（新全集・三七四頁・一六八八年頃）

○「まい」形

（六七）満江「こりヤ揚巻どの、何もいふて下さるナ、私も何もいひませぬ。大切の願ひのある身で、この様ナ身持。この編笠をなんとはすつぱじや、それが武士の悴の詞か。**おほかた**そなた計りの心からでは有まい。勸め人があらう。朱に交はれば赤くなると、白酒の糟兵衛どのとやら、よふ大事の悴をこの様な惡者にしてくだされた。禮を言ませう。」

『助六』（大系・一一六頁・江戸時代）

○「う／よう」形

（六八）一トえ「（前略）**大方**かたき同士とやらでおすせう。堪忍しておくんなんし」

『傾城買二筋道』（新全集・一六四頁・一七九八年頃）

（六九）「よく御覧じまし。豆人形とは、**大方**、此事でござりやせう」、

『啌多雁取帳』下（黄表紙・新全集・五八頁・江戸時代）

（七〇）弥次「ハアそれは**おほかた**、寺参にでもいかれた時でござりませう。」

『東海道中膝栗毛』二編（新全集・九二頁・一八〇二年頃）

以上、近世の資料は文末の推量表現が多様化し、推量の陳述副詞として安定した段階に入ったと言ってよい。このような傾向はさらに近現代語にまで続いていくのである。

第五節　明治以降の「おおかた」

本節では、「雑誌『太陽』のコーパス」を用いる。一八九五年、一九〇一年、一九〇九年、一九一七年、一九二五年を対象に「おおかた」（「大方」「おほかた」なども含む）を検索したところ、一七五例[八]が得られ、文語は八〇例、口語は九五例であった。

「おおかた」の使用状況を見ると、文語の場合、一八九五年を中心に多用されているが、時代につれて減っていく。文語の八〇例中、四二例が名詞的用法である。口語の場合は、副詞的用法（五七例）として多く用いられ、推量表現と共起するもの（三〇例）が半分以上を占める。

以下、口語の「おおかた」を年度別・用法別に〈表四-一〉に示す。

〈表四-一〉口語の「おおかた」における年度別・用法別（例）

	おおかた	おおかた＋α		合計
	副詞的用法	形容動詞的用法	名詞的用法	
一八九五	六	一	・	七
一九〇一	五	二	五	一二
一九〇九	二五	・	六	三一
一九一七	一一	一	一三	二五
一九二五	一〇	・	一〇	二〇
合計	五七	四	三四	九五

ところで、名詞的用法や副詞的用法に比べて、程度性や「普通に～・一般的に～」といった意味を表していた「おおかたに」「おおかたな」などの形容動詞的用法の使用数は顕著に減っている。特に「おおかたな」形は近世以降から全く見えなくなり、明治期の資料にも見当たらない。その一方、否定形の「おおかたならず（ぬ）」は、少数でありながら、文語一〇例中七例、口語では四例中三例という使用数で用いられている。副詞的用法の五七例中、文末表現との共起関係を見ると、主に推量形と断定形と共起しており、推量形は三〇例、断定形は五例であった（「その他」二二例には義務の「～ねばならない」形やテ節で終わる文などが含まれる）。ただし、前時代まで見続けられた否定表現と共起する例は見えなかった。

さて、推量形と共起するものに目を移すと、前代から継続する用法が見える。

（七一）子を食ひ物にして旨がる親が世間に有りますが、**大方**其家も菜食なのでせうな。」

無名斎「肉食と菜食」『太陽』2号 1895

（七二）この聲を聞くとアクスヨノフは**大方**此男があの商人を殺した者を知つてるだらうと思つて、

斎藤野の人（訳）トルストイ（作）「流刑者」『太陽』1号 1909

（七三）室内の空氣は不透明で、重く、暖く、人を醉はせる。**大方**其の爲めかも知れぬ。

永井荷風「カルチェー、ラタンの一夜」『太陽』1号 1909

それぞれ文末の「でしょう」「だろうと思う」「かもしれぬ」形と共起している。同時代の小説についてみると、同じく「だろう」「であろう」「でしょう」形などの推量表現と共起した例が次のように見える[九]。

（七四）「あの烟つ様な島はなんだろう」「あの島か、いやに縹渺としているね。**大方**竹生島だろう」「本当

かい」「なあに、好い加減さ。」　夏目漱石（一九〇七）『虞美人草』三二頁

（七五）三尺四尺は愚か、千里を行き尽しても、タンタラスは原が減り通しで、咽喉が渇き続けである。**大方**今でも水と菓物を追っ懸けて歩いてるだろう。　『同右』一〇九頁

（七六）祖父がやっぱりそうであったと云うから、**大方**その気象を受け継いだのであろう。　二葉亭四迷（一九〇七）『平凡』一五頁

（七七）仰向きになってこう四足を突っ張りましてな、尻尾でバタバタ地面を叩いたのは、あれは**大方**苦がったんでしょうが、　『同右』八三頁

以上、明治以降の資料では、主に推量表現と共起するようになっていることが確認できる。

第六節　まとめ

「おおかた」は『万葉集』において名詞として用いられているが、その頃から副詞性が強く見え、その後、次第にその機能が強まっていく。平安時代には、形容動詞の用法も生じ、「おおかたに」「おおかたなる」のほか、「おおかたならず（ぬ）」という形でも多く用いられた。他方、平安中期以降は副詞的用法に陳述性が現れ、推量形および否定形と共起関係を有するようになる。近世からはさまざまな推量表現と共起するようになり、近現代において推量の陳述副詞として定着していったと考えられる。

一　『新全集』「万葉集」三〇九頁

二　『茶漉』コーパス」は、検索できるように処理する段階で、形態素解析には「茶筌」とIPA辞書を利用し、同じ表現の分析にゆれが見られたり、辞書に登録されていない未知語が見られたりするなどの問題点がある。

三　『青空文庫』コーパス」は、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp）に収録されている作品の中、現代語で書かれているものを選んでコーパス化したものである。今回の調査では、「おおかた」は全一三〇例のうち、名詞は五例、副詞は一二五例である。副詞用法の中、文末表現と共起関係をもつもののうち、「だろう」／「でしょう」形は七八例であった。そのほか、「断定形、否定形、『らしい』形」などとも共起関係が見られた。ちなみに、「おおかた」と文末形式とのコロケーション情報をみると、推量の「だろう」形との結びつきが最も強く見えた。（ちなみに、tスコアは5.718である）

四　「古記録フルテキストデータベース」「古文書フルテキストデータベース」「奈良時代古文書フルテキストデータベース」（http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller）全文データベースを利用した。

五　「また、この男、**おほかたなる**ものから、ときどき、をかしきことはいひけり。」『平中物語』八（新全集・四六八頁）

六　『源氏物語』では、三七例の副詞的用法がみられる。このうち、推量表現を伴うものは七例である。

七　『新全集』一三六頁

八　近現代語に頻繁に使われている「大方針」は除く。

九　例（七四）～（七七）は『（CD-ROM版）新潮文庫 明治の文豪』（新潮社）から検索した一部のものである。

第五章　「たいてい」について

第一節　はじめに

「たいてい」について、『日本語文型辞典』（一九九八：一八四）では、習慣的なことに付いて、頻度・確率が高いことを表すと記述されている。『現代副詞用法辞典』（一九九四：二五六）では、一般的にある傾向である様子を表すものと定義されており、二つの用法に分けて説明している。（一）の「たいていの名詞」のように名詞にかかって一般的な名詞を表すもの、および、（二）のように述語にかかって何度も繰り返される行為や状態のうちの多くの割合が一定の傾向になることを表すものである。（二）は、誰かに聞いた情報であって、これまでの勤労感謝の日はほとんど晴れた日が多かったことが類推されるというものである。（三）は「（話し手の基準により）近い所」という条件であれば、「自転車を使う」傾向にあるということを表す。

（二）（三）の場合は、それぞれ「勤労感謝の日」「そんなに遠くない所」という条件に限ってのことを表す。

（一）**たいてい**の人はビートルズの曲を知っている。　『現代副詞用法辞典』（一九九四）二五六頁

（二）毎年勤労感謝の日は**たいてい**晴れだそうだ。　『同右』

（三）そんなに遠くない所なら、**たいてい**は自転車を使うことにしています。　『同右』

これらの定義によって、「たいてい」には名詞的なものと述語にかかる副詞的なものとがあり、ある行為

や事態が行われる頻度や確立が高くなり、それが一般的な傾向を見せている意を表すというようにまとめられる。特に、述語にかかる「たいてい」については、『基礎日本語Ⅰ』（一九七七：一八一）には、「たいがい」（第六章で考察する）とともに可能性が高いことを推量するものとも記されている。

このように、述語にかかって行為や事態が起きる可能性がほぼ間違いないことを「推量」するものは近世前期にごく僅かながら見られるようになり、明治に至って使用が増えるようになるようである。

（四）いやと云は**たいてい**どうよく者と言はれぶず。心得たといふてから迷惑するは我ひとり

『けいせい反魂香』（大系・一六〇頁・一七〇八年頃）

（五）若し奥さんに何か悪いことがあつたとしても、君は**大抵**大目に見てゐるのだらう？

里見弴「恐ろしき結婚」『太陽』4号 1917

（四）については後述するが、話し手がその実現の可能性が高いことについて推量している場面である。（五）は明治のもので、話し手が、相手に対してその奥さんに何か悪いことがあっても、だいたいは「大目に見ているだろう」と、ある事柄が実現する可能性が高いと推量するものである。これらの「たいてい」は文末の「うず」および「だろう」と共起している。

「たいてい」は推量の陳述副詞として今日では用いられているが、どのようにしてその用法を持つようになったかについては、管見では十分な研究が見られない。そこで、陳述副詞となる過程について歴史的観点から考察することとし、あわせて「たいてい」の異形態ともいえる「だいたい（大体）」についても分析を行う。

なお、本章の代表的表記は「たいてい」とする。用例を引用する際、依拠本の振り仮名は省略するが、場

合によって表記する。また、漢字表記は旧・新字体を併用する。用例の所在は作品名、依拠本名、頁、成立年度を示す。

第二節「たいてい」の語源及び出自

「たいてい」についての考察に入る前に、「たいてい」の由来について考えておきたい。「たいてい」は漢語として「だいたい(大体)」から変化したもの[一]である。「だいたい」が呉音読みによるもので、「たいてい」は漢音読みによるものであるが、漢音「たいてい」の語形が歴史的には古い。『色葉字類抄』(一一七七～八一年頃)に「大體 タイテイ。大底 タイテイ 大宗也」とあって、振り仮名が「タイテイ」とあるうえ、「底」は呉音・漢音とも「テイ」であるから、平安時代は漢音「タイテイ」という読みであったと見られる。

『大漢和辞典』(一九五九：四二四)の「たいてい」を見ると、「おほかた。おほよそ。大概。大氐」という意を表し、副詞的用法と見られる用例を挙げている。

(六)天下**大抵**無レ慮、皆鑄二金銭一矣　　『史記』「平準書」

(索隠曰、服虔曰、抵、歸也、劉氏曰、大抵、猶大略也。)

(七)其治**大抵**放二張湯一。　　『漢書』「杜周傳」

一方、『日本国語大辞典』第二版(二〇〇一：七〇二、以下『日国』と称する)では、用例の最初に『九暦』の例が示されている。

（八）自余雑物**大底**如レ左　　『九暦』「九条殿記・殿上菊合・天暦七年」（九五三）一〇月二八日

（八）は「大底」の表記であるから、「たいてい」と読まれることは疑いない。「事柄のあらまし。大略。おおよそ。また、多くを数えあげる中での大部分。おおかた。だいたい」という意味であるが[二]、「雑物のたいていは左の如し」と書いたものか、「雑物はたいてい左の如し」と表記したものか、いずれでも解釈できるものである。ちなみに、『大漢和辞典』（一九五九：四二九）の「大底」はいくつかの意味ブランチがあり、その一つに「おほかた。大概。大抵に同じ。」と記されている。

漢籍の資料でも副詞的に用いられたものが見られるように、すでに名詞的な用法とともに副詞的な用法も広く用いられていたと推測される。その後、同時期に『将門記』（九四〇年頃）、『小右記』（一〇一三年頃）にも「大底」の漢字表記で用いられた例が見える。

（九）長官唱云、天有五衰、人有八苦。今日遭苦、**大底**何為。字書、伊加々世牟也。時改世変、天地失道。善伏悪起、仏神無験。嗚呼哀哉、鶏儀未旧、飛於西朝。

（長官唱へて云はく、「天に五衰有り、人に八苦有り。今日苦に遭ふ、**大底**何為。字書、いかがせむなり。時改り世変じて、天地道を失ふ。善は伏し悪は起りて、仏神験なし。嗚呼哀しき哉、鶏儀未だ旧りざるに、西朝に飛ぶ。」）　　『将門記』（新全集・六〇頁・九四〇年頃）

（一〇）而無二奏聞一、又不レ申二代官一、外記暗所行也者、**大底**如レ泥云々。　　『小右記』正月九日（『日国』・一〇一三年頃）

いずれも副詞的に用いられている。特に（一〇）は『日国』に挙げられたものであって、「事物、事態の数

量や度数が、全部ではないにしてもほとんどすべてに及ぶさまを表わす。ほとんど全部。おおよそすべて。あらかた。だいたい。」という意にあてられている。

このように漢語の性格をもつ副詞について、山田（一九四〇：二七四）は「漢語の副詞をばそのまゝにて、国語のうちに副詞として収用せるもの」[三]と指摘しており、「たいてい」は古代においてすでに副詞的性格を強くもっていたと言える。

次節では「たいてい」について中世から近世、近代にかけてどのように史的展開をしていくか見ていくことにする。

第三節　中世から近世における「たいてい」の変遷過程

一　中世

管見によれば、中世の資料においては少数であるが、中世前期の、和漢混交文の『保元物語』や仮名交じり文の『沙石集』、抄物類に使用が見える。

以下の（一一）（一二）は『保元物語』『沙石集』の例であり、各々名詞的、副詞的に用いられる。

（一一）[四]うぢの長者に補し、翌年仁平元年正月十日、万機内覧の宣旨をかうむりて、天下の大小事をとりおこなひ給しゆへなり。**太抵**（たいてい）も攝政關白のほかに、執柄の臣あひならび給ふ事、希代の例とぞ申

あへる。　　『保元物語』上（大系・六四頁・一二二〇年頃）

（一二）又ヨリタリシニハ、イト意ヨカラヌ體ニテ、「申スベキ事ハ、**大體**（たいてい）申テ侍リキ」ト云キ。一夜宿シテ返キ。　　『沙石集』巻第十末（二）（大系・四四二頁・一二八三年頃）

（一一）は助詞「も」が付くことで名詞的機能をし、（一二）は「申してはべり」を修飾するということで（文中での機能は）副詞的用法であると捉えられる。（一二）では（仏法の修行を終えて）法師から「申すべき事はおおよそ申しました」と言われ、一晩を借りて帰ってきたという意を表す。「教えられる範囲のなかで、全てではないものの、多くの部分、あるいはその以上は教えてあげた」というように解釈される。また、当時の言語特徴がよく見られる抄物の資料に副詞的用法として用いられた例が得られた。調査した範囲では、『史記抄』（一四七七）に二例、『毛詩抄』（一四七五～一五五〇年頃）に一例、『四河入海』（一五三四年頃）に三例あった。このうち、『毛詩抄』『四河入海』はいずれも「大底」の漢字表記であった。

以上、中世の資料に用例は少ないながら、名詞的用法や副詞的用法が見え、副詞的用法は「（定められた範囲の中で）ほとんどすべて」という意を表していたことがわかる。

二　近世

近世においては「たいてい」の用例が次第に増加するとともに、形態や意味用法も多様になる。さて、次の三つの用法に分けて考察することにする。まず名詞的用法は「の」が付く連体修飾のもので、「名詞のたいてい」あるいは「たいていの名詞」形であり、次に副詞的用法は単独で現れ、副詞的に機能するものであ

る。そして、形容動詞的用法は助詞「に」「で」などが付く連用修飾形であり、近世前期頃に初めて現れる用法である。

二・一　名詞的用法

「たいていの名詞」形で用いられた名詞的用法では、その後ろにつく「名詞」の性質に制限はない。調査した範囲では、コト・モノなどを伴っているが、その中でも形式名詞「こと(事)」がきて「たいていのこと」という形が最も多くみられる[五]。中世では「(ある範囲の中で)ほとんどすべて」というように、大部分、それ以上を占めるなどの意味を表したが、そこから「普通の、一般的な」というような意味が生じるようになった。それまでとは違って、「たいてい」は「こと」のような、より一般的な内容を修飾することになったことと関連付けて考えられる。つまり、修飾対象の性質によって「普通一般的」などのような意味をもつようになったと考えられる。

「たいていのこと（事）」形は固定的表現として否定文によく現れ、「たいていのことではない」文型が目立つ。もちろん「こと（事）」のほかに、一般名詞や形容詞（形容動詞含む）が付く例もある。以下に、「たいていの名詞」形に加え、否定文とともに用いられた例も挙げる。

【たいていのこと(事)】

（一三）「(前略)玉の輿とは**大抵**の事、親・一門うかみあがる事ぢや」と、人置のいはが嚊がふれながしして、「けふ今熊屋で上下の妾・白人残らず見給ふはず」といふ。

『野白内証鑑』三之巻(新全集・二七九頁・一七一〇年頃)

（一四）女中一「これほどに申上まするは、並**たいてい**の事ではござりませぬ」
『形容化景唇動：鼻下長物語』上（新全集・二〇一頁・江戸時代後期頃）
（一五）こちのお娘に聞かせたら・**大抵**のことぢやあるまい・
『妹背山婦女庭訓』第四（新全集・四一七頁・一七七一年頃）
（一六）馬土「おかつさまが飯をたくも、**たいてい**のこんではない。」
『東海道中膝栗毛』三編下（新全集・一七一頁・一八〇一～九年頃）

【たいていの＋その他】
（一七）むつかしうもつてまゐれば、女も**大抵**の物ならず、
『野白内証鑑』一之巻（新全集・一六七頁・一七一〇年頃）
（一八）外へ出れば手放しかけ・その大分の進物ども**大抵**の銀目ぢやない・
『双蝶蝶曲輪日記』巻二（新全集・一八七頁・一七四〇年頃）
（一九）名代の新ぞう入かはり、馴染の女郎「夫までが**大体**（たいてい）のくろうじやおざんせん」
『遊子方言』（新全集・五三頁・一七七〇年頃）
（二〇）佐次「何、夜鷹でも。コレ、大分俺をば安くするが、マア夜鷹という物は、野稼ぎなぞといふ物の、**大抵**立派な。」
『お染久松色読販』（大系・二六八頁・一八一三年頃）

前章の「おおかた」で述べたような「普通一般的なこと」を表す「たいてい」が否定文に用いられて、全面否定の意をもつようになり、さらに敢えて強調する意味を帯びるようになったと考えられる。これに対し

て、（一三）のように肯定文に用いられた場合、「大抵の事」とは「（玉の輿とは）たいへんなこと」の意であり、「たいへん」は「通り一遍ではなく、普通でないこと」の意でも用いられている。ここでは「たいていでない」という意が込められているということになる。

二・二　形容動詞的用法

前代まで見当たらなかった形容動詞的用法が、近世に入ると現れるようになる。管見の範囲で、最も古い例は 次の『野白内証鑑』（一七一〇年頃）に見える。

【たいていなら】（未然形）

（二一）**大抵**ならば、しばゐ咄をして浮気なやつぢや。

『野白内証鑑』二之巻（新全集・二四一頁・一七一〇年頃）

このほか、次のような活用形が見える。

【たいていに】（連用形）

（二二）初学の人歌を詠まむとて、まづ最初詠まぬさきから、去嫌を吟味し詞使ひを心得て詠まむとするほどに、覚束なく恐れてのみゐて、歌を詠むこと**大抵**にてはならず。

『排蘆小船』（新全集・二七二頁・江戸中期頃）

【たいていで(では)】(連用形)

(二三)よいく、こちの人が京からの帰りを待つて、詰め開かせ・**たいてい**で暇は取らぬ・

『心中宵庚申』中之巻(新全集・四五四頁・一七二二年頃)

(二四)ヤアいよく胡乱者・なかく**大抵**では白状いたすまい・

『仮名手本忠臣蔵』第十(新全集・一三九頁・一七四八年頃)

(二五)上帯よ、解くかほどくか・**大抵**では・下紐までは手が届かず、

『妹背山婦女庭訓』第四(新全集・四三六頁・一七七一年頃)

【たいていなり】(終止形)

(二六)其後は寝入してゐるが**大抵**なり。

『傾城禁摺本　傾城禁短氣』(大系・三二五頁・一七七一年頃)

肯定文に用いられた(二六)では「普通である」という意を表す一方、否定文に用いられると、「一般的なことではなく、特別である」という意を表し、「普通の程度ではなく、まったく」という否定を強調する用法が生じた。また、江戸時代中期には「並たいてい」形が連体修飾として用いられるようになり、後期以降「並たいてい〜ない」という文型も見えるようになる。

(二七)並**大抵**な口ではないと

『碁太平記白石噺』(大系・五四四頁・一七八〇年頃)

二・三　副詞的用法

中古から「たいてい」は単独に用いられ、副詞的な用法が見られるようになったが、近世に入ると、否定形とともに用いられることが多く、「普通一般的ことではない」というような意を表す「たいてい～ことではない」という文型が多数見られる。ただし、現代語においては「たいてい―否定表現」の呼応関係は見当たらず、その代わりに「並」が付いた「並たいてい～ことではない」という文型が慣用表現として用いられている[六]。

「たいてい―否定表現」は近世前期の資料に偏って現れる。『近世上方語辞典』（一九五五：六四五）にも「下に打消を伴い、並々の…事・ものではない、大層…である。」という記述がある。

（二八）あれがすゝめに爰へ引越。わいらをお客におれが料理。太夫も今朝からせい出して。米洗ふたりかゆ焼たり。ヤモ**大躰**（たいてい）面白い事じゃない。　『伽羅先代萩』（大系・二八七頁・一七四九年頃）

（二九）（かや→やな）やな「ムウ、聞へたわいの。あの妹御のお才様は、**大躰**（たいてい）氣立の良いお人じゃないけれど、あの瀬平様は見掛から憎體。そうして**大抵**（てい）舌たるいお人じゃない。」　『幼稚子敵討』（大系・一五七頁・一七五三年頃）

（三〇）（長門→名山）名山「サア、そふ成たら、わたしゃ**大体**（たいてい）嬉しい事じゃなけれど、ひょっと又宗九郎が

方へ。」　　『韓人漢文手管始』（大系・二八四頁・一七八九年頃）

さらに、近世後期の江戸語資料にも見える。

（三一）座頭「宵から**大体**（たいてい）おこしたこッちやない。」　　『遊子方言』（新全集・五一頁・一七七〇年頃）

（三二）女郎「さりとはおうれしうおざんす　といふて、いろ**く**おもしろき事有　おまへのやうな客人が、もう一人あると、わたしや**大体**（たいてい）ゑゑこッちやおざんせん」　　『同右』（五三～四頁）

以上のように近世では「たいてい」は否定形と呼応して、「普通一般的なことではない」という意で用いられることも多いが、一方で、以下のように節や断定文の中で副詞的に用いられる例も見える。

（三三）女房「そふすると、**たいてい**いゝこゝろもちで御座りやすから、おもひきつて、おだしなさいな。」　　『あごの掛金』（噺・二七六頁・一七九九年頃）

（三四）別に記し侍るなり。この外、万物みな、和漢少しづつの変はりあれども、**大抵**同じものなり。　　『排蘆小船』（新全集・二八五頁・江戸中期頃）

（三五）くもにのつてひぎうなし酒屋とミるとまひ下り、もゝんくわアと、こふうにおどして、酒屋をたふしけるゆゑ、上ミがたすぢハ**たいてい**引つくし、かほをしられて、きつてがきかず。

『はなしのいけす』（嘶・一九五頁・一八二二年度頃？）

（三四）（三五）は「すべてではないものの、ほとんど」の意を表す。一方、次の（三六）の「大抵心が丈夫に成って」は「とても心強くなって」というように解釈され、「程度が普通でないさま」の意を表している。

（三六）さん「わたしもお前のお出で、**大抵**心が丈夫に成ってこんな嬉しい顔見せはござりませぬ。」時定「そんならこゝで御祝儀、大和屋の姉へ、めでたく一つしめよふか。」

『名歌徳三舛玉垣』（大系・七七頁・一八〇一年頃）

このように、否定表現において「普通程度でなく、まったく」の意で用いられたものが、肯定表現において「普通程度ではなく、たいそう」という意に変化したのである。

ところで、近世前期の『けいせい反魂香』（一七〇八年頃）には、文末に推量表現が用いられた例も見える。（三七）は第一節で掲げた（四）と同じ例である。

（三七）七 姫君あきれておはせしが聞けば笑止いたはしや。いやと云ふは**大抵**どうよく者といはれうず。心得たというてから迷惑するは我ひとり。新枕はどうかうときほひかゝって行く嫁入。道から貸して歸るとは咄にも聞かぬこと。こちゃ義理づくめになったかと

『けいせい反魂香』（大系・一六〇頁・一七〇八年頃）

（三七）は、『日国』の「たいてい」の項にも取り上げられているもので、「一つの判断が、絶対確実とはい

えないまでも、ほぼ間違いなく成り立つという気持ちを表す。多分。まず…だろう」という意に当てられている。一方、『新全集』（二二三頁）の頭注には「ずいぶん」と訳されている。すなわち、「とても」無慈悲な者だといわれるだろうというように訳され、「無慈悲な者」を修飾する程度性の意味として捉えているのである。しかし、ここでは、姫君自身は、自分の置かれている状況上、まだ起きていないことに対して、起きる可能性があることを推量する場面として捉えられる。すなわち、（三七）は「すべてではないものの、ほとんど」「だいたい」の意と解釈されるが、文末に「うず」という推量の助動詞が用いられている点を見ると、「たぶん」というような推量の陳述副詞と捉えることも可能である。ただ、調査した範囲では、近世において推量表現と共起する例は他に探すことができなかった。したがって、推量の陳述性の萌芽が見られるという段階であったと考えるのが穏当であるように思われる。その一方で、「たいてい」の陳述性は否定表現と共起する関係に強く見えるというものであった。

ところで、このように「の」が付いて連体修飾するものが多数見えるなかで、「たいていは」形もある。

【たいていは】

以下の（三八）では、「たいていは」は「全部ではないにしても、ほとんど」の意で用いられている。

（三八）女臈のお子は**大体**（たいてい）はをとなしうございますけれど、男の子は悪あがきが過ます。

『浮世風呂』二篇 巻之下（大系・一四八頁・一八〇九年頃）

以上、「たいてい」の古代から近世にかけての史的展開を追いながら、意味用法別に見てきたが、次の第

四節では「たいてい」の呉音読みである「だいたい(大体)」について考察することにする。

第四節　「だいたい」の用法

『大漢和辞典』(一九五九：四二四)の「だいたい」では、いくつかの意味のうち、「おほよそ。あらまし。大局」という説明の用例として以下のような例を挙げる。なお、本節では代表的表記を「だいたい」とする。

(三九)礼之**大体**、体＝天地－、法＝四時－、則＝陰陽－、順＝人情－。　　『礼記』「喪服四制」

「礼のだいたい」という用法からうかがえるように、名詞として扱われている。『日国』第二版(二〇〇一：六九四)では「だいたい」の意の最初の挙例として、中世末期の『易林本節用集』(一五九七年頃)の「大躰　ダイタイ　タイテイ」を挙げている。ここでは「事柄のあらまし、また該当するもののうちの大多数。たいてい。」という意を記し、名詞として用いる。なお、第一節で示したように『色葉字類抄』(一一七七～八一年頃)[八]、『文明本節用集』(一四四四年頃)に「大体」の見出し語はあるが、これは「たいてい」と振り仮名が振られている。これらのことを併せ考えると、「だいたい」は「大体」の呉音読みであるが、日本の文献資料では漢音読みの「たいてい」より後で用いられるようになったことがわかる。今回調査した範囲では、「たいてい」は中古に既に見られる一方、「だいたい」は中世末期頃からその使用が始まったということになる。

なお、『時代別国語大辞典』「室町時代編」(三)(一九八五～二〇〇一)、および『邦訳：日葡辞書』(一九八

〇)には「だいたい」についての記述は見えない。しかも、『日本古典文学大系』『新編日本古典文学全集』に収録されている全作品、および『大蔵虎明本狂言集』や人情本・洒落本・滑稽本などを対象に「だいたい」を検索したところ、次の挙例を除き、すべて「大体(體)」を「たいてい」と漢音読みしていた。

(四〇)又一切ヲ念佛トミレバ念佛ナリ。一念不生ノ心地、阿字本不生ノ字義、是大乗修行ノ**大體**(ダイタイ)、眞言密教ノ通行也。

『沙石集』巻第十末(三)(大系・四四九頁・一二八三年頃)

右の「大体」には「ダイタイ」と振り仮名が見えるが、『大系』本が底本とした米沢本(室町時代末〜江戸時代前期の書写)のものである。したがって、「だいたい」が鎌倉時代までさかのぼることができるかどうかは不明である。

(四一)尤人情と云ふものは、古今遠近、かつて変はることなき物なれども、それは**大体**(だいたい)はさることなれども、次第に世につれて人情も少しづつ変はりゆくこと、人のあまねく知る所なり。

『排蘆小船』(新全集・三〇三頁・江戸中期頃)

「だいたい」は『易林本節用集』にも見えるから、(四〇)(四一)のように室町時代末期以降は「だいたい」の使用が広がっていたことがわかる。ただ、いずれも名詞の用法であって、「あらまし」の意である。また、「たいてい」と同じく、「の」を伴う「―のだいたい」は「(定められた範囲の中で)ほとんどすべて」という用法であり、それらは「全部まではいかないものの、ほとんどすべて」という意で用いられたものである。

第五節　明治以降における「たいてい」と「だいたい」

本節では「雑誌『太陽』のコーパス」を用いて、「たいてい」と「だいたい」の使用状況を見ることにする。前代に比べてその数は増加しており、引き続き三つの用法に分けて記すことにする。

一　「たいてい」の使用様相

「たいてい」について、「雑誌『太陽』コーパス」を用いて、一八九五年・一九〇一年・一九〇九年・一九一七年・一九二五年を対象に「大抵」「大底」等の漢字表記を含めて検索したところ[九]、一九〇九年（明治四二年）を境に口語性をもつものが増えていく。名詞的用法と副詞的用法は顕著に見られる一方、近世前期以降から現れた形容動詞的用法は急減していく[一〇]。

まず、以前から見られる、名詞および形容動詞の用例を挙げる。

①名詞的用法

（四二）凡そ國運の進むといふには先づ**大抵**の事が一緒に進歩しなければ出來ない事であります。

井上哲次郎「戦争後の学術」『太陽』1号 1895

②形容動詞的用法

（四三）それだけに、勞働組合成立までの六七十年間の努力は並**たいてい**でなかつたのである。

安倍磯雄「日本の労働運動と労働問題の現状」『太陽』13号 1925

同様に、慣用的に多用された助動詞「ず」および形容詞「ない」などの否定形を伴う例も次のように依然として見える。

【たいてい―ない／ず】

(四四)おかへりと書いた手紙も上げたのに返事もないは如何した事かと**大抵**案じた事ではない。
従軍人夫「饗庭篁村」『太陽』1号 1895

(四五)設しひよつと間違ひでもすれば忽ち衝突するのであるから、**大抵**気骨の折れる事ではない。
鉄道駅夫「万代花生」『太陽』14号 1901

(四六)民間の事業界も一時大に振興しましたけれども、これは**大抵**基礎鞏固ならず、
渋沢栄一(談)「現下の経済界に対する所見」『太陽』4号 1901

ここで、注目されるのは、「たいてい」と推量形との共起関係である。近世までは否定形と共起関係を持っていたが、明治に入ってから推量形とも共起するようになり、推量の陳述副詞としての用法が現れるに至る。次の〈表五-一〉は「たいてい」と呼応する文末形式を分類したものである。なお、本稿でいう陳述副詞の範囲は、「断定・推量『だろう、らしい、かも知れない、にちがいない、まい』形・意志『う／よう』形・疑問『だろうか』形」(小林)を基にしていることを予め断っておく。

〈表五-一〉「たいてい」と文末表現との共起関係（例）

	一八九五	一九〇一	一九〇九	一九一七	一九二五	合計
【だろう】系	・	二	五	二	一	一〇
【と思う】系	一	二	二	一	・	六
意志形	二	二	一	二	・	七
断定形	三	一六	五	三三	三八	九四
否定形	二	三	四	四	二	一五
合計	七	二五	一七	四二	四一	一三二

【凡例】※「たいてい」と文末表現との共起関係を示したものである。

※「その他」（八八件）は「述語の省略、節や句を修飾するもの、伝言の「そうだ／ようだ」形、解読不可等」を含むもので、この表では省くことにした。

このように明治に入って「たいてい」と推量の意を表す文末表現との呼応関係が見られるようになる。近世前期には、文末に「うず」という推量表現をとる文が一例見られたと前述したが、明治に入ると、多様

な推量の文末表現と共起する例が現れる。以下に文末に推量表現をとる例を挙げる。

○「でしょう」形

（四七）謎のやうな事を申した、あの光代様さ。懇望して居るのは**大抵**お察しでせう。

川上眉山「書記官」『太陽』2号 1895

（四八）同して東洋の安寧を保つ事が叶ひませう。今日の勢ひで戰さは勝ち、**大抵**戰爭も終はるでありませうと思ひます

大鳥圭介「日清教育の比較」『太陽』9号 1895

○「であろう」形

（四九）四夜つゞけてあつた事で、ペイチヤンが如何に繁華であるかゞ**大抵**了解されるであらう。

「北海道枝幸砂金地巡見（接前）」福地信世『太陽』2号 1901

○「うと思う」形

（五〇）即ち甲冑を帶して居る態で、此等は**大抵**支那甲冑から來たらうと思ふのです、

森大狂（記）久保田米僊（談）「甲冑の話」『太陽』13号 1901

（五一）竪の物を横に見たりさへしなかつたならば、**大抵**その見堺ひはつくだらうと思ふ。

小杉天外（談）「発売禁止の命を受けたる時の感想　罪名を濫用する勿れ」『太陽』11号 1909

○「と思われる」形

（五二）ひがないといふことが解つた、して見るとこれも胸甲を當てれば**大抵**大丈夫だと思はれる。

「鋼鉄帽の効能」『太陽』9号 1917

○「はずだ」形

(五三)計畫者自からの悔悟に出でたのでないが、もう**大抵**解かつてもいゝ筈だ。

「大流小流」『太陽』5号 1909

○「かもしれない」形

(五四)最う**大抵**長くなるから鐵良の勢力が出來たかも知れぬが、

大原武慶(談)「清国の真相-清国の陸海軍-」『太陽』1号 1909

○「う／よう」形

(五五)十指の指して可とするものを擧げたならば**大抵**拔擢を誤ることはなからうと信ずる。

池田龍一「人物拔擢の四要件」『太陽』11号 1925

このように、明治に入ると、「う／よう」形、「だろう」形、「と思う」形など、さまざまな推量表現と共起して、その判断が成立する可能性の高いことを推量する意で用いられることが多くなり、推量の陳述副詞として確立されたと考えられる。そして、次のような大正期の用例二に受け継がれ、さらに現代語における推量の陳述副詞としての用法を定着させていったと考えられる。

(五六)その口振で、三吉には、親戚の間に隠れた男女の関係ということだけ読めた。誰がこの娘に言い寄ろうとしたか、そんな心当りは少しも無かった。「**大抵**叔父さんには解りましたろうネ」「解らない」三吉は首を振った。「何か又、お前が誤解したんだろう――雲を烟と間違えたんじゃないか」

島崎藤村(一九一一)『家』五四六頁

（五七）渠はかの女の財布の中と自分のポケトとをそらで数へて見て、**大抵**大丈夫だらうと決心し、かの女だけをその次ぎにつづく二等車へ乗せてやつた。　岩野泡鳴『泡鳴五部』一〇六七頁

ただし、本稿で研究対象とした他の推量の陳述副詞と比べると、その成立はかなり遅い。では、同じ時期に「だいたい」はどのように用いられていたのか、次に見ていく。

二　「だいたい」の使用様相

「だいたい」も、「たいてい」と同様に、「雑誌『太陽』のコーパス」を用いて、一八九五年・一九〇一年・一九〇九年・一九一七年・一九二五年を対象に「だいたい」（「大体」「大體」等を含む）を検索したところ、全九五例が見出された。このうち、文語は六七例、口語は二八例であった。特に、この数値は（一九二五年の一例を除外して）一九〇一年に集中的に現れる[一二]。

前節で「だいたい」の変遷過程を見たが、名詞的用法がわずかであった。しかし、明治に入るとその使用量は増え、名詞的用法、副詞的用法もよく見えるようになる。ただし、調査した範囲では、形容動詞的用法は見えなかった。

しかし、「だいたい」は「たいてい」と違って、文語的性格が強い。文語では名詞的なものが多く見られる一方、口語では副詞的に用いられていることが目立つ。以下、用法別に見てみる。（なお、用例の中には旧字体も併用されている）

①名詞的用法

近世後期に見られた「そのだいたい」形など、前代から続きみられるものもある。意味用法の面では「普通の・一般的な」などの意で、また指示詞とともに用いられたりしている。

(五八)今の教育家の往々口にする所、予輩もその**大体の**主意には同意を表す。
大町桂月「教育時評」『太陽』10号 1901

(五九)人格といふ**大体の**觀念を知了し居れば、それで此徳育方案に就いて論述するには充分である。
中島力造「人格の觀念を基礎とせる徳育法」『太陽』12号 1901

(六〇)けれども、構造法の**大体**は、同一理に基いたもので、石原笠軒「煖室法の種類」『太陽』2号 1901

また、次の(六一)～(六三)は、「通じて・おいて」が付いて[一三]、全体として副詞的に用いられたものである。(これらは連語として扱う立場もあろう)

(六一)其の眼識能く**大体に通じて**、内治外交に對するの經綸も頗る聞く可きものありき。
内閣書記官長『太陽』4号 1901(文語)

(六二)郵船會社に附與したる金額の一部を清國航路に充用するの方針を採り、議會は斯の案を通過したり。吾人は**大体に於て**政府が從來の方針を改め、力を海外航路に盡すに至りたるを喜ぶものなり。
小松崎筑嶺「昨年の経済問題」『太陽』1号 1901(文語)

(六三)「宗匠派の方は幾らか其れに理屈を混ぜて居ると云ふ事が**大体に於て**の差であらうと思ふのす、」

正岡子規（談）「俳諧新旧派の異同」『太陽』4号 1901（口語）

②副詞的用法

『大言海』（一九五二：一二四三）に「だいたい」[一四]の項目に副詞として掲げられ、「オホヨソ、アラマシ、大略、大抵、大概」と記述されている。また、現代語が中心となる新聞記事[一五]を調べたところ、ほとんどすべてが副詞的用法であったことなどを含めて考えると、明治初期に入って副詞的に用いられはじめ、その機能を整えていく段階に置かれていたと考えられる。その意味は「ほとんど全部」「ある判断がほとんど成立する様子」の意で用いられている。

（六四）**大体**現今の風俗は徳川時代に比すれば迥に進歩して居る。

井上哲次郎「風俗改良問題」『太陽』12号 1901

（六五）労働組合は、どういふことを目的としてゐるかといふと、**だいたい**、三箇條の必須の目的を擧げることが出來る。

安倍磯雄「日本の労働運動と労働問題の現状」『太陽』13号 1925

（六六）万望貴君の御忠告が得られゝば好いが……』と、話しぶりは少し唐突であるが、**大体**話をするのが彼に取りては非常の苦痛で、我ながら強ひて励まして云つて居るやうに見受けられた、

上村左川（訳）コナン、ドイル（作）「再婚」『太陽』13号 1901

これが、（六六）のように、比況の「ように」という表現を伴う肯定文で用いられると、その判断が成立する気持ちを表す意を帯びるようになる。また、次の（六七）のように、文末に「できない」という表現をとる

と、「まったく……（いまだ）……できない」というように解釈され、「全面的に」の意を帯びていくのではないかと見られる。

（六七）今や我國に於ては精製糖業は餘程進歩したけれども、**大体**製糖業は未だ完全の域に達したりと云ふことが出來ません。

鈴木藤三郎（談）「台湾の製糖業」『太陽』7号 1901

『日国』では、「断定的に物事を決めつけたり、相手を非難したりする気持ちで用いる。土台。一体全体」という語釈のもと、森本薫の『僕は、**大体**始めっから何にも云はないつもりだったのです』（『華々しき一族』一九三五年）の例を挙げている。おそらく、（六七）はその意味に結びついていくものであろう。

「だいたい」の変遷過程を簡略にまとめると、調査した範囲では、近代以前までは僅かな用例しか得られず、副詞の用法は必ずしも明確にしがたいが、明治初期に入って、名詞的用法・副詞的用法として用いられるようになったと云える。

第六節　まとめ

「たいてい」は中古以降、名詞的用法とともに副詞的用法が見られる中、近世前期の資料からは形容動詞的用法が確認される。しかし、明治に入ると、その形容動詞的性格は失われる。意味面では、「限定された範囲の中で占める部分が多い」などの意から、「普通・一般的」といった概括的な意としてよく用いられるようになる。それが近世前期から否定表現を伴うことで「普通・一般的なことではない」という意味を生じ

させ、明治に入ってからは、推量の文末表現と結びついて、推量の陳述性を獲得するようになったと考えられる。

一 『日本語の語源辞典』(二〇〇五)四六頁

二 今回の調査では、上代の『古事記』『出雲国風土記』や『風土記歌謡』から「大抵」「大體」の表記がみられるものの、依拠本における振り仮名は「おほかた／おおむね」であった。(以下の用例ａ、ｂの表記は『日本古典文学大系』に従う)

(ａ)**大抵**所レ記者、自二天地開闢一始以訖二于小治田御世一。

(**大抵**(おほかた)記す所は、天地開闢より始めて、小治田の御世に訖る。)『古事記』(大系)

(ｂ)宣言、「**大體**雖レ見、無二小目一哉」

(その時宣りたまひしく、「**大體**(おほかた)に見れども小目なきかも」と云りたまひき。かれ、號けて小目野と曰ふ。ここに従臣、井を開きき。故、佐々の御井と云ふ。)『播磨国風土記』賀毛郡(大系)

三 市村(二〇一二)四七頁 引用

四 『新全集』(二二七頁)では「大抵」、『大系』(六四頁)では「太抵」と表記されている。ここでは『大系』の表記に従う。

五 『新全集』に収録されている近世の諸作品を検索したところ、名詞的用法の二六例のうち、「たいていのこと(事)」形は一一例であった。

六 「『朝日新聞』オンラインデータベース」から「たいてい」(「大抵」「大底」などの表記も含む)を検索したところ、全一八例が得られた。「の」「は」などが付いた「たいていの」「たいていは」形は九例、副詞的用法は四例であった。そして「並たいていのこと～ではない」形は四例、「並たいていではない」形は一例であった。

七 用例は『大系』に依った。

八 「大體　タイテイ。大抵　タイテイ　大宗也」と記述されている。

九　検索結果、全六七二例のうち、文語は二三〇例、口語は四四二例であった。
一〇　口語による「たいてい」は、副詞的用法は二七四例、名詞的用法は一五四例、形容動詞的用法は一四例であった。
一一　例(五六)(五七)は『(CD-ROM版)新潮文庫 大正の文豪』(新潮社)から検索した一部のものである。
一二　文語(六七例)の場合、名詞的用法(「助詞などが付いたもの」及び「だいたいに付いて・おいてなど」)は六三例、副詞的用法は四例である。口語(二八例)の場合、名詞的用法は二〇例、副詞的用法は八例である。
一三　口語の名詞的用法(二〇例)のうち、「大体に於いて」は三例である。
一四　名詞としても記されている。『大言海』(一九五二)一二四三頁
一五　「『朝日新聞』オンラインデータベース」(二〇一四年一月一日～二〇一四年一月三一日)から全二一例が得られ、そのうち、名詞的用法は一例、副詞的用法は二〇例であった。副詞的用法の場合は、「だいたい」は推量の「と思う」形などと共起するものも見えた。

・「火山の噴火のメカニズムは、**大体**がわかっていますが、」　二〇一四年一月一四日『朝日新聞』朝刊
・感想戦で両対局者が検討した内容とほぼ同じ。第2回電王戦でツツカナに敗れた船江五段は「自分の公式戦も後日ツツカナに検討させてますが、**だいたい**正しいと思う」。　二〇一四年一月一一日『朝日新聞』朝刊
・**大体**日本人は群れになると安心するところがあると思うけど、　二〇一四年一月一八日『朝日新聞』朝刊

第六章　「たいがい」について

第一節　はじめに

現代日本語における「たいがい」はさまざまな学者や文法書などに「事態や行為が行われる確率が高いことを推量する副詞」として扱われている。工藤（一九八二：五三）は「たいてい」とともに「推測」を表す副詞に分類しており、（一）のように大正のものを取り上げ、推量表現と共起関係にあることを述べている。

（一）一例の（考えておこい）だから、**大概**いいだろうと思う。　志賀直哉『暗夜行路』（工藤　一九八二より）

一方、『大漢和辞典』（一九五六：三七七）の「たいがい」に「あらまし。ひととほり。大槩二に同じ。」という説明があり、（二）のように連用修飾のものを挙げている。

（二）**大概**於二唐人詩一誦レ之尤習　『全唐詞話』（序）

これをみると、「たいがい」は中国から日本に受容される際、「あらまし。ひととほり」という名詞としての意味用法が時代とともに変化して、現代語のように「事態や行為が行われる可能性があることを推量する」という意をもつようになったことが推測される。

『日本国語大辞典』第二版（二〇〇一：五九八、以下『日国』と称する）による「たいがい」の最も古い挙例は平安時代の『小右記』（一〇一六年頃）のものである。

（三）三天旨難レ背。仍聊廻二愚慮一、**大概**洩レ奏耳。　　『小右記』長和四・七・七（一〇一六年頃）

この「たいがい」は「ある物事の大筋となる部分、だいたいのあらまし」という意味をもち、名詞として用いられる。中国語そのままの意味用法を承けているようである。そこで、本章では、「たいがい」がどのような変遷を経て、現代語のように陳述性をもつようになったか、その歴史的過程を考察することにする。なお、本章の代表的表記は「たいがい」とする。用例の所在は作品名、依拠本名、頁、成立年度を示す。用例を引用する際、依拠本の振り仮名は省略するが、場合によって表記する。漢字表記は旧・新字体を併用する。

第二節　中古から近世における「たいがい」の変遷過程

一　中古～中世

平安時代に名詞として既に用いられていることは前述したが、『大鏡』にも似たような例が見える。

（四）今日之事**大概**如此人ヒ装束盡シ　　『大鏡』「裏書」（大系・四一三頁・平安後期頃）

このほか、『色葉字類抄』に「大概　タイカイ　云大宗也」という記述が見えるが、漢文訓読調で用いられる性格のものであったと見られる。ただし、中世後期になると用例が少し増えるようになり、そこに新しい用法が見られるようになる。次に、中世の資料に見られる「たいがい」を形態別に「たいがい＋α」類と「たいがい φ」類に分けて考察することにする。

一・一　「たいがい＋α」類

【助詞などが付く名詞的用法】

（五）およそ、家を守り、芸を重んずるによつて、亡父の申し置きし事ども を、心底にさしはさみて、**大概**を録する所、世の謗りを忘れて道の廃れん事を思ふによりて、まつたく他人の才学に及ぼさんとにはあらず。　　『風姿花伝』第三（能楽論集・新全集・二四六頁・一四〇〇年頃）

（六）およそ、かくのごとく、近年の見聞を安得して、**大概**を書する所、応永年内の作能の数々、末代にもさのみ甲乙あらじと覚えたり。　　『三道』（同右・三七〇頁）

（七）是事ガアルホドニ、其事ノ起ヲ一々ニ**大概**ヲ載タゾ　　『史記抄』三（一四七七年頃）

（八）心うれしき春にこそあれ
　あひにあふ新枕香の梅咲きて

この前句に鶯の待つに鳴きたるとも、また、花の咲きたるを尋ね得たりなどとしても、**大概**は付け侍れども、小眼にあたるにあらず。　『連歌比況集』（連歌論集・新全集・一九一頁・一五〇九年頃）

（九）酒モヨイ悪ハアレドモ、**大ガイ**ハ同者ナリ。　『玉塵』一（一五六三年頃）

（五）～（七）は「を」をとり、（八）（九）は「は」をとっている。これらは「たいがい＋α」類として、「大部分。だいたいのあらまし」の意で用いられている。（五）～（七）の「たいがい」のヲ格は「録する所」「書する所」、動詞「載せる」にかかっている。（八）（九）は「たいがいはAども、B」「Aども、たいがいはB」という文型で、ドモ節の事柄を認めながら、Bの内容を強調する。（六）は、近年に見聞きして得られたことを大まかに書き記したもの、（九）は酒にも良し悪しがあるけど、物事の大筋となる部分はだいたい同じであるというように解釈される。そして、次の（一〇）のように「たいがい」に断定の「ナリ」が付いて述語的に用いられるものも見える。これは「能の構成の概要である」という意である。

（一〇）また、出物の舞楽の人体によりて、切拍子などにて入る事もあるべし。いづれもいづれも、長くては悪かるべし。長短の事、音曲の句数を以て計らふべし。これ、序風の能姿、**大概**なり。

『三道』（能楽論集・新全集・三五八頁・一四〇〇年頃）

【形容動詞的用法】

『時代別国語大辞典』「室町時代編」（三）（一九八五～二〇〇一：九二七）の「たいがい」の項に、形容動詞として「細部への配慮を欠いた大まかな対処で、事が済まされるさまを表す」と記されており、程度性が

含まれている。抄物類では「たいがいに」形で連用修飾の用法が見られる[四]。これは近世に至って相手の行動などに対していい加減にしてやめさせようとする意として「たいがいにして」形につながっていく。

（一一）今ハ簡要ニセウズ、提網ヲバ**大概**ニシテ、謝語ナンドヲ結構スルゾ　『勅規桃源抄』四（一四七七年頃）

（一二）**大概**ニ見タ事リ　『毛詩抄』三（一五三九年頃）

一・二　「たいがい φ」類

単独で用いられて副詞的に機能する用法が見える。『日国』には『兵範記』（一一五三年）の「奉仕御装束、**大概**見于指図」が最も古い例として挙げられているが、漢字仮名交じり文でも（一三）のように鎌倉時代には用いられるようになっていた。

（一三）重障除ル事ヲノヅカラ知レタリ。是レ古人ノ譬ニキカズトイヘドモ、私シニ思ヒヨリ侍リ。念佛・眞言ハ**大概**風情アヒワタリ、義門互ニ相資シテ、信ヲマスベシ。　『沙石集』（大系・一二三頁・一二八三年頃）

（一四）「何レモ異説多端、委細盡スニ不遑。蓬蓽ニ傳ル所ノ一説、**大概**是ニテ候。」ト委細ニゾ答申タリケル。　『太平記』巻第二十五（大系・四六〇頁・一三七五年頃）

（一五）およそ、若年よりこのかた、見聞き及ぶ所の稽古の条々、**大概**注し置く所なり。　『風姿花伝』（能楽論集・新全集・二一〇頁・一四〇〇年頃）

（一六）さきざき、**大概**見渡して、その里の辺に松あり、その所には河ありと心あてをしてとほるべし。
『連歌比況集』（連歌論集・新全集・一七一頁・一五〇九年頃）

（一七）但君トシテハイヅレノ宗ヲモ**大概**シロシメシテ捨ラレザランコトゾ國家攘災ノ御ハカリコトナルベキ。
『神皇正統記』（大系・一一五頁・南北朝時代頃）

いずれも意味の面では「あらまし、ひととおり」という意味をそのまま受けついで、たとえば（一五）は「若い頃から見て聞いた稽古のあり方を大まかに書き記す」ということ、（一六）は連歌などをみる時、どのような心持ちがいいかという質問に対しての答えの一部で、まずは「（全体的に）だいたい見渡して」ということを表す。このように「細かいことは気にせず、全部ではないが、ほとんど、だいたい」というような意味を表す。構文的にみると、主に節や断定文に用いられている。（一四）（一五）は断定文、（一三）（一六）（一七）はテ節や句にかかっている。

以上、名詞性が強く見られる原義を保ちつつも、形容動詞や副詞の用法を生じさせ、多様化してきた様相がうかがわれる。

二　近世

近世初期の『邦訳：日葡辞書』（一九八〇：六〇四）では「Voyosono coto（およそのこと）大部分、あるいは、おおよそ」と記され、名詞的なものを代表として挙げている。しかし、このような「たいがい」の名詞としての用法は、調査した範囲では多くはなかった。そこで、近世における「たいがい」の使用状況について、同じく「たいがい＋α」類、「たいがい φ」類に分けて見ていくことにする。

二・一「たいがい＋α」類

まず、名詞的用法としては依然として「を」格をとるものがある一方、「の」を伴う連体用法が初めて見られるようになる。そこから指示詞とともに用いられるものも現れる。特に、指示詞を伴う傾向は「たいがい」のほか、前章で取り上げた「だいたい」にもよく見られる。これらは、前文で述べた内容を受けて、その概略的なことを表す用法である。

【助詞などが付く名詞的用法】

（一八）**大概**を論ずるときは、まづ万葉などはありのままにて、実情と云ふべし。

『排蘆小船』（新全集・三三七頁・江戸中期頃）

【たいがいの名詞／名詞のたいがい】

（一九）其ウヘ衣類食物ハ、望ノ通ニイタサセ、遊興物参等、心任ニ致コトナレバ、**大概**ノ孝行ハ致シ候。

『都鄙問答』（大系・三八四頁・江戸中期頃）

（二〇）心の操定らざる事かくのごとし。重忠幼より聖賢の書を読み、人の道の**大概**を知る。

『古今奇談 英草紙』第三巻（新全集・一一七頁・一七四九年頃）

（二一）古今ヲ合セタルガ趣向也。丁ド詠歌ノ**大概**ニ同ジ。

『槐記（抄）』（大系・四七五頁・江戸時代）

【その＋たいがい】

(二二)その歌いかに秀逸といへども、取るに足らざるなり。されば先達もこれを重く教へたまひて、その書又多し。されどもその**大概**は、書きも記すべけれども、精しきことは書き記しがたし。(中略)今の世、「てには」伝授と云ふこともあれども、これもその**大概**にて、なかなか「てには」伝授をしたればとて、悉く「てには」の悟らるる物にもあらず。

『排蘆小船』(新全集・三四四頁・江戸中期頃)

次は、形容動詞的用法である。依然として「たいがいに」形で事柄や事態をある程度で済ませるさまを表す。すでに中世後期に用いられており、近世後期の黄表紙『敵討義女英前代』などでは「たいがいにする／して」形として「いい加減にする／して」という意を表すようになり、さらに、明治にまで固定的な表現として使用され続ける。

【たいがいに】

(二三)(茶や男→女房)〇台所には男どもが 茶や男 「おかみさま。あれは何か、おかしなもので御座りますぞへ。**大がい**にあいさつをして、おかへし被成ませぬか」

『遊子方言』(新全集・四四頁・一七七〇年頃)

(二四)或人曰。「小見世の女郎は初会なぞに、『わつちや子どもの時は丁子やに居やした』の『扇屋にゐた』のと、とはずがたりをするものなり。これは小みせに居るをはぢてのまけをしみなり。**たいがい**に聞ひてをくべし」と云々。

『傾城買四十八手』(新全集・一一五頁・一七九〇年頃)

(二五)まことにみへも無くかざりも無く、傾城も楽屋は只の女にて、爰にいろくあれども、こと繋く、またあからさまにはあらわし難く、御存知のおかたは**大概**に御察し、と略す。

『傾城買二筋道』（新全集・一六二頁・一七九八年頃）

（二六）（法性寺の入道→つうだ左衛門）法性寺の入道「これ**くたいがい**にしてやめませい。どうかとんだ事を言い出しそうだ。」　『形容化景唇動：鼻下長物語』下（黄表紙・新全集・二一二頁・江戸後期頃）

また、連体形「たいがいな」形も見られ、主に形式名詞「こと」「の」などに付いて「一般的なさま、ありふれているさま」の意で用いられている。

【たいがいな】

（二七）それは**く**きつい弱りいの・**大概**な事なら、もう了簡してやらんせ。

『妹背山婦女庭訓』巻四（新全集・四三一頁・一七七一年頃）

（二八）**大概**な事で助る事なら、夫程結構な事ハない。

『鳩潅雑話』第十二巻　三（噺・三三二頁・一七九一年頃）

（二九）（梅→きよ）梅「ァ、もし、お清どん**く**。どふぞおまへ往ておくれなら御如才もあるめへが、此間の通りにして、そして帰りに親父ばしの和田で**大概**なのを沢山と焼て、お飯を付てよこせと、言付て来ておくれ。そして仕出屋の方へは玉子蒸の中へぎんなんを多分入れてと左様いっておくれ。

『風月花情　春告鳥』三編　巻之八（新全集・四八八～九頁・一八三六年頃）

二・二「たいがい φ」類

副詞的用法として、それまでの意味とは違った、新しい意味が近世前期の資料に見られるようになる。話し手によって、ある事柄や事態が起きる可能性を推量するというような意で用いられるようになる。

まず前代からの「細かいことは気にせず、全部ではないが、ほとんど、だいたい」などの意味を表すものから見ていく。

(三〇)「はゞかりながらその御絵図を私へ御かしなされて下されませ。今日中に上下をかけありき、**大概**御絵図に俤の似寄りましたばかり撰ってつれまして参りませう。

『野白内証鑑』三之巻(新全集・二八一頁・江戸初〜中期年頃)

(三一)それは先づ珍重權三殿は御存知ないか。されば存じたとも申されず存ぜぬとも申されぬ。惣じて是は茶の湯の極意。家の傳多けれども師匠市之進一流は。東山殿より的傳。一子相傳の大事なれば。權三體が茶の湯で傳授許し受けう筈もござらねども。師匠の咄聞きはつった儀も有り。**大概**非の入らぬ程の御用の間には合せませうと。『鑓の權三重帷子』上之巻(大系・二六〇頁・一七一七年頃)

(三二)夫も夫には極らぬ。女夫子も有〻 又顔の似ぬ子も有。マア**大概**顔が似れば心もよふ似て。

『菅原伝授手習鑑』(大系・一〇五頁・一七四六年頃)

(三三)まづいかやうにも構はず、我知らぬことはその分に打捨てて、覚えてゐるほどの才覚にて、思ふ通りを何事も構はず詠み出だし、さて歌出で来て後に、**大概**去嫌ひなど吟味し整へて、さて人に見せるときに、我え心得ぬこと、誤りなどあれば、添削す。

『排蘆小船』(新全集・二七二頁・江戸中期頃)

(三四)(聖吉→けん蔵・徳太郎) 聖吉「コレくゆふべの玉章を見せてへ。おれにどうもわからねへ事がある

(中略)ソレ爰よ。をとゆふは御やくそくのこがねいつひらサ。これはソレ読本の文句にあるか

ら大概(ていげい)覚えてゐる」　『柳髪新話 浮世床』初編 巻之中(新全集・二七五頁・一八一三年頃)

いずれも「すべてまではいかないものの、ほとんど」という意である。意味的には前代と異ならないが、(三一)は「師匠の話を聞きかじったこともあり、だいたい非難を受けぬ程度のご要はまにあわせられましょう」[五]というように解釈され、この「だいたい」は「非難を受けない」という程度であることを修飾する例となっていて、事態や事柄に対して話し手の気持ちが含まれるようになったと見られる。そして、近世後期には否定文のなかで用いられるようになる。

(三五)凡日本の水の最上ハ、玉水かと存ます。私も大概呑で見ぬ水もごさりませぬが、糺や醒が井ハ水くさし。　『鳩渟雑話』第十二巻 一(噺・三一八頁・一七九一年頃)

(三六)文詞は昔も今も只義理の達らんのみを要とす。大概歌詞にかはることなし。古今集の序、土左日記などいづこか聞えざる事ある。　『歌学提要』(大系・一六四頁・一八四三年頃)

工藤(一九八二:五二)は、述語が文の叙法(ここでいういわゆる「陳述」)を決定する中核であり、それに関わる副詞は述語の叙法性を明確化するとしている。ただし、この時点では、まだ「たいがい」と文末表

現が直接に関わって関係するものは見当たらないが、何らかの繋がりが生じはじめた段階であるように考えられる。

二・三　陳述性の発生

近世後期になると、次のように文末に推量表現をもつ文に用いられた例が見える。

○「そうだ」形

（三七）主人から頂いた定紋付を胴着にして着て獣ツ臭い身に付て、猪や猿を打に出る。そしてマア、麁相かしい定九郎が足を拿てからびつくりすることがどこにあるものか。猪だか人だか**大概**しれさうなものだ。猟人が火縄を消やうなことでどうして渡世がならうぞい。

『浮世風呂』二編　巻之下（大系・一五三頁・一八〇九～一八一三年頃）

○「う」形

（三八）（西心・白蓮・杢助）西心「サア、追暖かになって來る故、善光寺へ参詣せうと、それ故今晩お礼やら、お暇乞に上ったのじゃ。」白蓮「何、善光寺へ行かっしゃる。そりゃアいゝこったが、然しあちらは名代の雪。三月にさっしゃればいゝに。」西心「イヤ、もふ**大概**雪も片附ましたらふ。」杢助「どふして、わしらが國の雪といふものは、五月でなくちゃア解はしねへ。今の様に泪をこぼしたり、水鼻を垂らしたりすると、直に氷柱にぶら下る。」

『小袖曽我薊色縫』（大系・三八三頁・一八五九年頃）

いずれも「実際に確かなことは分からないまま、推量するさま」を意味するものである。(三七)は、「猪か人かはたいていわかりそうなものだ」の意、(三八)は「雪が溶けたかどうかわからないが、たぶん雪は溶けただろう」の意である。これらは現代語に近い用法であり、推量の陳述副詞として用いられたものと認められる。このような陳述副詞の用法は、『日国』の最も古い挙例は『武蔵野』(一八八七)[六]であるが、近世後期に遡ることができる。

第三節　明治以降における「たいがい」

「雑誌『太陽』のコーパス」を用いて、一八九五年・一九〇一年・一九〇九年・一九一七年・一九二五年を対象に「たいがい」(「大概」等を含む)を検索したところ、二二三例が得られた。文語は七五例、口語は一四八例で、口語は文語の例数より二倍程上回っていた。口語を中心に形態別に分けてみると、「たいがい＋ø」類は五三例、「たいがい＋φ」類は九一例であり、現代語的表現(述語の省略など)は四例であった。そして、副詞的用法に比べて、名詞的用法や形容動詞的用法の使用が減少していることが分かる[七]。

では、明治以降の「たいがい」を用法別に見ていく。まず、「たいがい＋α」類に属する、助詞などがついて連体修飾、連用修飾するものがある

(三九)之を要するに、**大概**の博物館では、そんなに保存法も考へないし、

神保小虎「僕の嫌ひなハコブツ館」『太陽』9号 1917

形容動詞の用法は一〇例中、五例が程度性を表すものでおり、(四二)のように「たいがいに」形は前代から見える「ある程度ですませる」という意で用いられている。

(四〇)夜間に於て眼が一層輝き、**大概**なら暗中で物を見得るともいふ。

江見水蔭「怪奇探偵　悪獣性の女」『太陽』7号 1925

(四一)『俺は**大概な**種類は食つて見たな、勿論料理してだが。』

三上於菟吉「長篇小説 蛇人（第六回）」『太陽』7号 1925

(四二)あんまり深入りすると、他人にも迷惑をかけるので**大概**にする。

古島一雄「役人となつての感想」『太陽』9号 1925

そして、講演の内容を収録したものには、「たいがいね」(手島精一「工業教育」『太陽』2号 1895)というような口語用法も見られた。

副詞的用法とされる「たいがい φ」類はさまざまな文末表現との結びつきが見られる。近世後期には少数であるが推量形と共起するようになったことは前節で述べたが、明治に入ると、断定形(三九例)との共起が多く見える一方、推量形のうち「だろう」形(五例)、「う／よう」形(二例)などとの共起関係も認められる。時代とともに推量形との共起関係を徐々に強めていき、推量の陳述副詞になっていったと考えられる。

以下の〈表六-一〉は「たいがい」と文末表現との共起関係を示したものである。

〈表六-一〉「たいがい」の共起形式(例)

【凡例】

※「たいがい㋐」類のうち、副詞として文末表現と共起関係をもつものを対象とした。

※ 本稿で陳述副詞とする範囲は、「断定・推量『だろう、らしい、かも知れない、にちがいない、まい』形・意志『う／よう』形・疑問『だろうか』形」(小林)である。序章参考。

※「その他」(四三例)は「述語の省略、節や句を修飾するもの、否定形(七例)、解読不可等」を含む。

	一八九五	一九〇一	一九〇九	一九一七	一九二五	合計
推量形	・	一	二	二	二	七
意志形	・	一	一	・	・	二
断定形	一	五	一二	一五	六	三九
合計	一	七	一五	一七	八	四八

では、「たいがい」と共起関係が見られる用例を見てみる。

○断定形

(四三)演藝會ツて學校の教師や生徒のすることですから**大概**定つて居ます、

やなぎ(訳)ゼ、クイヴハー「日曜学校の生徒」『太陽』4号 1895

(四四)充分に分からぬところもあるけれども**大概**分かつた。

遠藤吉三郎「『自然界の三大矛』盾』に就て」『太陽』2号 1909

(四五)其繁殖時期以外の時は**大概**雌と雄とは其居所を別にして居るのが多いやうである。

岸上鎌吉「魚類は無尽蔵なるか」『太陽』11号 1909

○「だろう」形

(四六)長崎邊に存した寺院書籍繪畫類はこの時**大概**亡くなつてしまつたのであらう。

新村出「西洋画伝来の起源」『太陽』1号 1917

(四七)『(前略)クラシツクつて何と云ふ意味なの?』『**大概**古いつて事だらう。』

〈小話〉『太陽』4号 1925

(四八)風さへあれば、これだけの放火で、**大概**、灰になるだらうよ。六十人もあれば好いんだ。

山中峯太郎「支那革命秘史 乱華」(第二回)『太陽』11号 1925

上述したように、断定文に置かれる例が多い。ただし、(四五)のように「繁殖時期の以外は雌と雄とは其居所を別にして居る」という様子をみて判断する「〜ようだ」も断定文に含めてある。

○「う/よう」形

(四九)『でも、それは如何しても申されません、と、まで申したら**大概**御察しになりませうが……』

江見水蔭「海賊村」『太陽』3号 1909

意志形の「う」はここでは推量の意である。右の表では用例が少なく見えるため、少し明治期の小説から推量表現と共起する例を挙げておく。

（五〇）「どうも相済まん、僕は全然遊んでいて。寄附金は**大概**集まったろうか」

国木田独歩（一九〇二）『酒中日記』二六四頁

（五一）「（前略）あんな面倒臭い事をするよりせめて木札でも懸けたらよさそうなもんですがねえ。ほんとうにどこまでも気の知れない人ですよ」「どうも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちと聞いたら**大概**分かるでしょう」「ええあんな汚いうちは町内に一軒しかないから、すぐ分かりますよ。」

夏目漱石（一九〇五）『吾輩は猫である』二九四頁

（五二）この旗さえ見たらこの群集の意味も**大概**分るだろうと思って一番近いのを注意して読むと木村六之君のを凱善を祝す連雀町有志者とあった。

夏目漱石（一九〇六）『趣味の遺伝』三一七頁

なお、〈表六-一〉には示さなかったが、近世にも否定文のなかで用いられたが、明治にも次のようなものが見られる。（五三）は否定形と共起し、事柄を否定する用法である。

○否定形

（五三）我國には外國に做つて種々の團體が出來て來たが、是等の組織は**大概**完全と云ふことが出來ない。

内藤久寛「商業会議所改造の急務」『太陽』5号 1925

工藤（一九八二）の指摘の通り、「たいがい」は陳述性を見せかけている過程にあるのかもしれない。ただし、用例は少ないながら、文末の推量表現との共起する関係にあるのは間違いない。したがって、陳述副詞の一種として認めるべきものであると考えられる。

第四節　まとめ

中古から明治以降にわたって「たいがい」の意味用法について検討した。「たいがい」は中古では名詞的な性質が強く見え、その後、中世になると、助詞などがつく名詞的用法のほかに、形容動詞的用法、副詞的用法が生じた。形容動詞的用法には程度性が含まれる用例があり、近代にまで引き継がれる。近世では、主に副詞的用法として多用され、特に、後期になると推量表現と共起関係をもつようになる。そして、明治に入ると、推量の陳述副詞としての性格を徐々に強めていくことになった。

一　工藤（一九八二）の例を再引用した。

二　『大漢和辞典』に「大概」と同じ意味として「大槩」の項目が記されている。その意味は「あらまし。おほかた。ほとんど。大概に同じ。」（二六五一頁）。また『下学』『文明』『饅頭』『黒本』『書言』では「大概」ではなく「大槩」と表記されている。

三　「天旨背き難し。仍て聊か愚慮を廻らし、大概を洩らし奏するのみ」

『角川古語辞典』第四巻（一九六三）七頁

四　例（一一）（一二）はいずれも『時代別国語大辞典』「室町時代編」より取り出したものである。

五　『新全集』二六〇頁

六　山田美妙（一八八七）『武蔵野』上「此風の言葉は慶長頃の俗語に足利頃の俗語とを交ぜたものゆゑ、大概其時代には相応して居るだらう」（『日国』より）

七　「たいがい＋α」類の中、名詞的用法は三四例、形容動詞的用法は一九例である。

終章　陳述副詞への進化

第一節　副詞における推量性の発生時期

本稿の第一章から第六章にわたって陳述副詞「きっと」「おそらく」「たぶん」「おおかた」「たいてい」「たいがい」の歴史的変遷について考察した。現代日本語において、この六つの副詞は推量の意を表す陳述副詞として取り上げられているが、もともと陳述的性格を持たなかったものである。それが、時代の推移とともに陳述性をもつようになったもので、そのように陳述性がどのような環境から発生したのかについて検討した。最後に、本章では、本稿で扱った推量の意を表す陳述副詞がいつ頃から陳述性をみせるようになったかをまとめる。ここで取り上げる六つの副詞「きっと」「おそらく」「たぶん」「おおかた」「たいてい」「たいがい」は、前述の通り、推量の意を表すという共通点を持っている。しかし、時代を遡っていくと、他の品詞から副詞に転成したり、同じ品詞でも性質が違ったりしたが、次第に推量の意を獲得するようになるなど、それぞれが経てきた個別的な由来について、その陳述性の発生時期についてまとめることにする。なお、本論の用例を再録するが、用例には新しい番号を付けることにした。

①きっと

「きっと」は平安時代にはすでに「きと」という語形で様態副詞として用いられていたが、促音「つ」の介入という語形変化とともに事態や事柄に対する話し手の推量判断が含意されるようになる。それは次のように一三世紀頃のことであったと見られる。

（一）義通申しけるは、「入道殿は船岡山に籠らせたまひて候ふが、『また都に合戦候ふべし』とて、『軍の慣らひ、**きつと**見んと思ふとも、見ぬ事もあるべければ、公達たち向へ進らせよ』と仰せ候ふあひだ、御迎へに参りて候ふ」と申しければ、十一になる亀若、九になる鶴若、七になる天王とて、三人は、聞きあへず、喜びて、輿に走り乗る。　『保元物語』下（新全集・三五二頁・一二二〇年頃）

室町時代末期になると、推量表現と共起関係をもつようになる。次の例は、花は「今夜の中」といった限られている間に、話し手は「発く」可能性を推量している。さらに推量の文末表現「べし」を伴っており、一六世紀頃には推量性を獲得するようになり、陳述副詞化していったと認められる。

（二）花ハ今夜ノ中ニ、**急渡**（＝急度）発クベシ。　『中華若木詩抄』中（一五三四年頃？）

このように推量の「べし」形から、事態に対して話し手の気持ちを表す文末表現と共起する例が増加する。当時は、「ましょう」形や「う／よう」形といった意志表現との共起関係が強く見られる。

近世後期になると「だろう」形と共起する例が見られるようになり、明治以降も推量表現との共起関係を

さらに強めていったと考えられる。

（三）（そで・薄・●▲×・吉）●▲×「ほんざますョ。モウくくく鳥雅さんが小児の節はきつと斯ざましたらふョ」

『風月花情　春告鳥』四編　巻之十（新全集・五二五頁・一八三六年頃）

②おそらく

もともと「おそる」のク語法に由来するもので、連語「おそるらくは」の語形から「る」が音韻脱落して、平安末期になると「おそらくは」形が見えるようになった。そして、語形変化とともに、「恐れていることには」という意から、中世以降からは副詞として「事態が行われる可能性が高いことを推量する」意でも用いられるようになる。

（四）『若シ其ノ書ヲ不取ズハ、**恐ラクハ**他ノ官ノ者、此ノ由ヲ不知ズシテ、亦、君ヲ捕ヘムト為』ト。

『今昔物語集』（二）巻第七・三十一（新大系・一六一頁）

中世後期以降、事態や行動などに対する話し手の気持ちを表すものが現れ、文末に「う／よう」形を持つ文に用いられて話し手の意志を表すようにもなる。さらに、近世前期に入ると、推量の「む（ん）」形と呼応して話し手の推量を表すものも見られる。さらに明治になると推量表現が多様になる。

（五）（右近→妻）妻「なう物狂や物狂や、夫ありながら何と妾が出られるものでござるぞ。これはふっつりと思ひ止まらせられたがようござりませう。」右近「すれば、これほどに言うても、そちは出ることはなるまいぢゃまで。」妻「はて、何と女が出らるるものでござるぞ。」右近「よいわ。おきをらう。もはや頼まぬ。上は御清粋ぢゃ。理を以て申し上ぐるに負くるといふことがあるものか。**恐らくは**勝ってみせう。」妻「アア申し申し、まづ待たせられい。」『聟女狂言』「右近左近」（新全集・三一五頁）

（六）さては古狸などのばくる、みこしにうだうといふものにこそ。**おそらくは**いとめんものをと、ゆみとりなをし、すびきして、猪の目すかせるかりまたの矢をとり、かの坊主のつらを目もはなたずにらみゐるに、ひた物たかくなりて、後には見あぐる事、ゆひし髪の襟につくまでせり。

『御伽物語』巻一（新全集・四六〇頁・江戸前期）

（七）文藝院の設立などといふ話もあるが、**おそらく**嘘だらう。

内田魯庵（談）「文芸取締問題と芸術院」『太陽』1号 1909

③たぶん

「たぶん」は古くは「限定の範囲で占める多い部分、大多数」などの意を表したが、事柄や事態に対する話し手の判断に用いられるようになり、中世後期には「その可能性が強いことを判断していう。おおかた。多くは。十中八九。大抵。」などの意を表すようになる。近世初期には陳述文に用いられる例が多数見え、特に、以下の『鬼山伏狂言』「柿山伏」のように疑問の「か」に推量の「と思う」形が連なった推量の意とも共起するようになっている。

（八）柿主「何者ぞと思ふたれは、かたすじやよ、さりながらからすならはなかふぞ、なかずは火とである事もあたふ、人ならはにくひ事じやが、**多分**からすかと思ふ」（からすのまねをする、あどわらふて）

『鬼山伏狂言』「柿山伏」（『大蔵虎明本狂言集』上・四一七頁）

他にも意志文（「ましょう」形）、断定文とも共起関係が見られるようになり、さらには推量の「だろう」形との共起関係も現れるようになった。

（九）芝居がへりの二人づれ、くらまへ通りを咄しながら、どうも弐丁目ハよく大入でハねへか。あの座組なら、今年ハなにをしてもいゝ。そのうへ作者が河竹ときてゐるから、鬼に鉄棒たそこで又ゑんまと鬼の浄るりを出したのだらう。しかしありやア**多分**おくらだらうよ。アノ一休さまが、聞しより見ておそろしき地ごくかな、トいふと、音羽屋がなんとかいつたツけなア

『梅屋集』（大系・二八五頁・一八六五年頃）

④おおかた・たいてい・たいがい

「おおかた」は上代から副詞性が強い用例が見え、平安時代には副詞としても用いられ、推量形との共起関係が見られる。

（一〇）色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、**おほか**たおどろおどろしう長きなるべし。

『源氏物語』末摘花（新全集・二九三頁・一〇〇八年頃）

近世後期からはさまざまな推量形との共起関係が強まり、本格的に陳述副詞化していくと考えられる。

（一一）（前略）**大方**かたき同士とやらでおすせう。堪忍しておくんなんし

『傾城買二筋道』（新全集・一六四頁・一七九八年頃）

（一二）（さる市↓犬市）さる市「イヤふといやつらであつた。ちやんとおれにおぶさりやアがつて。其代水をくらやアがつた時は、たすけてくれろと、かなしいおとぼねを出しおつた。なんでもかすりをとる事ばかり、心がけてゐるやつだから、**おほかた**あいつは、ごまの灰だろふよ」

『東海道中膝栗毛』三編下（大系・一六〇頁・一八〇二年頃）

（一三）この聲を聞くとアクスヨノフは**大方**此男があの商人を殺した者を知ってるだらうと思つて、

斎藤野の人（訳）トルストイ（作）「流刑者」『太陽』1号 1909

「たいてい」は平安時代から名詞および副詞として用いられていた。近世前期に入ると、「たいていに」という語形で形容動詞としても用いられるようになる。名詞、副詞および形容動詞の用法ともには主に否定文に用いられ、さらに「たいてい～ことではない」という固定的な表現は現代にまで引き継がれる。また、ある事態（事柄）が成立する可能性が高いということを話し手は推量する意も現れる。

（一四）いやと云は**たいてい**どうよく者と言はれぶず。心得たといふてから迷惑するは我ひとり

『けいせい反魂香』（大系・一六〇頁・一七〇八年頃）

明治になると、文末の推量表現と共起する例が急増するようになる。この時点から「たいてい」は推量の

陳述副詞としての体裁を整えたと言える。

（一五）即ち甲冑を帶して居る態で、此等は**大抵**支那甲冑から來たらうと思ふのです、

森大狂（記）久保田米僊（談）「甲冑の話」『太陽』13号 1901

「たいがい」は中世に名詞として用いられており、中世前期には形容動詞や副詞の用法が加わった。副詞的用法は近世前期の資料から意志形に当たる表現と結びつきはじめ、後期になると推量の「だろう」形との共起関係を見ることができる。

（一六）「はゞかりながらその御絵図を私へ御かしなされて下されませ。今日中に上下をかけありき、**太概**御絵図に俤の似寄りましたばかり撰つてつれまして参りませう。

『野白内証鑑』三之巻（新全集・二八一頁・江戸初～中期年頃）

（一七）（西心・白蓮・杢助）西心「サア、追暖かになって來る故、善光寺へ參詣せうと、それ故今晩お礼やら、お暇乞に上ったのじゃ。」白蓮「何、善光寺へ行かっしゃる。そりゃアいゝこったが、然しあちらは名代の雪。三月にさっしゃればいゝに。」西心「イヤ、もふ**大概**雪も片附ましたらふ。」杢助「どふして、わしらが國の雪といふものは、五月でなくちゃア解はしねへ。今の様に泪をこぼしたり、水鼻を垂らしたりすると、直に氷柱にぶら下る。」

『小袖曽我薊色縫』（大系・三八三頁・一八五九年頃）

さらに、明治になってからは断定文を中心に推量形・否定形・意志形と共起するなど、共起関係が多様化

した。

（一八）風さへあれば、これだけの放火で、**大概**、灰になるだらうよ。六十人もあれば好いんだ。

山中峯太郎「支那革命秘史　乱華」（第二回）『太陽』11号 1925

以上、第一章から第六章の副詞に陳述的性格が、どのような過程を経ていつごろ獲得されたかをまとめたが、それぞれ推量性の発生時期は異なり、次にこれを図示しておく。

〈図一〉推量的意味を表す陳述副詞の発生時期（○：副詞的用法の初出　※：意味変化の始発点　●：推量表現との共起）

	上代	中古	中世 前期	中世 後期	近世 前期	近世 後期	明治以降
きっと		○	※	●			
おそらく			○ ※		●		
たぶん				○ ※	●		
おおかた		○ ※ ●					
たいてい		○			※		●
たいがい			○		※	●	

第二節　推量的意味の陳述副詞への傾斜

本節では、前節で述べた陳述副詞の個別的現象に基づき、推量的意味を表す陳述副詞への傾斜について考察する。

言語は時間とともに変化するものであるが、「きっと」「おそらく」「たぶん」「おおかた」「たいてい」「たいがい」においても時代が下るに従って変化し、その結果、文末表現と共起して、推量の陳述副詞となった。そもそも機能的には別の性格を持っていたが、その変化の過程はそれぞれ個別的であるものの、歴史的観点に立つとそれらには次のような共通する傾向も見える。

①構文的機能として、否定表現、または「～ば」などの条件節を伴う場合が多い。
②推量表現と共起する前後の段階で「ましょう」形、「う／よう」形などの意志表現が文末にくる傾向がある。

まず、①構文的機能として否定表現を伴う場合であるが、「大部分～でない」という意味から、陳述副詞としての性格を強めていき、そのような話し手の判断に用いられる用法が、推量表現との共起を可能にしていった、と考えられる。

【否定表現を伴う】

（一九）あれがすゝめに爰へ引越。わいらをお客におれが料理。太夫も今朝からせい出して。米洗ふたり

かゆ焼たり。ヤモ**大躰**（たいてい）面白い事じゃない。　『伽羅先代萩』（大系・二八七頁・一七四九年頃）

（二〇）「イヤ、ほんに聞なせへ。腹をへらして物を食ふほど、うまい物は**おそらく**ねへによ。」

『浮世風呂』三編 巻之下（大系・二〇六頁・一八〇九～一三年頃）

（一九）は前文の事柄に対し、話し手は自分の判断によって「まったく面白くない」という気持ちを表している。（二〇）も同様に、「腹をへらして物を食うほど、うまいものはない」という話し手の判断が込められている。

例えば、「たいてい」の場合、明治以降から推量表現と共起しはじめ、推量的意味を表す陳述副詞として発展していった。しかし、歴史的にみると、「定められた範囲の中でほとんどすべて」の意で現れ、近世には否定表現と結びつき、「まったく～ない」の全面否定を表すものとして多用されていた。つまり、事態や事柄に対して否定するといった、話し手の判断が込められるようになったという最初の段階である。

以下は「たいてい」が否定表現と共起し、陳述性を獲得する過程を図式化したものである。

〈図二〉「たいてい」の否定の陳述副詞

Ⅰ「ほとんどすべて」などの意→（否定表現と結びつく）

→Ⅱ『まったく～ない』の意」→　Ⅲ「否定の陳述副詞」

【条件節を伴う】

「～ば」「～から」「～も」などの条件節との絡み合いがみられるが、ここでは代表的に「～ば」節を見てみる。

（二一）女君は、今宵来ぬを〈つらし〉と思ふにはあらで、**おほかた**聞こえ出でば、いかに北の方のたまはむ。

『落窪物語』巻之一（新全集・六四頁・九九〇年頃）

（二二）夫も夫には極らぬ。女夫子も有、又顔の似ぬ子も有。マア**大概**顔が似れば心もよふ似て。

『菅原伝授手習鑑』（大系・一〇五頁・一七四六年頃）

Aという条件上なら、Bが起きる可能性があるということを表す。しかも「おほかた」の例のように、後節に対して推量する話し手の気持ちが入るようになると、陳述副詞化していくようになる。このように、条件節と絡み合いながら推量的意味を発生させる土台を作り上げたと考えられる。

例えば、「おそらく」の場合は、未実現の事柄を前提とする表現であるから、その意味自体とかかわって意味変化したものであろう。すなわち「（未実現の事柄）を恐れている」という意として事態の実現を判断するのであるから、その実現を強く恐れる気持ちから「事態が起きる可能性が高い」という意となり、文末の推量表現と共起することが多くなったと見られる。ここでも（二四）のような条件節との絡みが想定される。そして、近世後期以降、事態に対する話し手の推量判断の意で用いられるという陳述副詞として定着していったと見られる。

(二三)『若シ其ノ書ヲ不取ズハ、**恐ラクハ**他ノ官ノ者、此ノ由ヲ不知ズシテ、亦、君ヲ捕ヘムト為』ト。

『今昔物語集』巻第七　三十(大系・一六一頁・一一二〇年頃か)

(二四)竜駕まさに都に還つて、鳳暦永く天に則る。**恐らくは**微臣が忠功に非ずんば、それ誰とかせんや。しかるに今戦功いまだ立たず、罪責たちまちに来たる。

『太平記』巻第十二(新全集・七三頁・一三七五年頃)

(二五)(右近→妻)妻「なう物狂や物狂や、夫ありながら何と妾が出られるるものでござるぞ。これはふつつりと思ひ止まらせられたがようござりませう。」右近「すれば、これほどに言うても、そちは出ることはなるまいぢゃまで。」妻「はて、何と女が出らるるものでござるぞ。」右近「よいわ。おきをらう。もはや頼まぬ。上は御清粋ぢゃ。理を以て申し上ぐるに負くるといふことがあるものか。**恐らくは**勝ってみせう。」妻「アア申し申し、まづ待たせられい。」

『聟女狂言』「右近左近」(新全集・三一五頁・室町末期〜近世初期)

(二六)さては古狸などのばくる、みこしにうだうといふものにこそ。**おそらくは**いとめんものをと、ゆみとりなをし、すびきして、猪の目すかせるかりまたの矢をとり、かの坊主のつらを目もはなたずにらみゐるに、ひた物たかくなりて、後には見あぐる事、ゆひし髪の襟につくまでせり。

『御伽物語』巻一(新全集・四六〇頁・江戸前期)

(二七)文藝院の設立などといふ話もあるが、**おそらく**嘘だらう。

内田魯庵(談)「文芸取締問題と芸術院」『太陽』1号 1909

以上の「おそらく」の陳述副詞化の過程は次のように図式化できるように思われる。

〈図三〉「おそらく」の陳述副詞化

Ⅰ「恐れていることに」→（条件節）→ Ⅱ「事態が起きる可能性が高い」
→（意志表現／推量表現などとの結びつき）→ Ⅲ「推量の陳述副詞」

次に、②推量表現と共起する前後段階で「ましょう」形、「う／よう」形などの意志表現がくる傾向を見ていく。

例えば、「きっと」は中世後期から推量形と共起し、その後、意志形とも共起関係をもつようになる。

（二八）「花ハ今夜ノ中ニ、急渡（＝急度）発ク〜〜〜〜〜〜ベシ。　『中華若木詩抄』中（一五三四年頃？）

（二九）（酒屋→太郎冠者）酒屋「エイ太郎冠者殿、わごりょの來るを待っていた。」太郎冠者「とはまたいかようなことでござる。」酒屋「内々の通いの面は何と召さるぞ。」太郎冠者「さればそのことでござる。内々の通いの面は、近々には算用致しましょうほどに、いま二、三日待たせられて下されい。」酒屋「イヤイヤわごりょの二、三日二、三日も、ほうど聞き飽いた。きょうはぜひとも算用さしめ。」太郎冠者「何がさて、近々には**きっと**算用致しましょうさて、ただいま參るも別なることでもござらぬ。」　『小名狂言』「千鳥」（大系・二九八頁）

「たぶん」も近世前期から「～かと思う」形と共起しはじめて、さらに「う」形（「う／よう」形）との共起関係が見られるようになる。

（三〇）柿主「何者ぞと思ふたれは、かたすじやよ、さりながらからすならはなかふぞ、なかずは火とである事もあたふ、人ならはにくひ事じやが、**多分**からすかと思ふ」（からすのまねをする、あどわらふて）　『鬼山伏狂言』「柿山伏」（『大蔵虎明本狂言集』上・四一七頁）

（三一）されば私が父さまもそれをいうて淨閑が聞えぬ。吝いも事による。千兩二千兩いればとて獨子の命に換らるか。地色欲をさへ離るればつい埒の明くこと。口惜しい此の治部右衞門浪人の身でなくばと。くいいうて恨言。**多分**今日も見えませう父さまの袖引いて。恥しめていはせたらなんぼ吝い親仁さまも得心なうてなんとせう。アレ父様の聲がする。やがて能いこと聞かせましょ。

『山崎與次兵衛壽の門松』（大系・三〇五頁・一七一八頁）

また、「おおかた」は平安時代に推量の「べし」形と共起しているが、近世になると、さらに「う／よう」形や「にちがいない」形なども結びついていった。

（三二）色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、**おほかたおどろおどろ**しう長きなるべし。　『源氏物語』末摘花（新全集・二九三頁・一〇〇八年頃）

（三三）（前略）**大方**かたき同士とやらでおすせう。堪忍しておくんなんし　『傾城買二筋道』（新全集・一六四頁・一七九八年頃）

このように「きっと」「たぶん」「おおかた」は推量形との共起関係から意志形とも共起するようになった。一方、以下の「おそらく」「たいてい」「たいがい」は意志表現との共起関係が先にくる傾向がみられる。

「おそらく」は近世前期に意志形との共起関係から推量形とも共起するようになる。

(三四)(右近→妻)妻「なう物狂や物狂や、夫ありながら何と妾が出られるるものでござるぞ。これはふっつりと思ひ止まらせられたがようござりませう。」右近「すれば、これほどに言うても、そちは出ることはなるまいぢゃまで。」妻「はて、何と女が出らるるものでござるぞ。」右近「よいわ。おきをらう。もはや頼まぬ。上は御清粋ぢゃ。理を以て申し上ぐるに負くるといふことがあるものか。**恐らくは**勝ってみせう。」妻「ああ申し申し、まづ待たせられい。」

『聟女狂言』「右近左近」(新全集・三一五頁)

(三五)さては古狸などのばくる、みこしにうだうといふものにこそ。**おそらくは**いとめんものをと、ゆみとりなをし、すびきして、猪の目すかせるかりまたの矢をとり、かの坊主のつらを目もはなたずにらみゐるに、ひた物たかくなりて、後には見あぐる事、ゆひし髪の襟につくまでせり。

『御伽物語』巻一(新全集・四六〇頁・江戸前期)

「たいてい」は否定文によく用いられたが、明治に入ると推量形と共起するようになる。「う／よう」形をはじめ、「だろう」形とも共起関係が見える。

(三六)謎のやうな事を申した、あの光代様さ。懇望して居るのは**大抵**お察しでせう。

川上眉山「書記官」『太陽』2号 1895

(三七)渠はかの女の財布の中と自分のポケトとをそらで数へて見て、**大抵**大丈夫だらうと決心し、かの女だけをその次ぎにつづく二等車へ乗せてやつた。

岩野泡鳴（一九一〇年頃）『泡鳴五部』一〇六七頁

「たいがい」は近世前期では意志文のなかで用いられたが、未実現の事柄を表すということから、近世後期には推量表現と共起するようになる。

(三八)思しめせ。それは先づ珍重權三殿は御存知ないか。されば存じたとも申されず存ぜぬとも申されぬ。惣じて是は茶の湯の極意。家の傳多けれども師匠市之進一流は。東山殿より的傳。一子相傳の大事なれば。權三體が茶の湯で傳授許し受けう筈もござらねども。師匠の咄聞きはつつ　た儀も有り。**大概**非の入らぬ程の御用の間には合せませうと。

『鑓の權三重帷子』（大系・二六〇頁・一七一七年頃）

(三九)（西心・白蓮・杢助）西心「サア、追暖かになって來る故、善光寺へ參詣せうと、それ故今晩お礼やら、お暇乞に上ったのじゃ。」白蓮「何、善光寺へ行かっしゃる。そりゃアいゝこったが、然しあちらは名代の雪。三月にさっしゃればいゝに。」西心「イヤ、もふ**大概**雪も片附ましたらふ。」杢助「どふして、わしらが國の雪といふものは、五月でなくちゃア解はしねへ。今の様に泪をこぼしたり、水鼻を垂らしたりすると、直に氷柱にぶら下る。」

『小袖曽我薊色縫』（大系・三八三頁・一八五九年頃）

このように、推量の陳述副詞は、意志表現と近接的な用法であることがうかがえるのである。

おわりに

本稿は推量の意を表す陳述副詞を対象に、歴史的観点からどのような変遷を経て現在になったかを明らかにするものである。日本語史の大きい枠の中で、個々の陳述副詞の変遷過程を追いながら、そこに見られる推量的意味の発生時期や陳述副詞への傾斜などについて考察した。

現代日本語の副詞においては根本的な問題に関してさまざまな見解がある。まず、陳述という概念を提唱した山田孝雄（一九〇八 他）をはじめ、時枝誠記（一九五〇）、渡辺 実（一九七二）、工藤 浩（一九八二）などの研究者によってその用語や用法などが異なる。また、従来の陳述副詞研究においては、特に推量の意を表す副詞の場合、現代語の副詞の意義特徴や文末表現との関係などの構文的機能に関するものに集中している。歴史的研究とは言っても、明治以降に見られる副詞と文末表現との共起関係を分析したものに過ぎないのが現状である。このような状況を踏まえ、本稿では陳述副詞のうち、推量的意味を表す副詞「きっと」「おそらく」「たぶん」「おおかた」「たいてい」「たいがい」を取り上げ、その歴史的変遷過程を考察した。その結果を以下に簡略にまとめておく。

「きっと」は、中古に「きと」の形で様態副詞として使用されていたが、中世前期に入って促音を介した「きつと／きっと」と表記されるようになり、ある行動や事態に対して間違いなく行うという話し手の判断を表す新しい意味が生じるようになる。中世後期以降からは推量表現を伴って、ある行動や事態に対して間違いなく行うという話し手の判断を推量するようになり、時代とともに陳述副詞として定着していった。

「おそらく」は、中古に「恐れている」などの意を表す連語の「おそるらくは」から、中世には「はばか

りなく」「事態が起きる可能性が高い」の意を表す副詞「おそらくは」が使われるようになる。それが、中世後期には条件表現などと絡み合いながら、推量的意味を強めていった。近世には推量形をはじめ、断定形・意志形などとも呼応し、陳述副詞として定着していった。明治以降には推量の「だろう」形とも共起し、主に「事態が起きる可能性が高いことを推量する」の意を表すようになった。一方、近世前期には助詞「は」が脱落した「おそらく」形も現れる。

「たぶん」は、中世前期の資料からは法語書などに偏って現れ、「限られた範囲で占める多い部分、大多数」の意を表す名詞性が強いものであった。中世後期には副詞として事柄や事態に対して「その可能性が強いことを判断していう。おおかた。多くは。十中八九。大抵。」という意味を表すようになる。近世に入ると、推量の意を表して文末の推量形と呼応するようになり、陳述副詞として用いられるようになる。近世後期には推量の「だろう」形とも呼応し、明治以降は陳述副詞として確立していった。

「おおかた」は、中古にはすでに名詞、形容動詞、副詞として用いられていた。そもそも名詞でありながら、『万葉集』などでは副詞性が強く見え、中世末期には副詞的用法が現れる。副詞として「だいたい～」「概略的に～」などの意を表すようになり、さらに陳述性が現れ、推量表現や否定表現と共起しはじめるようになる。その後、多様な推量表現と共起しつつ、近現代には陳述副詞として定着するようになった。

「たいてい」は、中古以降、名詞や副詞として用いられる中、近世には形容動詞としても用いられるようになる。しかし、形容動詞としての機能は次第に衰退していく。いずれも主として否定文とともに用いられ、現代語では「たいてい～ではない」という慣用表現として使用されている。副詞の「たいてい」は否定文では「普通程度でなく、まったく」の意、肯定文では「普通程度ではなく、たいそう」の意、節や断定文の中では「すべてではないものの、ほとんど」などの意を表す。明治以降は推量表現と共起するようになり、それが、推量的意味を表す陳述副詞へのステップと言える。

「たいがい」は、中古に「物事の大筋となる部分、あらまし」などの意を表す名詞として用いられ、中世になってから形容動詞、副詞の機能を生じさせる。形容動詞は程度性を持ちつつ、近代にまで引き継がれる。近世では、主に副詞として用いられ、前期に話し手によってある事柄や事態が起きる可能性を推量するようになり、後期には推量形と共起するようになる。明治以降は推量の陳述副詞としてその性格を強めていくことになった。

いずれも他の品詞、あるいは他の性質をもつものから推量の意を表す陳述副詞への変化が見られる。推量的意味を発生させ陳述副詞化していく時期などは異なるものの、その過程の間に「～ば」などの条件節との絡み合いや、否定表現、意志表現などとの結びつきなど、似たような傾向が現れることがわかった。しかし、今回考察の対象とした副詞は少なく、また、できる限り多様な資料を用いることを試みたものの、研究資料は膨大であって、扱える範囲が不十分であることはいうまでもない。今後は、対象とする副詞の数を増やす一方、口語資料として有用であると見られる資料を見極めつつ、陳述副詞化への進化過程を一層明らかにしていきたいと思う。また、陳述副詞として定着していく過渡期の分析も、さらに精緻になるように、これからも引き続き考察を進める余地があると考える。

参考文献

【単行本】

市川　孝（一九七六）「副用語」『岩波講座日本語６　文法Ｉ』岩波書店

井上誠之助（一九五八）「陳述と連体詞」『続日本文法講座１』明治書院、ｐｐ．１３４-１５５

太田次男他（一九八二）『神田本白氏文集の研究』勉誠社

沖森卓也（二〇〇六）『日本語史』おうふう

――――（二〇一〇）『日本語ライブラリー日本語史概説』朝倉書店

――――（二〇一二）『日本語ライブラリー古典文法の基礎』朝倉書店

春日政治（一九四二）『西大寺金光明最勝王経古点の国語学的研究』斯道文庫

川端善明（一九八三）「副詞の条件」『副用語の研究』明治書院

工藤　浩（一九七七）「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院

――――（一九八二）「叙法副詞の意味と機能―その記述方法をもとめて―」『国立国語研究所　研究報告終』（３）秀英出版

――――（一九八三）「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』（渡辺実編）明治書院

――――（二〇〇〇）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法３　モダリティ』岩波書店

国立国語研究所（一九九一）『日本語教育指導参考書１９　副詞の意味と用法』大蔵省印刷局

今野真二（二〇〇九）『文献日本語学』港の人
杉村　泰（二〇〇九）『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房
鈴木一彦他（一九七三）「副詞・連体詞」『品詞別日本文法講座５』明治書院
竹内美智子（一九七三）「副詞とは何か」『品詞別日本文法講座５』明治書院、ｐｐ．７１-１４６
時枝秀夫（一九八四）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
時枝誠記（一九五〇）『日本文法口語篇』岩波書店
中右　実（一九八〇）「文副詞の比較」『日英語比較講座 第２巻　文法』大修館書店、ｐｐ．１５７-２１９
濱田敦他（一九九一）『国語副詞の史的研究　増補版』新典社研究叢書１４８ 新典社刊行
福田良輔（一九五八）「陳述の機能」『続日本文法講座１』明治書院、ｐｐ．１-２８
益岡隆志（一九九一）『モダリティの文法』くろしお出版
――――他（一九九二）『基礎日本語文法-改訂版-』くろしお出版
南不二男（一九八八）『現代日本語の構造』大修館書店、ＰＰ．１０５-１８１
森重　敏（一九五九）『日本文法通論』風間書房
森田良行（一九七七）『基礎日本語１』角川書店、ｐｐ．１１９-１２８
森本順子（一九九四）『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
柳田征司（一九八五）『室町時代の国語』国語学叢書５ 東京堂出版
山口秋穂（一九九七）『日本語の歴史』東京大学出版会
山田孝雄（一九〇八）『日本文法論』宝文館
――――（一九三六）『日本文法学概論』宝文館
――――（一九四〇）『國語の中に於ける漢語の研究』宝文館

――――（二〇〇九）『国語学史要』書肆心、ｐｐ．１４-２５
渡辺　実（一九七一）『国語構文論』塙書房
――――（一九八三）『副用語の研究』明治書院

【学術論文】

案野香子（一九九六）「副詞の問題点」『国文学解釋と鑑賞』至文堂、通７７６-７７９
市村太郎（二〇一二）副詞「だいぶ」について―近世語を中心に―」『早稲田日本語研究』（２０）早稲田大学日本語学会、ｐｐ．４６-５７
糸川　優（一九八九）「陳述副詞の本質」『青山語文』１９　青山学院、ｐｐ．１０２-１０９
川瀬　卓（二〇一三）「副詞の歴史的研究における課題と可能性」『国語国文学』第三十四号　弘前大学、ｐｐ．１-２０
小池　康（一九九七）「副詞の共起変化の一考察-モダリティと共起する副詞を中心に-」『筑波応用言語学研究』４　筑波大学、ｐｐ．６９-８１
――――（二〇〇二ａ）「現代日本語におけるモダリティ副詞マサカの意味と用法の変遷」『文芸言語研究　言語篇』（四二）筑波大学文藝・言語学系、ｐｐ．１３-３６
――――（二〇〇二ｂ）「副詞の共起形式に関する史的変遷」『日本語科学』（１２）日本語科学、ｐｐ．４８-７１
小林幸江（一九七八）「現代語に見られる陳述副詞の研究」『日本語学校論集』東京外国語大学、ｐｐ．７１-９９

――――（一九八〇）「推量の表現およびそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』東京外国語大学、ｐｐ．３-２２
杉村　泰（二〇〇四）「蓋然性を表す副詞と文末のモダリティ形式」言語文化論集２５（２）、ｐｐ．９９-１１１
鈴木重幸（一九七二）「渡辺実著『国語構文論』」『国語と国文学』４９（１２）国語と国文学、ｐｐ．６３-６９
鈴木一彦（一九五九）「副詞の整理」『国語と国文学』３６（７-１２）東京大学、ｐｐ．５９-７０
大槻美智子（二〇〇三）「しひて」『国語副詞の史的研究』濱田　敦編　新典社刊行、ｐｐ．２５４-２８１
田和真紀子（二〇一二）「副詞は『品詞のゴミタメ』か-副詞の異名の名付けと品詞分類の問題-」『国語語彙史の研究　三十一』国語語彙史研究会　和泉書院、ｐ．９４
塚原鉄雄（二〇〇三）「『なかなかに』から『なかなか』へ」『国語副詞の史的研究　増補版』、濱田敦編、新典社刊行、ｐｐ．２８-８９
鳴海伸一（二〇一二）「時間的意味発生の過程の類型―副詞を中心に―」『国語学研究』東来北大学文学部『国語学研究』刊行会、ｐｐ．１０２-１１６
仁田義雄（二〇〇二）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』２-１０　明治書院
芳賀　綏（一九五四）「『陳述』とは何もの？」『国語国文』２３-４　京都大学、ｐｐ．４７-６１
真下三郎（一九六三）「近世『きっと』考」『国語教育研究』（８）広島大学教育学部光葉会、ｐｐ．３９１-３９５
三宅知宏（一九九五）「『推量』について」『国語学』１８３　国語学会、ｐｐ．１-１１
森岡健二（一九八四）「副用語の単位としての位置」『上智大学国文学論集』（一七）上智大学、ｐｐ．５-１０
森本順子（二〇〇八）「副詞の現在」『日本語学』明治書院、通２１８-２２２
渡辺　実（一九四九）「陳述副詞の機能」『国語国文』、ｐｐ．１-１８

【辞典・辞書類】

大槻文彦『大言海』（一九五二）冨山房
国語学会編（一九八〇）『国語学大辞典』東京堂出版
グループ・ジャマシイ編（一九九八）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
小学館国語辞典編集部編集（二〇〇一）『日本国語大辞典』第二版 小学館
上代語辞典編集委員会編（一九六七）『時代別国語大辞典』「上代編」三省堂
土井忠生 他（一九八〇）『邦訳：日葡辞書』岩波書店
中村幸彦 他（一九八二～一九九九）『角川古語大辞典』角川書店
西垣幸夫（二〇〇五）『日本語の語源辞典』文芸社
飛田良文 他（一九九四）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
――――― 他（一九九六）『和英語林集成初版訳語総索引』笠間書院
前田 勇（一九六四）『近世上方語辞典』東京堂
――――― （一九七四）『江戸語大辞典』講談社
室町時代語辞典編集委員会編（一九八五～二〇〇一）『時代別国語大辞典』「室町時代編」三省堂
諸橋轍次（一九五六・一九九九）『大漢和辞典』大修館書店
吉田金彦 他（二〇〇一）『訓点語辞典』東京堂出版

【資料一覧】

○【テキスト】『新編日本古典文学全集』（小学館）（「Japan Knowledge Lib オンラインデータベース」併用）、『日本古典文学大系』『新日本古典文学大系』（以上、岩波書店）、『噺本大系』（東京堂出版）（国文学研究資料電子資料館のデータベースも併用）の所収の諸作品を対象とする。

以下、各章で用いた作品名を挙げる。（『日本古典文学大系』は『大系』、『新日本古典文学大系』は『新大系』、『新編日本古典文学全集』は『新全集』、『噺本大系』は『噺本』と略す）

〈第一章〉『竹取物語』『枕草子』『後鳥羽院御口伝』『古今著聞集』『曽我物語』『ひらかな盛衰記』『文武二道万石通』『春色辰巳園』（以上『大系』）、『堤中納言物語』『讃岐典侍日記』『宇治拾遺物語』『四番目物（二）』『武道伝来記』『博多小女郎波枕』『冥途の飛脚』『平家女護島』『薩摩歌』『大経師昔暦』『鑓の権三重帷子』『風月花情　春告鳥』『東海道中膝栗毛』（以上『新全集』）『保元物語』『狂言集』（以上『大系』・『新全集』）『新竹斎』（以上『噺本』）

〈第二章〉『古今著聞集』『鹿の巻筆』『山中人饒舌』『菅原伝授手習鑑』『源平布引滝』『浮世風呂』（以上『大系』）『古事談』『今昔物語』（以上『新大系』）『日本書記』『出雲国風土記』『十訓抄』『拾玉得花』『太平記』『一休ばなし』『御伽物語』『男色大鑑』『平家女護嶋』東海道中膝栗毛』（以上『新全集』）『狂言集』（以上『大系』『新全集』）

〈第三章〉『妻鏡』『消息文抄』『開目抄』『春色辰巳園』『都鄙問答』『東海道中膝栗毛』（以上『大系』）『沙石集』『三道』『心中刃は氷の朔日』『今宮の心中』『好色一代男』（以上『新全集』）『正法眼蔵随聞記』『山崎與次兵衛壽の門松』『狂言集』『風月花情　春告鳥』（以上『大系』『新全集』）『昨日は今日の物語』『軽口

大わらひ』『歳旦話』『梅屋集』（以上『噺本』）

〈第四章〉『土佐日記』『紫式部日記』『詩学逢原』『夏祭浪花鑑』『韓人漢文手管始』『東海道中膝栗毛』『助六』（以上『大系』）『万葉集』『古今和歌集』『蜻蛉日記』『落窪物語』『源氏物語』『狭衣物語』『更級日記』『大和物語』『うつぼ物語』『和泉式部日記』『平中物語』『落窪物語』『狭衣物語』『栄花物語』『浜松中納言物語』『讃岐典侍日記』『大鏡』『枕草紙』『とりかへばや物語』『春の深山路』『中将姫本地』（室町物語草子集）『十訓抄』『三道』『風姿花伝』『宇治拾遺物語』『徒然草』『武道伝来記』『浮世物語』『碁太平記白石噺』『排蘆小船』『好色一代男』『妹背山婦女庭訓』『武家義理物語』『傾城買二筋道』『啞多雁取帳』（以上『新全集』）『狂言集』（以上『大系』『新全集』）『東海道中膝栗毛』（以上『大系』『新全集』）『古今秀句落し噺』（『噺本』）

〈第五章〉『保元物語』『沙石集』『お染久松色読販』『傾城禁摺本 傾城禁短氣』『伽羅先代萩』『幼稚子敵討』『韓人漢文手管始』（以上『大系』）『将門記』『野白内証鑑』『妹背山婦女庭訓』『双蝶蝶曲輪日記』『排蘆小船』『心中宵庚申』『仮名手本忠臣蔵』『遊子方言』（以上『新全集』）『狂言集』（以上『大系』『新全集』）『あごの掛金』『はなしのいけす』『名歌徳三舛玉垣』『けいせい反魂香』『浮世風呂』（以上『噺本』）

〈第六章〉『大鏡』『沙石集』『太平記』『神皇正統記』『都鄙問答』『槐記(抄)』『鑓の權三重帷子』『菅原伝授手習鑑』『歌学提要』『浮世風呂』『小袖曽我薊色縫』（以上『大系』）『連歌比況集』『三道』『風姿花伝』『排蘆小船』『遊子方言』『傾城買四十八手』『傾城買二筋道』『形容化景唇動：鼻下長物語』『妹背山婦女庭訓』『風月花情 春告鳥』『野白内証鑑』『柳髪新話 浮世床』（以上『新全集』）『狂言集』（以上『大系』『新全集』）『鳩潅雑話』（『噺本』）

○【索引類】『竹取物語総索引』（山田忠雄武・蔵野書院・1916）『平安日記文学（土佐・蜻蛉・和泉・紫・更級）総合語彙索引』（西端辛雄他・勉誠社・1996）『歌物語（伊勢・平中・大和物語）総合語彙索引』（西端辛雄他・

勉誠社・1994)『大和物語語彙索引』(塚原鉄雄他・笠間索引叢刊・1970)『多武峯少将物語本文及び総索引』(小久保崇明・笠間索引叢刊・1972)『「平中物語」研究と索引』(曽田文雄・渓水社・1985)『宇津保物語：本文と索引』(宇津保物語研究会編・笠間書院・1973‐1982)『枕草子総索引』(右文書院・1967)『落窪物語索引』(松尾聡他・明治書院・1967)『紫式部日記用語索引』(佐伯梅友他・巌南堂書店・1999)『大鏡』(保阪弘司・学燈社・1974)『栄花物語:本文と索引』(高知大学・武蔵野書院・1985)『夜の寝覚総索引』(阪倉篤義他・明治書院・1974)『成尋阿闍梨母日記の研究』(岡崎和夫・明治書院・1995)『狭衣物語語彙索引』(塚原鉄雄他・笠間索引叢・1975)『讃岐典侍日記本文と索引』(鎌田廣夫他・おうふう・1998)『打聞集の研究と総索引』(増田繁夫・清文堂・1981)『たまきはる総索引』(鈴木一彦他・明治書院・1979)『今鏡本文及び総索引』(塚原清他・笠間索引叢刊・1984)『とりかへばや物語総索引』(鈴木弘道・笠間索引叢刊・1977)『水鏡：本文及び総索引』(榊原邦彦・笠間索引叢刊・1990)『宇治拾遺物語総索引』(増田四郎・清文堂・1975)『平家物語総索引』(笠榮治・牧野出版・1998)『エソポのハブラス：本文と総索引』(大塚光信他・清文堂出版・1999)『抄物資料集成』(大塚光信・清文堂出版・1971)『色葉字類抄:研究並びに索引』(中田祝男他・風間書房・1964)『狂言六義全注』(北原保雄他・勉誠社・1991)『大蔵虎明本狂言集の研究―本文編上・中・下―』(池田廣司他・表現社・1972‐1983)

○「(CD-ROM版)太陽コーパス 雑誌『太陽』データベース」(国立国語研究所)、「(CD-ROM版)新潮文庫 明治の文豪」・「(CD-ROM版)新潮文庫 大正の文豪」(新潮社)、「『朝日新聞』オンラインデータベース」(朝日新聞社;『Japan Knowledge Lib』オンラインデータベース」利用)、「『茶漉』コーパス」の「『青空文庫』コーパス」、「古記録フルテキストデータベース」・「古文書フルテキストデータベース」・「奈良時代古文書フルテキストデータベース」(以上、東京大学資料編纂所：http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller)

【参考資料】〈工藤　浩(一九八二)による叙法副詞の一覧表〉

A　願望－当為的な叙法

a）基本叙法

1）依頼―どうぞ　どうか　なにとぞ　なにぶん　／　頼むから

2）勧誘・申し出 etc.―さあ　まあ　なんなら（なんでしたら）

b）擬似叙法

3）希望・当為 etc.―ぜひ　せめて　いっそ　できれば　なんとか

なるべく　できるだけ　どうしても　当然　断じて

cf）意志―あくまでも　すすんで　ひたすら　いちずに etc.

意図―わざと　わざわざ　ことさら　あえて etc.

B　現実認識的な叙法

a）基本叙法

4）感嘆・発見 etc.―なんと　なんて　なんともはや

5）質問・疑念　―はたして　いったい　／　なぜ　どうして etc.

6）断定―勿論　無論　もとより　／　明らかに　言うまでもなく

7）**確信―きっと**　かならず　ぜったい（に）　断じて

8）**推測―多分　恐らく**　さぞ　定めし　**大方　／　大概　大抵**

／　まさか　よもや　／　たしか　もしや　さては

9）伝聞―なんでも　聞けば　　cf）D情報源　～によれば etc.

b）擬似叙法

１０）推定―どうも　どうやら　／　よほど

１１）不確定―あるいは　もしかすれば　ことによると　ひょっとしたら

／　あんがい

１２）**習慣・確率 etc.**―きまって　かならず　**きっと**

／　とかく　えてして　ややもすれば　ともすると

／　いつも　よく　／　**大抵　大概**　普段

１３）比況―あたかも　まるで　ちょうど　／　いかにも　さも

１４）否定

イ）判断性―けっして　／　まさか　よもや　／　断じて

部分否定―必ずしも　一概に　あながち　まんざら

とりたて―別に　別段　格別　ことさら

ロ）程度性―たいして　さほど　さして　ちっとも　すこしも

一向(に)　でんで　／　まるで　全然　まったく

ハ）動作限定―ろくに　めったに　さっぱり　ついぞ　たえて

（不可能）　とても　とうてい　なかなか　どうしても

（疑問詞）　なんら　なんの　なにも　なにひとつ etc.

ニ）慣用句―毛頭　皆目　寸分　とんと　おいそれと(は)etc.

cf）否定的傾向―所詮　どうせ　どだい　なまじ　へたに

（相対的テンス）まだ　もう　いあまさら

１５）肯定―かならず　さぞ　ぜひ

cf）一般の程度副詞　ある種のアスペクト副詞

※Ａ願望－当為的叙法にも、Ｂ現実認識的叙法にも用いられるもの

きっと　かならず　絶対（に）　断じて　／　もちろん　無論

Ｃ　条件－接続の叙法

１６）仮定条件―もし　万一　かりに　／　いったん

／　あまり　よほど　／　どうせ　同じ

１７）仮定逆条件―たとえ　たとい　よし　よしんば

１８）逆条件（仮定～既定）―いくら　いかに　どう　どんなに etc.

１９）原因・理由―なにしろ　なにせ　何分　／　さすがに　あまり

２０）譲歩―もちろん　たしかに　なるほど　いかにも

２１）譲歩～理由―せっかく

Ｄ　下位叙法 sub-modality

２２）確認・同意―なるほど　確かに　いかにも　全く　／　道理で

２３）うちあけ―実は　実の所　実を言えば　本当は　正直(言って)

思い起し―思えば　考えてみると　思い起せば

２４）証拠立て―現に　事実　じっさい　だいいち

たとえ　―　いわば　いうなれば　言ってみれば

２５）説き起し―およそ　そもそも　一体　**大体**　本来　元来

（概括）　　一般に　概して　総じて

まとめ　―結局　畢竟　要するに　要は　つまり　早い話(が)

（はしょり）　どうせ　どっちみち　いずれにせよ　所詮　とにかく

２６）予想予期―案の定　やはり　はたして

めずらしく　案外（に）　意外にも　／　かえって

２７）観点～側面―正しくは　正確には　厳密には　／　詳しくはetc.

技術的には　時間的には　文法的にはetc.

（情報源）　　～によれば　～に従えばetc.　　cf）９)伝聞